

絶剣の技を持ちし者

七夜 エイト

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

気づいた知らない部屋に来ていたカザハヤ カイト。

カ「ん？ここどこ？＼（。ロ＼）（／ロ。）＼／

とそこで机に置かれていた紙を見つけて

カ「（——・）？ん？何これ？」

その紙を読んでもみると

・
・

※ f a t e 成分は A L O 編からですご注意を

目次

プロローグ	1	uence》前半	50
プロローグ2	4	異変《Satanic consequence	
原作前		uence》後編	55
設定カイト編	8	アイエエエエエエ!!○○○○!?	ナ
会合	12	ンデエエエエエエ!!	65
アインクラッド編		素材集め♪	72
原作開始	16	青い悪魔 前半	87
一層攻略会議 前	24	青い悪魔 後半	102
一層攻略会議 後	32	決闘	113
第一層攻略開始と異変	42	朝霧の少女と舞姫たち	132
異変《Satanic consequence	187	骸骨の狩人	172
		END OF THE WORLD	

A L O 編

アルブヘイム ————— 200

この世界（A L O）はある噂が流れる

222

魔剣グラムもチートだけどこつちの聖

剣と魔剣も相当じゃね？ ————— 248

大出血サービス（血はでない）でフラグ

メント収穫祭 ————— 262

ぶっっちゃけクラゲも巨人もどうでもい

いが同行者がねえ
■ ■ ■ ■ ————— 271

プロローグ

ん？ここはどこだ？あれ？ここどこ？ま、まじで何処なの!?あ、ありにままおのつて
いることを話すぜ・つていつていつていない場合ではない?!

カ「むーどうするべきかーん？これは・紙・か・」

そういつて机らしきものに置かれていた紙を取るとこう書かれていた

—————

すまんやつてもた(笑)

でも反省はするが後悔はせん!!

ふは(・▽・)は!!代わりに特典つけといた豪華な物ではないがなかなかだと思
うぞ!

まず精霊使いの剣舞から容姿にレン・アツシユベルの姿を剣技を絶剣技をつけさせて
頂いた。

とりま家と金は安心するといいい机のデスクに入れておいたからd||(^o^)||b
そこがどんな世界か自分で見るがいいさふは(・▽・)はは・ごほつごほつ
学校には行くように!!
!!!

まあなんとかなるやろあ、そういえば机に

そういつて机の中を見てみると

ガラガラガラ

そこには大量の通帳と諭吉さんだった。

カ「ゆ、諭吉さーん!?!じゃないなんこんなにあるんっすがにやりすぎだろ。まあなんとかなるだろ」

えーと通帳は。うっそやろ桁おかしいんちやう?

諭吉さんが世界人口軽く上回ったぜ。おかしいやろホントにしかも料理できんぜ出来ても簡単のしかできんぞ。ん?通帳の下に紙がまたあの神とかいう奴だろ。まあいい読むか。

そんなことだろうおもて頭中にぶちこんどいたで安心しときー

神より

おっふ。なんてこつたい／(^ o ^) \

まあ感謝しとこう明日のことあるし寝るか。やれやれ。

プロローグ2

20XX年 核の炎に包まれた—————

じゃなくて

(*・ω・) ノやおおはよう諸君いい朝だね。こんな身体でなければな

とカイトはベッドから降りて軽い体操をした。

カ「んっ・あっ・くっ・ん—————」

ε|| (?) ? () スツキリだな」

朝ごはん作るかな

—————

リビング

えーとここがリビングか

? 「おや? ずいぶんと遅い起床だね坊や。

ほら、朝ごはん作ってくれ。そうだなローレンフロスト風の朝食が食べたいねってど

うしたんだい坊やポーとして」

.....

.....
「えーと？これは一体.....」

カ「ぐ、グレイワース!? な、なんでここに!？」

そう、そこにはあの魔女のグレイワースが居たのだ!!

っついていてる場合じゃあねええ!!!

グ「何故つてそりゃ私が坊やの保護者だからさ」

カ「いやいやいや!! 聞いてない! 聞いてない!」

グ「言つてないからね」

おいこら魔女なにほざいとるこの野郎.....

グ「ほら、朝食まだかね坊や?」

カ「いやいやいや! どう作ればいいの!?! 作り方知らないよ!!!」

グ「レシピ全部頭の中にあるだろ?」

あつ忘れてた.....仕方ないやるか

カ「わかった。しかし!」

グ「何かね? 坊や」

カ「ちゃんと説明してもらおうぞ。あと坊や言うな」

グ「フツ.....だが断らせていたただこう」

カ「なんで知ってるんだそのネタ!!」スタスタスタスタ

くそおなんでこんなことに・とりあえず作るか

カ「ほれ、出来たぞ」内心ドキドキ

ヴ「ふむ、うまくできているな」感心

カ「くつ御託いいから早く食えっの」超ドキドキ

ダ「どれ？」モグモグ

ど、どうかはじめてまともなのをやったけど行けたかな？

ダ「へーやるじゃないか坊や」ナプキンでフキフキ

カ「フンツ」内心ほっとしている

さ・さ・て

カ「説明してもらおうぜ」

ヴ「ふむ・よかろう」

簡単に言う・と剣技のことらしい・なんでも教えるためにいるらしい

カ「……はあ!? う、嘘だろ!」

グ「……なんだね? 急に声を荒げて・もっと上品にしな」

カ「す、すまない・じゃなくて俺は男だ!! なんだよ! 上品って!!」

グ「……とりあえず座われ」

この魔女お

グ「とにかく坊やにはこの絶剣技を習得してもらわないといけないからね。身体で覚

えでもらうぞ」

あははは 原作始まるまでに生きていられるかなあ

原作前

設定カイト編

この本の主人公

☒カゼハヤ カイト☒

プレイヤー名：カイト

メイン武器：片手直剣途中から二刀流

性別：男の娘？おい 歳：キリトと同年

身長：165 cm 体重：48 kg

見た目：まんまレン・アツシユベル。ゲーム内では髪が青。髪の長さは腰まで髪は切ろうにも切れない。

性格：優しくて多分鈍感

好き物：料理、お菓子、剣、昼寝、ゲーム

嫌いなもの：うざい奴、グレイワース、外道な奴

習得した絶剣技

初（はつ）ノ型（紫電（しでん））

部位破壊剣技。実際はただの突き技だが、極めれば別次元の技になる。現実でも発動可能だがさすがにキツイらしい。

二ノ型〈流星（りゅうせい）〉

紫電の派生系剣技。絶剣技の中でも随一の威力をほこる。

神威に下向きの指向性を持たせて一気に解放する。

三ノ型〈影月円舞（えんげつえんぶ）〉

片足を軸にして旋風のような回転切りを放つ対集団戦用の広域殲滅剣技。

四ノ型〈焰切り（ほむらぎり）〉

斬撃の旋風に炎を巻き込み吸収し、自分の剣に炎属性を付与する対炎属性の特殊剣

技。だがカイトの場合放つとき摩擦熱で放つ。

六ノ型〈砕破の牙（さいいはのきば）〉

刃を通じて衝撃を貫通させる邪剣に属する武器破壊剣技。カイトはこの技はあまり

好きではない。

七ノ型〈咬竜（こうりゆう）〉

対空絶剣技。

グレイワースの〈流星〉に対して使用したが、不完全に発動したため押し負けてしまった。

破ノ型〈烈華螺旋劍舞（れっからせんけんぶ）〉

対精靈用の破壊劍技。○○連と連撃で繰り出されている。現在の最高は36連。本来は二刀流の技だが、カイトは一刀でも発動可能。

グレイワースに「森にキノコ狩りに行く」とだまされて連れて行かれ、とてつもなくデカイ熊と戦った時に会得したらしい（カイト曰く「会得していなければ死んでいた」とのこと）。

霞ノ型〈水影鏡（すいえきよう）〉

自分の残像を作り、回避をする。

閃ノ型〈死蝶閃舞（しちようせんぶ）〉

神速の反撃（カウンター）を放つ劍技。

カイトは幼少のころに何度も見ていたため、致命的な一撃は回避することができた。

終（つい）ノ型〈天絶閃衝（ラスト・ストライク）〉

絶劍技の最後の奥義で対最上位ソードスキル用の劍技。相手の攻撃を防御しつつ儀式神楽によって劍技に干渉をしてカウンターとして相手に叩き込む技。未熟なものが使えば使い手の肉体を破壊してしまうらしい。

〈天双絶閃衝（ラスト・ストライク・デュアル）〉

二刀流として発動できる剣技。

双剣ノ型〈紫電・改〉

双剣を交叉させ、2本分の紫電を放つ。

二刀流になったときに使っていた。

オリジナル絶剣技

月ノ型〈十六夜（いざよい）〉

満月を模様した剣技。縦の数回転して発動する。

発動したとき昼でも満月があるように見えてしまう。

月ノ型〈半月（はんげつ）〉

半月を模様した剣技。縦に半回転させて発動する。

発動すると半月が見えてしまう。

多分まだ出るかも

▪▪▪

会合

!!

あれから何年かはたった。学校行けとか言われてマジでびびった。いや、それよりもだ。

かなりいや、かなりどころではなかった。

何回も死にかけた。(; ; ; ; ; ; ; ; ; ;)

グレイワースの婆さんが放つ絶剣技がヤバすぎる!!

ふむ・わからない奴のために教えおう。

まず絶剣技の最初に〈紫電〉を教えてもらった。何あれ!!

速すぎね!! いや! あれくらってコツを挿んだ俺もそうだけどさ! あれリアルでもで

きるんだぜ(ここ重要)

試しにやってみた結果——足がやべえ(; ; ; ; ; ; ; ; ; ;)

まあ、こんな感じに行っていったんだけどな(ーωー)

料理がグレイワースの婆さんのおかげでさらに上達したし趣味としてお菓子作りをするようになった。まる。

—————

そんな感じの生活だった。生きた心地がしなかったが、最終奥義まで取得できた。嬉しいと思う。

学校については転校生扱いとなっているからな。

さて、学校行くか。

先「やあ、今日この学校に転校してしてくれる生徒だね？名前を教えてくださいませんか？」

カ「あ、はい！えーとはじめまして、カゼハヤ カイトです。宜しくお願い致します！あ、あと男です。」

先「（この子は）そうか。ならば早速みんなに挨拶しに行こう。ついてきたまえ」

〔教室前〕

先「いいかい？なにがあつても意識を保つてくれ。」

カ「はっはい。（一体何が）」

〔カイトの意識内〕

カ1「何が始まるんです？」

カ2 「・・・大惨事大戦だ」

「いやいやいやナイナイ（ダノ・V・こ）

そんなはずが「女ですか?! 女ですよね?! 女だな!!」Σ（ㄩ。；／）／えー 嘘やろ!?!
 どこぞのハーレムアニメみたいな野郎がいるというのか!?! くつくそー「入って来なさい」

カ「はっはーい」ウー★この姿をあまり見せたくないんだけどなー

「教室内」

はじめまして!! このクラスに 転校生が来るらしいんだけどどんな子かな?

ガラガラガラガラ

あつ来た!!

カ「(なつなにこれ) なんでみんなしーんしてるの!?!)」

先「ほら自己紹介しなさい」

カ「か、カゼハヤ カイトです。宜しくお願ひ致します

ー

.....
 ちよつと!? なにk「うおおおおおおお」きやああああ
 あああああああ (; ㇿ) なん・だと!こ、これは一体!! あっそうだ
 !!

カ「あつあと!!俺は男です!!」

クラス「な、なにイイイイイイイイイイイ!!」

 クラスのみんなと話をし質問をしみんなと仲良くなった頃一人の少女が話しかけてきた。
 !!??

はあ・疲れた・中学校に行きたくなかったよ

? 「n ⊗ ∇ ⊗) ㇿねえねえ!!カイト君!!」

ん? 誰だ・こっこいつは!!

? 「僕、木綿季だよ!!宜しくね!」

これから・こいつとの生活が始まる。この先何が始まるのかは本人でさえわからない。
 ?

アインクラツド編

原作開始

やあ、カイトだぜ！

あれから一年近くたってβ版 来たけどやることができなかつたチヨー悔しい (ノ、
 (≡皿≡メ)ノ)

まあその数年間木綿季といたから 楽しかつたからいいがグレイワースとの 生活
 はあまり良いものと言えなかつた。

ユ「残念だつたらしいね。なんだっけ？えーと
 ユウキが可愛らしく首を傾げていたので
 ・・・」

カ「SAOな」

ユ「あ、そうそう!!」

くつかわいすぎるぜ (＊、▽、＊)

代わりにさらにいいもんゲツトしたからいいね！

カ「そういえばお前って sa o やるの？」

ユ「んーわかんない！」にばあ

カ「まあ 製品版買えたからいいんだけどね」

ユ「じゃあ僕これで」

カ「また明日な」(*?▽?)ノ~~~~♪

よーしゞ(・ω・)ノ♪ 帰って ナーブギアの準備だぜ(*?・▽・)つ

—————

よし 早速 sa o をダウンロードしてつと

やべ!!超やべー オラわくわくしてきたぞ!!、(。D。)(。ノ。D。)(。ノ!!

カ「!!!よつしやきたー!!!キター(。A。)(。——」

よし!!ぎ sa o の世界へレッツスタート!!!!!!

—————

おお ここが sa o の世界なのか。

さすが茅場晶彦 ゲームのはずなのにこのリアル感超ばねえ

カ「さて早速自分に合う武器を探しに行くか まずは武器屋かな?」

さて早速行くかな・えーと?どこで試したらいいのかな?

?「おーい!!!そこにあんた!!!」

ん?誰だ? バンダナ付けたおっさんがこっちに走って来るぞ?

カ「そうしたんだ？」

ク「お、おう！俺の名はクラインって言うんだ！なあ、あんた ベータテスターだろ？指導してくれねえか？」

んー困った 俺ベータテスターじゃないんだよなあ

仕方がないはきり言うか

カ「済まない 俺は ベータテスターじゃないんだ期待に応えられなくてすまない」

ク「そ、そうか。 いや無理にお願いしたこつちが悪かったぜ」

カ「なら一緒に探さないか？ 俺も初心者だから やり方がわからなくて」

ク「おう！ そうだな！ 一緒に探そう！ん？ おい、カイト。 あれそうじゃねー

の？」

カ「そうかもしれないなじやあ声かけてみるか」

やれやれクラインの奴少し 落ち着けないのかな

ク「なああんた ベータテスターか？ 指導してくれないか こいつの分も含めて」

カ「誰が こいつだ誰が」

？「あ、ああ。 いいですよ」

ク「敬語はいらねえぜ！ 俺はクライン！ でこつちがカイトっていうんだ」

カ「どうもカイトっていうんだよろしく頼むぜ」

? 「宜しく。俺の名前はキリトって言うんだ」

「どこかの草原」

おつす、カイトです。今俺はキリトクラインと共に草原にきている。

ク「うおおおおりやああああ!!!」「ピギイ!」ぐはあ・なんだと!!」

こんな感じになってます。俺の場合は・!?!

カ「絶剣技初（はつ）ノ型（紫電（しでん））!!!」

ピギイ!つと 泣いた後にガラス片となつて散つた

ε||（?。?）・こんな感じでもいいかなまさかここでも使えるとは

はいえ人間とは一緒か・

ク「お、おい! 何だ今のはカイの字!」

カ「何って何が?（なんだよカイの字って・）」

ク「今のソードスキルだよ!!!」

ああ・そういうことか・

カ「普通の剣技だよ!」

キ「ち、ちよつとまつてくれ! ソードスキルじゃあないか!」

ゲームと

カ「(？▽？；)、ああそうだ(汗)」

ク「す、すげー見えなかったぞ。な、なあキリト。お前見えたか？」

キ「い、いや。見えなかった。で、できれば戦いたくないな。」

カ「む。ひどいことを言うではないか。」

いまだダレイワースに勝てないんだぞ。

カ「買いかぶりすぎだぜキリト。」

ク「おつ！　こんな時間か！　もうすぐピザが来る時間なんだよな。ここら辺で俺落ち

るぜ！　おめーらはどうする？」

カ「俺はまだ試したいことがあるからまたここにいるよ」

キ「俺もまだいいよ」

ク「そうかじゃあまたなー」

そう言っつてクラインンはウインドウを開いてログアウトボタンを探し始めた。する

とだんだんクラインスが焦りはじめた。

ク「あつあれ!!　ログアウトボタンがね!!」

カキ「そんなバカな!?!」

俺とキリトは必死になってログアウトボタンを探し始めた。!

カキ「本当にない。ログアウトボタンがない。」

しばらく呆然と立っていると 遠いところゴーンゴーンと鐘の音が

・不気味音色だな

ん？ うおっ!? 転移させられる!?

ん？ 一体なんだ!?

どこかの誰かが叫んだ

「お、おい！ あそこを見ろ!!」

プレイヤー全員が見た

な、なんだあれは・下半身がない!?

？ 「ようこそ私の世界へ プレイヤー諸君。私の名前は茅場晶彦。今やこの世界を
コントロールできる唯一の人間だ」

なっ!? か、茅場だと!?

茅場 「これはSAOの本来の仕様であり、また外部の人間の手によるナーヴギアの停止又は解除もあり得ない。仮にそれが試みられた場合、ナーヴギアの信号素子が発する高出力マイクロウェーブが脳を破壊、生命活動を停止させる」

なっ！なんてことを!!

茅場「すでに多数の死者が出たことを含め、この状況をあらゆるメディアが繰り返して報道している。よって、外部からナーヴギアが強制的に解除される危険は低くなっていると云っている。諸君らは安心してゲーム攻略に励んでほしい」

カ「ふざけるな!!!こんなんでどう攻略すれと?!」

茅場「諸君らが解放される条件はただ一つ。このゲームをクリアすればよい。現在、君たちが居るのはアインクラッドの最下層、第一層である。各フロアの迷宮区を攻略しフロアボスを倒せば上の階に進める。第百層にいる最終ボスを倒せば……クリア」

100層・だと・

茅場「それでは最後に、諸君のアイテムストレージに、私からのささやかながらプレゼントが用意してある。確認してくれたまえ」

なんだ プレゼントだと・

カ「うおっ!?!」

カ「なっこ、これじゃ?!」

カキク「お、お前なのか?!」

なんてことをこれじゃあ女扱いを受けてしまう

ク「カイトお、お前女だったのか?!」

カ「お、俺は男だ!!」

茅場「では頑張ってくれたまえ。 健闘を祈る」

その日 ゲームマスター もとい 茅場晶彦に よって s a o はデスゲーム化した。
それと共に日常が崩れ去った。

一層攻略会議 前

デスゲームが始まってから 何日かたった。

そのたった数日で 200人以上の人が死んだ。 そのまた数日後に第一層攻略会議が始まっていた。

「デスゲームが始まってから」

くそっ。 なんてこんなことに！ こんな所で飽めるわけが行かない

キ「二人ともこっちに来てくれ!!!」

キリトに 連れて行かれた俺たちは路地裏に入った。

キ「お前ら二人俺についてこい この先にホルンガ村というところで片手剣のクエ
ストがある。」

キリト はとても焦った様子でそう言った。

キリトの言葉を聞いたクラインがこう言った。

ク「でもお・キリト! 俺には仲間がいて一緒にする約束をした奴らと一緒に行かないといけないんだ。 すまねえキリト。」

キ「そうかわかった。カイトお前は どうする」

カ「!!」俺は ついて行こう早くではレベル上げたいしこのゲームを攻略したい一刻も早く!!

「そしてあいつにも会わないといけない 無事な姿を見せてやりたい 死ぬわけには行かない」

キ「わかった行こう俺についてこい」

ク「じゃあなおめーら お前ら二人 可愛くていいぞ!!」

カ「ははっそういうのは 彼女さんに言っつてやんなよクライン!!」ク「う、うるせえぞ!!」

キ「じゃあ何とか 頑張っつて生きろよ」

「そう俺たちは言葉を交わして別れた。俺ときりとは 道を阻むモンスターたちを倒しながらホルンガ 村へ向かった。俺ときりとは 道を阻むモンスターたちを

カ「ここからキリトホルンガ村つてやつは」

キ「ここがホルンガ村だ。ここにあるクエストをクリアすると片手剣がもらえる」

カ「ギルドクエスト受注頼めるか？」

キ「わかった」

カ「早速来たなキリトどれを倒せばいいんだ!？」

キ「花の咲いてるやつを頼む 出現率が低いから ネバランと出てこないぞ」

んじゃ! いくぜ! 俺のソードスキルじゃないけどww

カ「初(はつ)ノ型(へ紫電(しでん))」

発動 自体は簡単だ なぜなら 紫電はただの突き技なのだから しかしこの技を

極めれば神速の技となる

パリッン!!

カ「おつ来たドロップしたな」

キ「相変わらずすごいなあ その技。 どうだった？」

カ「ん? ああ ドロップしたぞ一個」

キ「なぬ! は、早いな」

安心せい ちゃんと集まったらあげるで」

キ「お、おう悪いな」

カ「あれ? 声が出てた?」

まあいつか 人の気配

カキ「誰だ!」

そう言つて俺たちは剣を振るうと

? 「うわっ!! す、ストップストップ!!」

キ「君は誰だ」

コ「コペルって言うんだ。このクエストと一緒にやらないか?」

そう言ったコペル 俺がキリトにアイコンタクトをとると キリトは頷いた

—————

カ「コペル スイッチ!!」

コ「うん!!」

スパーン!! と音がなり周りに 青臭い匂いが漂い始めた

キ「なっ!!」

コ「キリトごめん」

そう言つて コペル は索敵から反応しなくなった

これがキリトの入っていたモンスタープレイヤーキルか

キ「知らないのかコペル。このモンスターは 隠蔽が効かないんだ」

そうキリトが入った後そこには胚珠が落ちていた

わーお 本当にこのモンスターには隠蔽が効かないんだなまあ取る気ないけど!!

つて そんな悠長なことを言っている場合ではないかモンスターに囲まれた

急に片付ける!!!

早

カ「ハアツ!!」

キ「カイト!?何を!!」

このまま待つてきの中心に突撃してぶっ放す

カ「絶剣技 三ノ型〈影月円舞（えんげつえんぶ）〉!!!!」

そう叫んで自分の足を軸に一回転したそしたらモンスターは一気にガラス片となつて散つた

カ「ふうつ やつたぜ○（▽）○」

キ「なんかお前を見ていると変な感じになるぜ」

—————

ふうつ なんとか2人分が集まったぜいや レベル上がった13まで上がったぜ

大漁大漁あとは剣 をもらうだけだな

カ「キリトお前レベルいくつになつた？」

キ「ん?ああ おらレベル1だ」

カ「あつ勝つた」

そんな感じで会話をしつつ村へ戻つた

そして念願のアニールブレードを手に入れた

どうしよつかない 鍛冶スキルとるかな? 料理 スキルもとるか枠が空いたらな

キリトと別れて1日が たつてまた俺たちは再会した

やれやれあまり見られたくないからフードを買っちゃったじゃんまあこれであまり話しかけられなくなったが、そうだ鍛冶スキルをとって アニールブレード強化したんだ +8までやったぜ ヨカツタヨカツタここまで強化できてほんとよかった 失敗するかと思った けど自分の運を信じて良かった キリトたちはそろそろくるかな？

キ「おーい!!カイト!!」

カ「キリトか!!こつちだ!!」

キ「あれ? いつワードを買ったんだ?」

カ「ほらあれだよ、あまり見られたくないからだ」

キ「ああ、そういうことか」

カ「おい、キリトその女プレイヤーは誰だ?なんだ?ナンパでもしたのか?」

?「!?!」

キ「してねーよ!!!」

カ「ハハツジョウダンダ」

キ「お前の場合 冗談に聞こえねーよ」

カ「むっ失敬な」

キ「まあいいや。こっちはアスナって言うんだ」

ア「アスナです」

カ「よろしく頼むよ。そうそうキリトアニールブレード最終強化行けたぜ」

キ「はあっ?!なにしてるんだお前は!!」

カ「まあ 成功したからいいじゃないか」

キ「まあいいや。なあカイト」

カ「なんだ？」

キ「一緒に第一層攻略会議に行かないか？」

一層攻略会議 後

どうも、カイトです。男の娘です。

キリトたちに 攻略会議に誘われたぜ
ん？ちよつと待て！

カ「攻略会議だと？！見つかったのか？！」
ずつと レベリングしてたから分かんねえよ

キ「お前のことだろうからでずつとレベリングしたんだろうな」

カ「なぜばれたし」

ア「あなた達攻略会議はどうするのよ」

カ「なんだアスナ いたのか」

ア「ちよつと！！それ どういう意味よ！！」

ニブニブニヴニヴニブニブニブニブニブ

な、なんだ？！アスナの後ろから謎の凄まじく恐ろしいものを感じる！！こ、こいつは何

なんだ？！汗が吹き出る！！て、も、震えてきた。こ、こいつの恐ろしさはD I O異常

だ！！！！

キ「お、おい 大丈夫か震えてるぞ？」

カ「ア」

キ「は？何だつて？」

カ「逃げるんだあ 勝てる訳がないYO☆」

キ「ちよ!!カイト!! 体どうしたんだ!!」

カ「ひ、避難する準備だあ!!!」(アスパラガス風)

ア「どこへ行くの？」ギユピ☆ギユピ☆

カ「お、お前と一緒に攻略会議に行く準備だあ!!!!」

ン「ン」オ「オ」ア「ア」

ウ「オ」オ「オ」ジブンノパーティーメンバーニコロサレルトワ

イ「エ」エ「エ」エア「ア」ア「ア」ア「ア」ア「ア」

ε|| (?。?)

何か 成し遂げたような気がする

いや現実逃避はやめよ

キ「うわっ!!ま、まずい!!いかんスイッチが入った!」

キリト カイトを宥めていると 声がかかった

? 「はーい!!!」 それじゃっ、そろそろ始めさせてもらいま〜す!!」

お? そろそろかな?

その声の主は舞台の中央に立ち、参加者の注目を一斉に集めた。

二十歳前後、カスタマイズして染めた青い髪に両腕、両肩、胸にブロンズの鎧を身に付けた、同世代が羨むような爽やか系のイケメンだった。

「うらやましい……」と女顔を気にしているキリトはため息交じりに呟き、隣のカイトは、これが日常になることを悟った。

? 「今日は、俺の呼びかけに応じてくれてありがとう。俺はディアベル、職業は気持的にナイトやつてます!」

う、羨ましいあんな顔が羨ましい!! 妬ってやる!! パルパルパルパルパル

ア「何をやっていたいのあなたたちは?」

カキ「いや世界は残酷なんだなって」

本当に 世界は残酷なんだね 初めてこの意味を知ったよ 目の前でね

デ「今日、俺達のパーティがああ塔の最上階で、ボスの部屋を発見した!」

その言葉は参加者全員にどよめく、S A Oが始まりすでに一ヶ月が過ぎでようやくの

ボスの発見。それはいよいよ本格的な、SAO攻略の開始を告げるものである。

だが、その間に死んだプレイヤーの人数はすでに二千人を越え、開始を告げるにはいささか遅いのもかもしれない。

デ「俺達はボスを倒し、第二層に到達して……このデスゲームもいつかきつとクリア出来る事を、はじまりの街で待っている皆に伝えなきゃならない！それが、今この場所にいる俺達の義務なんだ！——そうだろ、皆！」

拳を作り、参加者全員の心に届くように、強く強く力説した。

そうだ。俺もこのゲームを終わらせて あいつに会うために

デ「OK。それじゃあ、早速だけど、これから攻略会議を始めたいと思う。まずは六人のパーティーを組んでくれ」

カキ「——へっ?!」

なん。だと。

どどどどどうしよう?!パーティー?!パーティーだと?!ありえん(笑) ととととりあえず!組まなければ!?

あつきリトをこつちを見た!!

ガシツイイイイ!!

カキ「よし!!組もう!!」

何処からどうみても片方が不審に 見えるが とても強い何かを感じる握手であつた

ア「え、え、え？」

アスナは それを見てただ驚いていた
すると

？「ちよつ待つてんかー!!!」

な、なんだーあいつはあのとんがり頭は!!

キバ「ワイはキバオウつてもんや。ボスと戦う前にいつペン言わせてもらいたい事がある。こん中に、今まで死んで逝つた二千人に！ 詫びいれなあかん奴らがおるはずや
！」

キバオウ（とんがり頭）はプレイヤー全員を指さすように指先をキツと向ける。

キリトはとんがり頭（キバオウ）がこれから何を言おうとしているのか察しが付いたのか、微かに顔を曇らせ、また顔をしかめてもいた。

デ「キバオウさん。君の言うアイツらとはつまり、元βテスターの人達のこと……かな？」

んだ？あのとんがり頭（キバオウ）の野郎は？今までとつた物をよこせだど？

？「こつちから発言、いいか？」

キバ「な、なんや自分」

で、でかい・凄く・大きいです

エ「オレの名前はエギルだ」

両手斧をもった大男がそう名乗った

エ「つまりあんたはこう言いたいんだな？βテスター達が初心者を見殺しにした謝罪

と賠償をしろと」

キバ「そ、そうや」

カ「なあとんがり頭」

キバ「あん？なんや？自分？」

キリ「なっ！カイト！何を！」

カ「一言を言いたい。あんたそのベータテスターからとったものを どうするつ

もりだ？以上だ」

キバ「!?ぐっ」

エ「これを知ってるか？」

そういつたエギルは懐から本を取り出した

エ「これは道具屋で無料配布しているガイドブックでモンスターの戦い方から、クエ

ストの受け方、スキルの設定方法に至るまで初心者にSAOの基礎システムを分かり易

く教えるに作られた手作りの指南書だった。」

あああれねちよつと便利なんだよね。あれ

ん？キリトどうしたんだ？何？もらってないと！！（（*≧艸≦）ププツ（ノ、）、

。アヒヤヒヤヒヤヒヤ

エ「いいか、情報は誰にでも手に入れられたんだ。なのに、沢山のプレイヤーが死んだ。その失敗を踏まえてオレ達はどうかボスに挑むべきなのか、それがこの場で論議されると、オレは思っていたんだが……な」

デ「よし、それじゃあ再開してもいいかな？」

デ「ボスの名前は《イルフアング・ザ・コボルドロード》。それに《ルインコボルド・センチネル》と言う取り巻きがいる。武器は斧と円盾でありHPゲージは四段、最後の一段が赤くなると武器を曲刀のタルワールに変え、攻撃パターンが変わる」

カ「そんなのか？キリト」

キ「ああ。ガイドブックに書かれた事は、β版と同じで間違いない」

カ「……β版と同じねえ」

ん？念のためだ言っておくか

カ「ちよつといいか？」

デ「カイトは？」

カ「オ、オレの名前は……カイト」

カイトはさすがにフード被りながら話すのは失礼だと思いフードを脱いだ。すると他のプレイヤーが「おお」「女の子だ」「美少女だ」ウーだから外したくなかったのに、てかデジジャブに感じる。

カ「ディアベルさんだっけ？えーと質問するがその本には、ベータテストと同じと書いてあるんだな」

デ「ああそれがどうしたというんだい？」

カ「その本に、β版と仕様が違う可能性は無いのか？ β版は正規版直前の試作みたいな物だろ？ 夜のフィールドと同じで、凶暴化や経験値上昇が追加したように……武器が違おうとか」

瞬間、ディアベルのなかで衝撃が走った!!

ディアベルはカイトの言葉に、はっと気づいたように口を閉じその場で考え込んだ。

実際、β版と仕様が違う箇所は夜のフィールド同様、多々ある事はすでに分かっている。売買金額が違う、Mobのアイテムドロップ率が違う程度で夜のフィールドほど大きな差異は無かった。

デ「………ボスの仕様が違う可能性か、否定はできないな」

カ「色々々々考えるべきだと思う」

デ「具体的には？」

カ「ええつとくく……もし武器が違うなら、色々な武器を集めて誰かプレイヤーを仮想ボスに見立てて経験を積むとか、異常状態狙いで特殊効果付加の武器を鍛冶屋に頼むとか……パーティの訓練を積むとか……適当でごめん。説明苦手で。」

デ「——いや、万全を期す為、死者を出さない為にもあらゆる可能性と手段を俺は考慮すべきだった。ガイドブックの内容を鵜呑みにしない君の考えは正しい。——どうだろう皆！ 彼女の提案から、ボスとの戦闘を想定した模擬戦をするのは!!」

——俺は男だ!! と言うのは心のなかにしまっておこう。

ディアベルの提案に拍手と賛同の声がドッと吹き出した。まるで、応援する議員が選挙で当選した時の支援者達のような喜びようだ。

デ「OK、では一先ず解散しよう。俺のパーティは模擬戦の場所と鍛冶屋を探す。君達は各自パーティ内で十分に親睦を深めてくれ！ そして、明日のこの時間にまたここに集合！ では——解散!!」

第一層攻略開始と異変

ボス攻略会議から三日が過ぎ、予定では会議の翌日にボス戦をする気だったディアベルだったが、カイトの提案から死者を無くし確実に攻略出来るようにする為、模擬戦・武器の調達、パーティの訓練に時間を費やした。

そして、二〇二二年の十二月六日の朝十時にカイトを含めた、AからEの六人一組の隊と三人一組のF隊の総勢三十四人が、ボス部屋を目指し迷宮区へ出発。

……数時間後、三十四人の内誰も欠ける事なくボスの部屋の門の前までたどり着いた。

デ「聞いてくれ皆、俺から言う事はたった一つだ——勝とうぜ」

おう!!そのつもりだぜ!!

負けるつもりはねえからなあ!!!

剣を地面に突きたて鉄扉の正面に立つディアベルは、最後に三十三人の士気を鼓舞し再び身を引き締める。

次の戦いに勝てば第一層攻略は完了、次の第二層へと進め《はじまりの街》にいるプレイヤー達に「終わりは必ず来る」と小さいながらも希望を与える事が出来、攻略が進

めばそれは徐々に大きくなり、太陽のような大きな希望に変わると信じていた。

だがカイトは 胸の中で何かがざわついていた

「行くぞ——」

ディアベルが先頭を切り、鉄扉は重々しい音を鳴らしながらゆつくりと開き続々とプレイヤー達が続いた。カイトちも続いて中に入った。

部屋は薄暗く、扉から差し込むわずかな光だけが部屋を照らすだけだったが縦長に広く床に紋様、部屋の両端に等間隔で支柱が並んでいる事は分かった。

カ「薄暗いな……」

ア「埃っぽい」

キ「二人とも……部屋の奥にボスがいる」

この奥に何かがいるっつ !!

最後尾のカイトとアスナが部屋の感想を漏らしていると、キリトが剣で静かに部屋の奥を指した。

目を凝らして部屋の奥を見たカイトとアスナの眼に、薄気味悪い赤い点が並んで浮いている事に気づいた。それがすぐにボスの眼だと分かった。

先頭のディアベルが部屋の中心近くまで進んだ所で、天井と壁にまるで水に浮いた油

のように色彩ある光が部屋全体を照らし、合わせるように部屋の奥から赤い巨体が飛び出し咆哮を挙げた。

全長は三メートルを優に越え、豚のように肥えた腹と丸太のように太い筋肉の手足、人を容易に吹き飛ばすであろう尻尾に全身を覆う警戒色の赤い肌。

頭に艶のない古代ギリシヤの兜コリユスを被り、両肘・両膝に鉄のサポーターを付け、右手に石で出来たような無骨な斧、左手に人間の上半身を隠せるほどの鉄の円盾を付けた第一層フロアボス《イルファング・ザ・コボルドロード》が姿を見せた。

呼応するように人と同程度の大きさの取り巻き《ルインコボルド・センチネル》が三体、コボルドロードの前に出現した。

ティアベル以下全員が戦闘体勢に入る。ボスとの距離は五十mほど、敏捷値の高いプレイヤーなら十秒とすらかからない距離だ。

大丈夫だ!! イレギュラーがない限り大丈夫なはずだ!! みんな訓練をしてきた!!
——— グルオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!

《イルファング・ザ・コボルドロード》が声をあげたと同時に、ティアベルが戦闘開始の合図を告げた

デ「攻撃開始ー!!」

『うおおおおお———』

戦闘開始から 数十分 ほどが過ぎ、F隊のカイト・キリト・アスナの担当するのは取り巻きであるセンチネルの討伐。

ボスであるコボルドロードが撃破されるまで、何度倒しても出現するセンチネルだが、決して苦戦するような強い敵とは言えないが、無限に出現するので厄介な敵ではあった。

しかし、考えを変えれば無限に出現する上に強くも無く経験値も普通、経験値稼ぎの相手にはもってこいの敵とも言える。

うまい、経験値うまい。

この攻略での経験値の分配は、M o bを倒したパーティの総取りである事が決められている。ボスを倒すよりも一度に貰える経験値は少ないにしても、確実に経験値は稼げる。しかし、最大五体までしか出ないようになってるのが惜しい。

カ「ふふ・まずお前から血祭りにあげてやるウウウ!!」

M o b「!?!?」

センチネルが自分の命の危機を感じとりカイトに襲い掛かった。センチネルは思った。こいつはやばいっつ

カ「集団・リンチ・だと? そんなことなど、無駄無駄無駄無駄アツ!!」

カ「絶剣技・三ノ型へ影月円舞(えんげつえんぶ)!!!」

カイトは 自分を囲っていたセンチネル達を 一気に倒しきたしかし倒したと同時に上から襲って来た

センチネル「ギギツ!!」

カ「上からか・だが甘い!! 絶剣技七ノ型へ咬竜(こうりゆう)!!!」

カイトは即座に、対空技の七ノ型へ咬竜(こうりゆう)を放った。

キ「相変わらず凄いあ」

カ「どうよう——! 凄いだろう!!」

とするとガキツン!! と音が聞こえた方を即座に振り向きカイトは《アニールブレード》を構えながら走った。

ア「スイツチ!!」

その声を発したのはアスナだった。

この 2週間で見事と言えるほどの剣筋とコンビネーションを持つことができたカ「絶剣技初(はつ)ノ型へ紫電(しでん)!!!」

さらに十分という時間が過ぎて——断末魔の咆哮を上げながらコボルドロードはポリゴン片となって散り、残っていたセンチネルもその一分後に全て散った。この瞬間、空中に《Congratu Lat ions!!》と表示がされ、フロアボス《イルファング・ザ・コボルドロード》が倒され、第一層攻略完了を示した。

プレイヤー達 ボスを倒すことに喜んでいた。

初めてのパーティテイそれもボス戦なのだから、アスナの疲れを吐き出す安堵のため息は当然の事だった。

さすがのカイトとキリトも疲れてはいるが、SAO初日にセンチネルの五倍以上の敵を数時間に渡って倒し続けた経験からアスナよりは動きに無駄がない事に加え、女子の前でへばる姿を見せたくない男子としてのプライドも支えになった。

ボスにラスト・アタックを与えたプレイヤーに与えられる、レアアイテムはディアベルが手に入れたらしく、それは真つ暗なロングコート、子供のように周囲に見せびらかしながらボス戦に勝った事を喜んでいた。

カ「キリト、譲るのを頼んだら？ 好きだろ黒？」

キ「……カラーリングは変えられるから、いらん」

ア「他の色と合わせないと地味よね……黒って」

キ「——黒は男の色だ!!!」

カ「はいはい……で、キリト。この後は何をすればいいんだ？」

キ「あれを見ろ」

高さ五メートルほどの石の扉があった。「あれが、転移門への扉か……」と、思ってい

たカイトの視界にある物が目に付いた。

カ「なあ…キリト？」

キ「何だよ？」

カ「大概RPGの武器類って、捨てれば消えるよな？」

キ「は？ 当然だろ」

カ「じゃあ…あれ、何で消えてない？」

キ「えっ？」

今度はキリトがカイトの指さした場所に視線を向けると、その床には先程コボルドロードが使っていたなぜか黒い野太刀が主を失いながらも、確かに無造作に転がっていた。

それを見てキリトは明らかに不審な表情を浮かべ、アスナはキリトの不審な表情を見て少し不安になった。

キ「おかしい…β版では、確かに消えていたはずだ」

ア「キリトくん。あれは武器や素材になるから残ったのかな…？」

キ「だったら、取得できるように武器の上にカーソルアイコンが出るはずだ。オブジェクトは…考え難い」

カ「つまり…それは…」

キ「終わってない……ッ。まだ、ボス戦後のイベントがある！」

ア「——あつ！」

アスナは野太刀がさらに黒く変色し、まるで熱で溶解したように床に溶けて消えてゆくのが見えた。

この時、カイト・キリト・アスナ以外のプレイヤー達は、皆レアアイテムに喜ぶ。デイアベルを囲い、勝利の余韻に浸り進行中の異常事態に気づいてはいなかった。

そして、カイト・キリト・アスナが全員に注意を呼びかけるよりも早く、《あれ》が行動に出た。

デ「——かふえ？」

黒く変色し刃の波紋も見えない野太刀が音も無く、まるでそこに初めからあったかのように出現し、デイアベルとロングコートを紙のように貫き《あれ》は現れた。

黒い鎧を纏黒い剣を持った騎士がそこにいた。そこにいたやつにはこう名前があつた

《魔王の落とし子》《Satanic consequence》と

異変《Satanic consequence》前半

そこにいたはずのディアベルがいなくなっていた、否殺されたのだ。後ろの《黒い騎士》に

ディアベル が殺されたことに気づいた キバオウたちは怒鳴りながらその《黒い騎士》に 突っ込んでいったがカイトとキリトは即座に止めようとしたが

カキ 「やめろ!!今のお前たちに勝てる相手じゃない!!」

キバ 「なら!!どうするんや!! ディアベルさんが殺されたんやぞ!! 仇をとらんでどうする!!」

キバ 「全軍突撃や—————!!」

☒ うおおおおおおおおおおおおおお!! ☒

カイト・キリト・アスナ意外が突っ込んで行った。

《黒い騎士》が動いた。その 手に持っていた剣を振った。一瞬だった第一層でも余裕で行けるほどのレベルでもほぼ全員が危険ゾーンに入った。

《茅場 side》

数十分前・

茅場は日本何処かにある家にいた。そこで茅場はある画面を見ていた。

カ『絶剣技初（はつ）ノ型（紫電（しでん））』

第一層攻略をしている時の映像を見ていた。

カ『絶剣技三ノ型（影月円舞（えんげつえんぶ））』

茅場「ほう・面白い剣技を使う・ふむ・これは私が設定したエクストラスキルに設定してない部類のものだな・」

茅場は即座に行動を映した。しばらく作業を続けていると《イルファング・ザ・コボルドロード》が倒されたがしかし異変が起きたのはその作業が終わってからであった。

茅場「ん？なんだこいつは？」

茅場の映像には《黒い騎士》がいた

茅場「カーディナル・拘束してクエスト化しろ・」

カーディナル「イエス・マイスター今すぐ対象をクエスト化します。」

茅場「カイト君・君に緊急事態ながら君にちよつと早いかも知れないクリスマスプレゼントだ。受け取りたまえ・君ももうひとつの希望となるだろう」

ピロリン。

メールが来た。カイトにとってはどうでもいいのに見なきやいけない気がした。

カイト君へ

君にプレゼントをやろう。

その剣技に興味を持つてね。この装備とスキルをやろう。奴に關してはまったく無関係だ。

だからクエストとして縛らせて置いた。存分に戦いたまえ。

茅場晶彦より

——ギフトを開封します。

武器：へ魔王殺しの聖劍《デモンズ・スレイヤー》真名「テルミヌス・エスト」

防具：聖女の羽衣《セイクリッド・ロード・オブ・フェザー》

エクストラスキル：絶劍技

カ「なっ?! か、茅場だ?! 一体なんだこれは?!」

カイトは叫んだ。ボス部屋の全体に響くくらいに

キ「ど、どうしたんだ?!」

キリトはこのことに少し苛立ちながら聞いてきた。

カ「茅場からメールが来てギフトとしてアイテムが!」

そういつたらみんなが食い付いてきた

キバ「なんやて?! どういううちや?!」

カ「あのモンスターに關しちやあ茅場は無関係らしい。俺が決着をつける!!」

キ「お、おい?! バカなことはやめるんだ!! 勝てる訳がない!!!」

カイトは無言で立ち上がり《魔王殺しの聖劍》と《聖女の羽衣》を装備した。

着けて見るとキレイだった。その言葉しか出てこないほどのキレイさであった。ス

キルも《絶劍技》を入れた。

キバ「な、なんやその装備。」

クエスト名《魔王の落とし子》

目標：《魔王の落とし子》の討伐

制限時間なし

さあ、やろうぜ。

カ「魔王の落とし子とやら!!!!!!」

いまここに命と希望を賭けた戦いがはじまった!!!!!!

劍の銘はわからないものの《魔王殺しの聖劍》と同性能と 思わせるほどの威圧感
 がその劍から発せられていた。

カイトは思った。簡単には勝てないと

カ「——行くぞ!! 《魔王の落とし子》
 !!!!!」

《魔王殺しの聖劍》の刃と奴の劍が光と闇の閃光をほとばしらせた。

カ「おおおおおおおおおっ!!」

カイトは地面を蹴って跳んだ。両手に構えた聖劍を黒い騎士の頭に振り下ろした。茅場からもらった《魔王殺しの聖劍》。今はこの武器の全力を出せないとはいえ十分行けるはず。だが、黒い騎士巨軀をひるがえし、闇の劍でその一撃を簡単に受け止めた。

ボス部屋に散る火花。押し返すように弾かれ、カイトの身体は宙を舞う。

カ「(こいつ・強い)」

心の中で舌打ちをしながら地面に着地すると、低く身を沈め、再び突進した。体格差がある敵との戦いかたは心得ている。真つ正面から劍を打ち合えば、この装備をつけたとはいえカイトが明らかに不利なのだ。

カ「ならっ!!このまま!!」

カイトはそのまま踏み込んだ。黒い騎士は劍を薙ぐ——

棒となる奴に信頼を託し、精一杯力を込める。聖剣のまぶゆい閃光を放ち、ボス部屋を完全に塗りつぶした。

カ「貴様は、その剣を使いこなせてねえ!!!」

カイトの剣撃が闇の剣を薙ぎ払う。甲高い剣響を響かせ、黒い騎士の巨軀が初めて傾ぐ。カイトの連撃を牽制するために、黒い騎士はソードスキルを放った。

——だがそれはカイトの誘いだった。

ソードスキルは発動した直後に硬直するのは知っていた。その隙を狙ってさらに加速した。眼前で炸裂する剣技。だがカイトは怯まない。放つソードスキルさえわかっていたらば《テルミヌス・エスト》の力で弾くことが出来る。白銀の閃光が虚空を薙いだ。一瞬で弾かれる闇の剣。

カ「うおおおおおおおおお!!」

カイトは止まらないここに閉じ込められた人たちのために。薙ぎ払った聖剣を真上に構えると黒い騎士の間合いを旋風のように駆け抜け、その巨軀叩き付けるように跳び一撃を入れる。

カ「絶剣技二ノ型へ流星（りゆうせい）!!!」

《魔王殺しの聖剣》の一撃が、黒い騎士の兜を粉碎する——!!!

《テルミヌス・エスト》の閃光に呑まれ、砕け散る闇の欠片。

激しく散る火花の中、刃にひびが入った音がカイトの耳に入った
 カ「っ!? まさか!? エストが砕ける!!」

耐久力は結構あると思ったが、さすがにこのレベルは無理か

カ「っ!! 頼む耐えてくれ!!」

叫ぶように、カイトは聖剣を叩きつけた。

光と闇が再び交差する。交差した刃から激しい火花が乱れ跳ぶ。

今のままでは勝てないな。

しかしここでカイトは後ろに跳んだ。

キ「全員突進しろ!! タンク!! 防御に専念しろ!! 誰も死ぬな!!」

カ「待ってたぜ!! キリトたち!!」

|||||

戦況が激しい中、カイトたちの戦いがはじまった。

黒い騎士が憤怒を上げた。

|||||

キバ「あの剣の防御は任せとき!!」

キ「隙を作ろう!!」

キリトたちが剣を構えると、アスナが走り込んできた。

ア「私がヘイトを稼いで惹き付けるわ!!」

カ「わかった」

カ「全員聞け!あの剣とはまともに打ち合うな!!並みの剣じや對抗出来ない!!あれに抵抗出来るには俺とこの剣だけだ!!」

『うおおおおおおおおおおおおおおつ!!』

キ「アスナ!!行くぞ!!」

ア「うん!!」

キア「ハアアアアアアアアアアツツ!!」

ガキーン!!

——— ■■■■■■!?

キ「いつけええええええええええええ!!」

キリトが叫びを上げたと同時にカイトは走った。

今の黒い騎士に防御手段はない。

カ「これで決まりだああああああああああ!!」

今の俺は行けるな。この剣があるからアレが放てる!!

カ「絶剣技」

剣術の名前をいう。

カ「破ノ型」

型をいい。

技を放つ。

カ「〈烈華螺旋剣舞（れっからせんけんぶ）〉!!!!十六連!!!!」

縦横無尽にはしる無数の斬閃が、ボス部屋にきらめいた。

空中で乱舞する怒涛の十六連撃。

闇の塊となった《魔王の落とし子》の肉体が削ぎ落とされ、崩壊していった。

カ「ハア・ハア・ハア」

—————クエストクリア!!

報酬：《真実を貫く剣〈ヴォーパル・ソード〉》

—————

《魔王の落とし子》を倒したことで第一層攻略が終了した。損害はあまり大きくなかったものの、大きい存在を亡くした。二度とこのことがないことを祈ることしか出来なかった。

—————

「アイテム紹介」

・《真実を貫く剣〈ヴオーパル・ソード〉》

真名：レスティア・アッシュドール

クラス：魔剣

オマケ：武器進化可能

・《魔王殺しの聖剣〈デモンズ・スレイヤー〉》

真名：テルミノス・エスト

クラス：聖剣

オマケ：武器進化可能

・《聖女の羽衣〈セイクリッド・ロード・オブ・フェザー〉》

オマケ：防具進化可能

エクストラスキル：絶剣技―未設定

――――

アイエエエエエ!? ○○○!?○○○ナンデエエエエエ

!?

また会ったね!カイトだよ☆ニコツ

まあ、うん気持ち悪いな。これはリアルのほうで木綿季に薦められてクラスでやったら皆顔を真つ赤にして倒れてた。なんだろう。一体。まあいいや!

これからいままでのことを報告するぜ!!

攻略が二十層こえた辺りから《血盟騎士団》というのが出来てアスナがそこに入ったらしい。てか俺も誘われた。なんで俺ねん。ちなみに誘ってきたのはヒースクリフと言うやつだった。第二十五層で《アインクラッド解放軍》が潰滅した正直さまあつて思った。しばらくして、キリトの雰囲気が変わったことに気づいた。攻略をしていたらキリトが無茶苦茶なレベリングをしていた。しかも倒れた。うわあ。めんどつておもいつきり言ってしまったのは悪くないと俺は思う。マイホームに連れて行ってキリトが起きて料理をあげたらスゲー喜ばれた。あれ?お前あのときの何があつた?と聞く。と空気が変わったから。「何があつたかわ知らんが無理はするな。」と俺が言うのと、「済まない」と言いつつ俺が作った料理を食べ始めた。「何?料理スキルをいれた理由?」

いつまでも外のを食べてると飽きるから。そして数ヶ月後に三十九層に音楽を歌つてた奴を見つけた。このアインクラッドに楽器あつたんだな。探そう。翌日に暇だつたから一人で楽器を弾いてたら何か来た。ユナと言うらしい。「一緒に弾かない？」と言われた。そこで俺が「何弾くの？」ってめんどくさく聞くとすぐ嬉しそうに楽譜渡してきた。ユナが「これこれ!! ねえねえ!! 一緒にやろ!!」って言うから一緒にやってたら深夜になつてて気づいたら人が集まつてユナに聞くと急に抱き着いて来てびつくりしていたら「すぐく良かったよ!!」と言われて恥ずかしくて離そうとしたらキリトたちがいてしかも《血盟騎士団》のアスナたちがいて顔がすごいニヤニヤしていてすぐくうざかった。

キ「ずいぶん仲いいな。ニヤニヤ

カ「うるせえぞ。キリト。俺だつて望んでこんなことやってねえよ」

ユナ「むう。君! ずいぶんひどいこというね。って自己紹介してなかったね! 私の名前はユナ!! あなたたちは?」

キ「えーとキリトです」

カ「何こんどきにコミュ起こしてんだよ。カイトだ」

ア「血盟騎士団に所属しているアスナです」

キリトたちが自己紹介しているとアスナが聞いてきた。

※アスナ以外の《血盟騎士団》は帰りました。

ア「ねえ、あなたここでなんで楽器弾いてるの？」

ユナ「それは私が歌のエクストラスキルをもっているから、あと歌うのが好きだからかな？」

カ「いやこつち見ながら言えわれても知らないんだが」

キ「でもずいぶん長く一緒にやっていたな」

カ「いや、だつて気づいたらこんな遅くに」

ユナ「わー嬉しい!!」ダキユツ

カ「h, HA☆NA☆SE☆」／／／

とこういうことをしていると聞き覚えのある声が聞こえた。

？「あー!!カイトが知らない人とハグしてるー!!ボクも負けないから!!」

ユナ「おや?勝負するのかな?おっおっ?」

カ「な、なんでここにいる!!」

ユウキ!!」

ユウキ「えへへ。来ちやた☆」

カ「えへへ。来ちやた☆。じゃあねえよ!!なんでここにいるんだって聞いているんだ

!!」

ユウキ「正直言うとなねボクも知らないんだ。亡くなった人の借りて。やつちやた☆」

ガツン!!

ユウキ「~~~~~!!何するの!!」

カ「何するの?何するのだと?お前だけは来てほしくないと行って来たのに!

もしかしたらこの事件に巻き込まれてユウキが死んだとしたらと考えでると怖くて怖

くて。」

ユウキ「.....ボクは大丈夫だよ?ここに居るから安心して?」

カ「ああ」

ユナ「そうそう。悲しくなったら私が元氣してあげるよ!!」

カ「いらん」

ユナ「ちよつとー!!」

ユウキ「カイトはここに家つてあるの?空いている部屋とか」

カ「あ、ああ三十七層の海が見える家に空き部屋も幾つか」

ユウキ「じゃあそこ住む!!」

カ「はあつ!?ち、ちよつとほめて!?どうしてそうなる!？」

ユウキ「だってカイトと居たいし。」うるうる

くっかわいいから怒れない

ユナ「あつ!じゃあ私も」

カ「な、なんでお前まで!？」

ユナ「私もカイトと一緒に居たいからからじゃあダメ?」

カ「ぐぬぬ。ああ!もう!!好きにしろ!!」

ユナ「やった!!カイト大好き!!」ダキユ///

カ「ひえあ!?もう!!くつつくな!!」///

ユウキ「あー!!ずるい!!ボクもー!!」ダキユ///

キ「なんかお邪魔みたいだからまた今度作ってくれ。いこうアスナ」

ア「う、うん。あ、待ってキリトくんあの子達とフレンド登録してくる」

キ「了解」

ア「ねえねえユウキさんとユナさんフレンド登録しません?」

ユナ「いいよ」

ユウキ「カイト？フレンド登録ってどうするの？」

カ「アスナ頼む」

ユウキ&ユナ「むう」

ア「わかったわ」

そのあとアスナたちがフレンド登録したあと家に来た。

本当なんでさ

結局きたしこいつら

ユウキ「わー!!大きいね!!海が見えるよカイト!!」

ユナ「本当に大きいねここ」

カ「とつとと入れ」

た
そのあと料理を作るといってユウキはあまり驚かなかったがユナがすごく驚いてき

解せぬ

カ「本当に住むのお前ら」

ユウキ&ユナ 「うん、だって一緒に居たいし」

カ 「うぐつ／＼／＼お、襲ってもしらんぞ／＼／＼」

ユウキ&ユナ 「カ、カイトならいい／＼／＼」

ぐはっ。な、なんだ?! て、天使か?!

話し合いの結果一緒に寝ることは避けられたがアピールがひどくなつたには別の話。
早くこのデスゲームを終わらせたい

カ「どうだ？LAは？」

キ「これなんだが。」

キリトがそう言いつつ剣を取り出した。

その剣はカイトがもつ《真実を貫く剣》と色が似ていてシンプルな形をしていた。

カ「キリトこれは何て言う剣だ？」

キ「《エリユシデータ〈解明者〉》と言うらしい」

カ「ふーん。」

キ「な、なんだよ。興味無さそうな声を出して」

カ「だって俺的には《真実を貫く剣》のほうが好きだし強いし進化するし」

キ「し、進化するのか!!」

カ「ん？ああ何かな序盤から終盤まで多分世話になるぜ」

キ「いいなーその剣。」

カ「装備してみていいけど。」

キ「けどなんだ？」

カ「なんか弾かれるらしい」

キ「は、弾かれる!!」

カ「意思があるように。」

カイトはそう言い《真実を貫く剣》をボス部屋の天井に掲げると怪しく輝いたような気がした。

「……………な、なんでこいつがいるんだよ!!」

カ「ヒースクリフ!!」

ヒ「なんだね？」

カ「なんでくるんだよ!!」

ヒ「見かけたからさ」

カ「そんな理由でくるな!!」

ヒ「ひどいことを言うねカイト君は」

ユウキ「そうだよ!! アスナのところの団長さんが来てくれるんだよ!!」

ぐつ・ユウキに言われては

カ「じ、しかない・ついてこいヒースクリフ」

ヒ「おや? いいのかい?」

カ「じゃないと危険だから・俺が」

ヒ「そ、そうか・聞かないでおこう」

カ「・そうしてくれ」

「今現在攻略階層は五十九階層」

そろそろきつくなつてきたな。《真実を貫く剣》と《魔王殺しの聖剣》。あと防具の

《聖女の羽衣》には。

んー

つとカイトが考えてるとユウキたちがきた

ユウキ「カイト？何考えてるの？」

ユナ「何かずいぶん深く考えてるよのね。」

ユウキたちが聞いてきた。ユウキもユナもレベルが良い感じに上がって最前線でも大丈夫くらいにユウキの装備が変わった時びびったから聞いたら「アスナの知り合いにやつてもらったんだよ!!」つとすごい良い笑顔できた。うん。今日のユウキも天使だ。ユナも「聞いたそうね？聞きたいのね？いいよ！聞かせてあげる!!私もその知り合いに新しい楽器を作ってもらったんだ」つ言ってきた。そんなに嬉しかったのか？それ？と言うとユナがユウキには劣るが良い笑顔で「うん!!」つと言ってきたのでこっちも笑顔で「そうか」と言うのと二人に顔が赤くなつた？どうしたんだろう？熱かな？

ユナ「と、とにかくどうしたの？」

カ「いやな？さすがにこの装備だときつくなつてきたから強化しようかと。」

ユウキ「あれそれって強化回数限界じゃなかったけ？」

カ「これ進化をするんだ」

ユナ「えっ?! 進化するの?!」

カ「ああだから素材を取りに行こうかと」

カイトが行こうかとする腕が両手で胸に向かつてくつるける二人の姿が

?あれ?!

カ「お、おい!! はなせ!」

ユウキ&ユナ「いや!! 離さないー」ギユウー

カ「..」

とても可愛らしくギユウーと抱き締められていた。

こいつらは言っても動かないとわかってるので降参した。じやないと喰われかけ

ないからな。

カ「わかつたが危険だったらすぐ逃げろいいな?」

ユウキ&ユナ「うん!!」

ホントにこいつらはかわいい奴らだ」ナデナデ

ユウキ&ユナ「んー／／／／／」とろん

しばらくしているとユウキがクエストについて聞いてきた。

ユウキ「カイト？何のクエストするの？」
カ「あ、ああ言っただけだったな。これだ」

「魔神竜と聖神竜の討伐」

目的：竜二体を討伐する。

報酬：女神の布生地

ユウキ「これいくの？」

ユナ「大丈夫なの？」

カ「大丈夫だろ。ほら！準備しろ!!」

ユウキ&ユナ「はい!!」

本当にやれやれつて奴だぜ

着いたな

ヒ「この家かな？」

カ「ああ。ここだ」

ユウキ「どうしたの？だるそうだね？」

ユナ「元気出させようか?」／／／

カ「いらんからいい」

ユナ「なんでそんなにはつきり言うのー!!」

ヒ「君はいつもそうなのか?」

カ「ああこれでクラインをからかっているんだ」

クエスト受注中

カ「なんか最初から疲れた長すぎい!!!」

ヒ「本当だねユナ君とユウキ君は寝ていたね」

カ「それはそれで癒しだ」

ユウキ「も、もう!! からかわないですよ!!」ダキユ

ユナ「ふふカイトの寝顔も可愛いもんよ☆」ダキユ

カ「ひふえあ!? く、くつつくな!!」

ヒ「行かないかね?」

カ「ほら! 行くぞ」

ユウキ&ユナ「はい」シヨボーン

ぐるああああああああ!!

来たか。!!!

一体目の名前は《魔神竜〈Malevolent deity dragon〉》と書かれていた。

カ「ユナ!! 回避を優先的にしながらいつものを!! ユウキは俺と一緒に! ヒースクリフはパリイを多めに頼む!!」

ユウキ「オツケー!!」

ユナ「はいはいー!! 了解だよー!!」

ヒ「了解だ。今回の指揮は任せよう!!」

カ「たまには自分で動け!」

こいつの攻撃パターンはこうだ。

・爪での引っ掻き攻撃

・空中と地上からのブレス

・突進攻撃

と簡単なのだが、厄介なのが

カ「つっ!! くそつ!! デバフがうざつたい!!」

ヒ「確かに厄介だ。攻撃力低下か、あと少しだが行けるか?」

カ「はん!! 誰に言ってる。行けるさ」

ヒ「ユウキ君!!一緒にスイツチを!!隙をつくる!!」
 ユウキ「了解ですよーつと!!」

カイトは《魔神竜》と言うことで現在へ魔王殺しの聖剣《デモンズ・スレイヤー》を
 装備している。もう一人の相棒を手に魔神竜へと向ける。

ガキーン!!

ヒ「スイツチだカイト君」

ユウキ「スイツチだよ!!」

カ「絶剣技破ノ型へ烈華螺旋剣舞(れっからせんけんぶ)!!!十六連!!!」

—————

〈CONGRATULATION!!〉

そう空中に展開されていた。今回のクエストは二体だからそこまで苦戦はしなかつたがデバフが思った以上にカイトたちを苦しめたのだ。

カ「うわつきつ!!」

ヒ「ふむ・デバフが体力を奪ったか」

ユウキ&ユナ「ハア」ハア「グテーン

ユウキはわかるがユナまで

カ「飯にしよう」

ユウキ「うん!!」バツ

ユナ「お腹すいたわ!!」バツ

すんごい笑顔癒される

カ「カイト君がつかくるのか?」

ユウキ「どうしたの?顔赤いよ?」ピトツ

ユナ「疲れがでたんじゃない?」ピトツ

カ「だ、大丈夫だ!」

ヒ「ヒ」

カ「そ、そんなことより飯だ飯!!」

ユウキ&ユナ「わーい!!」

—————

ユウキ&ユナ「んー／／おいしかった!!」

カ「お粗末様でした」

ヒ「カイト君がつかくるのか?」

カ「ああ最近料理スキルMaxになったし」

ユウキ「そうなの?!アスナまだらしいけど?」

カ「アスナも?ってああそういうことね?キリトの奴変なところで鈍感なんだか

?

ら

ユウキ&ユナ「カイトが言うかな？」

カ「なんか言っただか？」

ユウキ&ユナ「いえ!!何でもありません!!」

ヒ「次行かないかね？」

すいません・本当にすいません

くおおおおおおおおおん!!

今回のクエストの最後のボスの《聖神竜へSt. god dragon》と書かれ

ていた。

さあ・最終ラウンドだ!!

カ「これで決める!!」

ユウキ「うん!!」

ユナ「オッケーだよーあ、あとでごh「ぐおおおおお」もう!!」

ヒ「こくり

クエストクリア

報酬：女神の布生地

ドロップアイテム：サタンクリスタル、セイクリッドゴッドインゴット

終わったーん？ヌール？何々いつの？えーと圈内殺人か。あれ？終わったのか？そして他にはないか。あいつに頼むか。

リズベット武具店へ

※ヒースクリフたちは先に帰って貰いました。

「リズベット武具店」

カランカラン

カ「よーs（ビュン!!）す」

キ「あつ」@二刀流試し

リズ「あつカイト」

カ「かえr「S級」」

リズ「ベツト武具店はすごい気まずい空気になっていた。」

ア「リーズ!!っ!!ひい!!」

リズ「で?なにしに来たの?」

あっそうだった

カ「良い素材が入ったから武器を」

リズ「あああの意味わからん奴ねいいわやるわ」

カ「あと防具の方も」

といい《女神の布生地》

《サタンクリスタル》《セイクリッドゴッドインゴット》を取り出した。

リズ「なにこれ!!」

カ「クレストで手に入れたやつなんだ 使えるか?」

リズ「誰に言ってるの?」

カ「最高でぜえリズベツトよお」

ア「空気ね 私たち」

キ「言うなよ 気にしてたのに」

強化完了

《魔王殺しの聖剣》↓《魔神殺しの聖剣へセーント・ディーツティー・サブレッション・ソード》

真名：テルミヌス・エスト

《真実を貫く剣》↓《真実を貫く魔剣へアディクト・ソード・スルー・ザー・トルース》
真名：レストイア・アッシュドール

《聖女の羽衣》↓《女神の羽衣へゴデイシジズ・ローブ・オブ・フェザーズ》

新ニュース

青い悪魔 前半

あ、ありのまま起こったことを話すぜ。あのあと試し切りをしに行つたんだ。この《魔神殺しの聖剣》と《真実を貫く魔剣》今の階層じゃあ《紫電》を放つだけで死ぬ。オーバーキル感があるんだ。そのつぎが本番だ。

ユウキとユナに結婚申し込まれた。

カ「ちよ、ちよつと待て!! どういうことなんだ!!」

ユウキ「知らないの? なんかわからないけどアルゴさんが重婚出来るらしいって言って

たよ?」／／／

ユナ「あら? 知らなかった? ということで早くしなさい!!」／／／

カ「そうか・そういうことか・じゃねえよ!! どういうことなんだ!!」

詳しく聞いてみたらこの重婚は特殊なものようだ。複数の女性に好かれることで発動するらしい。これまた変なのが来たものだ。ストレージも共有化されるようではないんだ・いいんだけど。

カ「俺・惚れられるようなことをした?」

ユウキ&ユナ「う、うん」／／／

なにこのかわいい子たちは? 何? ここへブンなの? 俺を萌え殺すの? 何バカなの? 死ぬの? 俺が

カ「と、とりあえずまた今度な」／／／

ユウキたちがえーと言うが「嫌いになつちやうぞ☆」って笑顔で言うのと静かになった。どんだだけだよ。

—————

〔第七十四層〕

あのあと俺とユウキたちは一緒に行くこととなり

キ「あれ? カイト?」

カ「あん？あーキリトか？」

ユウキ「やつほーアスナ!! 久しぶりだね!!」

ア「うん、そうだねユナさんも」

ユナ「そうだねー」

ア「ね？どう？行けそう？」

何いつているのかわがらないが何か聞いてはいけない気がした。だってユウキたち顔がすごく赤いもん・気になる。

カ「さすが、攻略組ナンバーIIの血盟騎士団副団長様だな」

ユウキ「だよね……やつぱりアスナ強いや」

ユナ「・どうしたらそんな風になるの？」

今日の前では、アスナが骸骨剣士《デモニツシユ・サーバント》と言うmodを相手に一人奮闘している。おいこら何こつちも見ながら言うんだ。否定出来ないではないか。

身長は二メートル近くある、その体に不気味な青い燐光と古ぼけた鎧を装備している。武器は長い直剣と円形の金属盾。一般的な女性プレイヤーからしてみれば恐怖の対象である。簡単にはいってブル○クじゃなくてホネヤロウだ。

そうこう考えていると、骸骨剣士がソードスキルを発動した。

繰り出されるのは片手剣ソードスキルの四連撃、《バーチカル・スクエア》。

それをアスナは華麗なステップで回避し、それにより大きく体制を崩した骸骨剣士へと反撃を開始した。

ア「はあああ！」

アスナは細剣ソードスキル八連続技《スター・スプラッシュ》を発動する

「骸骨剣士のHPを三割も削った。そして細剣と相性の悪い骸骨に全弾命中させているのだから、すごいと思う。まあアスナのリニアール以上の速度を出す俺もそうなんだけどリアルでも」

ア「キリト君!! スイッチお願い!!」

キ「はああああああああああ!!」

アスナが単発の突きを放つ前に、キリトに声をかけて突きを放つ。その突きは骸骨の円盾により防がれるが、重い攻撃をガードした相手は短いながらも致命的な隙を見せてしまう。

骸骨剣士とアスナの間にキリトが飛び込む。

キ「せい！」

そしてキリトは片手剣ソードスキル《バーチカル・スクエア》を放ち、骸骨は結晶と

なつて消える。

出番ないな。

「迷宮区 奥地」

カ「なあ キリト？これはまさかの」

キ「ああ ボス部屋だ」

ユナ「カイト？大丈夫？汗だくよ？」

カ「あ、ああ」

ア「ね、ねえ？覗いてみない？」チラッ

俺とキリトも少し緊張しているように見える。ここは74層……アインクラットの
上層部で今までのアインクラットの常識が聞かなくなり始めている……俺が言ったと
おりに『ボスは守護する部屋から絶対に出ないから扉を開けるだけなら問題はない』は
今までのアインクラットフロアボスの常識でこの層からは当てはまらないかも知れな
い可能性がある。

カ「念のために全員、転移結晶を準備して開けるぜ？」

俺がそう言うのと四人とも頷いてから転移結晶を用意する。

カ「それじゃあ、キリトと俺が開けるから三人は俺達の後ろに待機して」

アスナたち「「了解」」

三人が一步下がってから俺とキリトは扉を開けるが

ボス部屋の中は真っ暗でボスが見あたらなかった。

ユナ「居ない？」

俺はゆっくり一歩ずつ部屋に入っていく

カ「ユナ！」

部屋に入っていく俺をユウキが止める

ユウキ「大丈夫だよ。奥まで入っては行かないし、ボスの姿くらいは見ておかないと攻略の立てようが無いじゃん」

ユウキがそう言うのと部屋の奥に青い炎が灯る。それから一気に青い炎が部屋に灯っていく。

そして部屋の中央に羊のような角を生やしている蒼い悪魔がいた。手には何やら大きい大剣をもって。

ボス名は《グリームアイズ》と表示されていた。

《グオオオオオオオオオオッ!!》

グリームアイズは俺達に向かってそう叫んだ。今回はあまりにも強そうで、俺達だけでは敵いそうになく

カイトたち 「「「うわああああああああ!!」「」」」
ガシツ

ユナ「ちよつと!?脇に抱えてどうするつもりくくく!?」

ユウキ「わつ?な、なにカイト!!」

キリトたちは普通に逃げて行つたが俺はユウキたちを両脇に抱えて走りだし逃げて行つた。

—————

カ「ハア・ハア」

ユウキ「「「トト」」」 放心中

ユナ「カ、カイト?ユ、ユウキが」

カ「ん・あつ」

気絶したユウキと何故かユナと一緒に膝枕をしていた。

ユウキ「んくくくく」／／／@いつ起きたし

ユナ「なかなかないね☆」

カ「いいね じゃなくてこんな野郎の膝枕なんて嬉しくないだろうに」

ユウキ「そんなことないよくカイトの膝枕気持ちいいよ」

ユナ「そうそう!さすが私たちの旦那様ね♡」／／／

カ「ひや!!にや、にやんてことをいうんにや!!」／／／／

ユナ「にや、なんてかわいい反応するのね？」

ユウキ「カイト!!かわいいよ!!」

カ「っ!!」

キリトたちが話の良いところで区切りをつけて話始めた。

ア「……あれは苦勞しそうだね……」

とアスナは表情を引き締めて言った。

ユウキ「そうだね。 武装は大型剣ひとつだけと特殊攻撃アリかも」

とユウキが言い、

ユナ「前衛に堅い人を集めてどんどんスイッチしてくかないわね」

とユナが言った。

キ「盾装備の奴が十人は欲しいな……。 まあ、少しずつちよつかい出して傾向と対

策って奴を練るしかなさそうだ」

とキリト。

ユウキ&ユナ&アスナ「盾装備、ねえ」

アスナとユウキとユナが意味ありげな視線でこちらを見た。

ア「君達、なにか隠しているでしょ」

ユナ「……隠しているわよね」

ユウキ「ボクにも教えて欲しいな？」

カキ「「なんで（かな）……………」」

ア「だっておかしいもの。普通、片手剣の最大のメリツトって盾を持てることじゃない。でも二人が盾持つてるとこ見たことない。私の場合は細剣のスピードが落ちるからだし、スタイル優先で持たないって人もいるけど、君達の場合はどっちでもいいよね。キリト君はリズに作ってもらった《ダークリパルサー》を使つてないみたいだしね。カイト君の場合あの剣を交互に使つているみたいけど」

ユナ「……あやしいのよね〜」ジトー

俺は軽くキリトを見るとキリトはコクツト頷く。

カ「まあ、しゃあないな。俺はエクストラスキルの組み合わせでソードスキルは使えなくもないけど使いづらいから片手剣では使わないんだよ。キリトは……………知らん」

俺がエクストラスキルと俺の使わない理由を話すと三人とも少し驚いていた。

それを見てアスナは、時計を確認した。

ア「わ、もう三時だ。遅くなっちゃたけど、お昼にしよっか」

ユウキ「そうだね」

ユナ「やつほーい!!カイトのご飯が食べられるー!!」

キ「賛成!!」

キリトよ、食べ物に素直過ぎないか?

—————

俺は手早くメニューを操作し、黒革の手袋の装備を解除して小ぶりのバスケットを出
現させユウキとユナに大きな紙包みを渡してた。

中身はハンバーガーに近いサンドイッチだった。

ユウキたちは貰って直ぐにサンドイッチにかぶりつく

ユナ「美味しい!!美味しいわ!!カイト!!」

ユウキ「んー、やつぱりカイトの作る料理は美味しいなー」

ユウキとユナは感想を言ってきた。隣ではキリトがアスナからもらったサンドイッ
チにかぶりついていた

キ「本当ツ!! 嬉しいな」

アスナは、笑顔で応じた。

ア「良かったねユウキ!!」

ユウキ「うん!アスナのおかげだよ!」

ユウキはアスナに笑顔で応じた。

そんなことをしていたらなにやら向こうから集団がやって来た。
あれって確か……。

カ「クライン……?」

キ「えっ?」

ク「ん? おお!! カイトにキリトとアスナさんじゃないか!」

やってきたのはクライン、ギルド風林火山のリーダーだった。するとユナたちの方を見ながら俺に聞いてきた。

ク「あ、あの俺クラインと申します。独身です。」

ユナ「あら? お侍さん? よろしくね!! ユナよカイトのお嫁さんよ」

ユウキ「カイトとキリトとアスナの知り合い? ボクユウキ!! ユナと同じカイトのお嫁さんだよ!!」

カ「誰が誰のお嫁さんだ。バカたれ」

ユナ「ん? 照れてんのかな相変わらずかわいいわね」

ク「カイト……!!」 ガスツ!!

カ「な、なにをするだ……!!」

ク「知るかー!! 男どもの嫉妬をくらえ……」

カ「はん!! お前には一番縁が無さそうなことだしな!!」

ク「くそーーーーー!!」

クラインを俺がからかいながら話しているとクラインらが入ってきたところから再びプレイヤーの一団が、ガチャガチャと乱れた足音を立てて現れた。

ア「《軍》だね」

とアスナが俺たちに言った。

軍とは第一層で活動しているギルド《アインクラット解放軍》でこのギルドは25層のフロアボス戦で大きな被害を受けて攻略組から撤退して今まで攻略に出てこなかった。本当にバカな奴等だった。だが、ここ最近のギルド交流会で《アインクラット解放軍》内部で内部争いが起きていると聞いた、なんでも現団長シンカーの政策に不満をもつ強硬派が始まりの町の住人に恐喝などのことをしたり狩場の独占などをしているとか……

軍の連中は、俺達とは反対側の端に部隊を停止した。

先頭にいた男が『休め』と言った。

途端、軍のメンバーが腰を下ろした。

軍のメンバーは、疲労の色が見て取れる。

先頭に立っていた男がこちらに向かって近づいてきた。

男の装備は他のメンバーの装備とやや異なるようだった。

男は先頭に立っていた俺に向かって口を開いた。

コ「私はアインクラッド解放軍所属、コーバツツ中佐だ」

カ「カイトだ」

コ「君らはもうこの先も攻略しているのか？」

キ「……ああ。ボス部屋の手前まではマップピングしてある」

コ「うむ。ではそのマップデータを提供して貰おう」

当然だ、と言わんばかりの男の口調に皆も少なからず驚いたが、後ろにいたクラインはそれどころではなかった。

ク「な……て……提供しろだ?!?てめえ、マップピングする苦勞が解って言ったのか?!?」

クラインの声を聞いた途端男は片方の眉を動かし、顎を突き出すと、

コ「我々は君ら一般プレイヤーの開放の為に戦っている!!諸君が協力するのは当然の義務である!!」

ツツコミどころ満載の発言をする。

いや・知らんがな

ア「ちよつとあなたねえ……」

カ「ククク……ハハハハハハハッ！」

アスナが文句を言う前に俺が笑い出す

ユウキ「カイト？」

ユナ「あなた頭可笑しくなった？」

ユウキが笑っている俺を心配そうに見つめていた

ユナはおかしなことを言った。ユナあとでO☆H A☆N A☆S I☆ね♡

ユナの顔が青くなったのを勘で感じながら言った。

カ「寝言は寝て言え！低層で離脱した低ギルドに攻略組最強が従う義務なんてどこにもないねえ！」

コ「なっ、何だと貴様っ!!」

俺の言葉にコーバツツは顔を真っ赤にして怒りを露わにした。

カ「それなんだ？お前ら軍は俺達一般プレイヤーと違った存在だとしても錯覚してるのか？お前ら軍がアーガスの連中ならまあ、違うだろうな。でもな、貴様ら軍もただの一般プレイヤーなんだよ！一層で解放とか言ってるけど貴様等は何もしてないだろ！証拠にお前の部下は疲れてるだろ！まともな戦闘も出来ずになにがマツピングデータを提供しろだ！その人数で70層代のボスを倒せると思ってるんのかハゲが！」

コ「言わせておけば、きさまっ!!」

俺の更なる口撃に男はギリギリと歯を食いしばらせ、俺の《女神の羽衣》の襟をつか

んだ。

カ「なんだ？怒ったのか？今度は凶星を言われて逆ギレか？これだから雑魚はいやだよな。それともし、俺を攻撃したらお前らの評価は駄々下がりだな!! あつもともと低いんだっけ？」

コ「くっ」

コーバッツは襟は離して無理やり部下を立てせて奥に進んで行った。

後半に続く。

青い悪魔 後半

安全エリアを出て30分が経過。こういう時に限ってたくさんの方と遭遇してしまい、俺たちが軍の連中に追いつくことはなかった。

ク「ひよつとしてももうアイテムで帰っちまったんじゃねえか？」

カ「いや、あれはプライドの高い男だ。ボスを目の前にすぐ帰るとは思えない。」

ユナ「簡単には退く連中じゃないというのは誰でも知ってるからだね」

クラインがおどけて言った言葉を俺とユナはすぐに否定していた。キリトたちも不安が拭えないかさつきからまともに口を開いていない。

そしてその悪い予感の的中する。

「ああああ……」

かすかに聞こえたそれを悲鳴だと判断するのに時間はかからなかった。

瞬間、俺たちは声のした方向へ全力で駆けつけた。

カ「まったたく!!世話を欠かせる連中だ!!」

|||||

カ「間に合え!!!」

敏捷パラメーターにものを言わせて全力疾走すると、すでに左右に大きく開いた大扉が見えた。部屋内部に響く金属音と悲鳴が状況の理解を早める。

キ「おい！大丈夫か！」

キリトが部屋に半身を入れつつ、叫ぶ。

俺はとっさに内部にいる軍の人数を数えるが、二人足りない。なんてことだ。くそつ力「キリト！二人いない！」

キ「ツ!!」

俺の言葉にキリトは顔をしかめる。転移結晶を使って脱出したのならいいがHPを全損させて消滅したとなると状況は最悪だ。何よりあいっだ。そう考える間にも軍の一人がグリームアイズの振り回す斬馬刀に直撃し、吹き飛びながら床に激しく転がった。HPバーは赤色に染まり、危険な状態であることを示している。おまけに俺たちのいる入口と軍の部隊との間で悪魔が暴れており、このままでは離脱することは難しい。

キ「何をしている！早く転移アイテムを使い！」

床に倒れている男に向かってキリトが叫ぶが、男は絶望したような顔で、

軍「ダメだ……！クリスタルが使えない……！」

と叫び返してきた。

カ「結晶無効化空間だ?!」

予想外のトラップに俺は驚きを隠せなかった。〈結晶無効化空間〉。迷宮区で稀にあるトラップだがボス部屋がそうであることは一度もなかった。ならさつき確認できなかった二人は・・・俺が最悪の事態を想像したその時、

コ「何を言うか・・・ツ！我々解放軍に撤退の二文字はあり得ない！戦え！戦うんだ！」

一人のプレイヤーが剣を掲げて怒号を上げているのが見えた。間違えなくコーバツツだ。

カ「バカなことをいってんじゃねー!!」

キ「いいからさつきと退くんだ!!」

そこで声をあげていたのはコーバツツであった。剣を掲げ悪魔に対して言った。

俺もキリトも思わず叫んでいた。部下二人が死んでいるというのにあの野郎は今更何を考えているのか。全身に怒りが込み上げてくる。

ク「おい！どうなってるんだ！」

その時、先ほどおいて行ってしまったクラインたちが追いついてきた。

キリトが状況を説明する。

ク「なんとかできないのかよ・・・」

カ「ツ!!」

言葉が出ない。俺たちが切り込めば退路を開けるかもしれないが結晶無効化空間である以上それはあまりにリスクが大きすぎる。

コ「全員突撃ツ!!!」

俺が躊躇っているうちに態勢を立て直したコーバッツが突撃の命令を出した。

キ「やめろ・・・っ!!」

必死に叫ぶが届かない。あまりにも無謀な突撃にグリーンムアイズが一瞬だけ笑みを浮かべる。

そしてそのまま仁王立ちになると、雄叫びとともに青白い息を吐く。やはりプレス攻撃があつたか。悪魔のまき散らす息に包まれた軍の突撃が目に見えて遅くなる。

そこにすかさず巨剣による一撃がたたきこまれ、一人がすくいあげられるように斬り飛ばされた。コーバッツだった。

コ「有り得ない。」

ゆっくりと動いた口はそう呟いていた。

それだけ言つた直後、HPを全損させたコーバッツのアバターは不快な効果音と共に無数のポリゴンとなって飛散した。あまりにもあつけなくそれでいて確実に死を感じさせる光景に隣にいたアスナとユウキとユナが短い悲鳴をあげる。

ユウキ「だめだめだよ！」
かろうじて聞こえたユウキの声。俺は咄嗟にユウキの腕を掴んでいた。

ユナ「カイトっ！でも」

早くしないと間に合わない。そう言わんばかりにユウキは俺を見つめる。

カ「わかつてる。だから」

転移結晶を使って脱出ができない以上、選択肢は一つ。誰かがボスを引き付けて戦わないといけない。それも生半可な攻撃ではダメだ。重く鋭い攻撃を与え続ける。ダメージディーラーたる俺のすべてを賭けて・・・

カ「ユウキ、アスナ、クライン！10秒だけ時間を稼いでくれ！ユナ!!歌を頼む!!」
四人に向き直ると俺は叫んだ。一瞬だけ何のことか分からないという顔をしたが三人ともすぐに

ア「うん！わかった！」

ク「まかせとけ！」

ユナ「わかったわ！」

ユウキ「わかった!!」

と返事してくれた。そして武器を構えるとボスへ向かっていく。まったく頼りになる相棒たちだぜ。

ユウキ達が駆けていくのと同時に俺は左手を素早く振って、メニューウインドウを呼び出した。ここからは時間との勝負。鼓動が速くなっているのを感じながら、俺は指を動かす。装備フィギュアの右手部分に触れる。すぐさまアイテムリストが表示され、その中にある一本の魔剣を選択。すべての操作を終え、OKボタンをクリックしてウインドウを消すと、腰に新たな重みが加わった。

キリトのほうを見やる。俺と同じ結論に至ったのだろう。すでに二本の片手剣を背に装備していた。

それだけ確認して、俺とキリトは3人に向かつて叫ぶ。

カキ「「いぞ!!!」」

俺たちの声を聞いて、背を向けたまま頷くと、ユウキとアスナは鋭い声とともに、ソードスキルを放った。

ア「ハアアアアアアアアア!!」

ユウキ「セイヤアアアアアアアア!!」

美しい残光を引いた二つのソードスキルは、グリーンアイズの振り下ろした剣と衝突して強烈な火花を散らした

耳をつんざくような音とともに三人がノックバックし、ブレイクポイントができる。

アユウ「「スイッチ!!」」

そのタイミングを逃さずに叫ぶと俺たちは敵の正面に飛び込んだ。硬直から解放された悪魔が剣を振り下ろすがキリトが剣をクロスさせて攻撃を弾く。

弾かれたことによつてバランスを崩した悪魔の懐に素早く潜り込むと、俺は腰から剣を抜き、攻撃を始めた。

力「はああああ!!!」

これが俺の隠し技、エクストラスキル〈絶剣技〉だ。その破ノ型〈烈華螺旋劍舞〉（れつからせんけんぶ）を発動させる。連続十六回攻撃。まばゆい光と禍々しい光を放ちながら剣戟は左、右、上段、下段へと続いていき、悪魔の体全体に直撃していく。そして俺と同時にキリトも〈二刀流〉の剣技を放つ。飛び散る星屑のような攻撃は悪魔に確かなダメージを与える。たしかスキル名は〈スターバースト・ストリーム〉。全十六連撃。合計三十六連撃。

ここまでの攻防で俺、キリト、悪魔ともに、HPが危険域まで落ちていた。

そしてソードスキルが終了する。俺もキリトもシステムに硬直時間を課せられてしまった。

悪魔はそれを見て勝利を確信したのだろう。勝利宣言ともいえるような雄叫びを上げて剣を俺たちに下ろしてくる。しかし。

グオオオオオオオオオウ!?

斬馬刀は俺たちに当たることなく空中で停止した。悪魔は自分の身に何が起きたのか理解できないという表情のまま痙攣している。ギリギリ間に合った……!

キ「カイト、何を？」

キリトが聞いてくるが今は時間が惜しい。麻痺の時間はあと三十秒といったところか。

カ「これで方をつける」

キ「分かった」

動けなくなった悪魔に向かってキリトはとどめのソードスキルを発動させた。二刀流上位剣技へナイトメア・レイン。先ほどと同じく十六回の連撃。

そしてキリトの最後の一撃に合わせて俺もへ絶剣技を放った。へ絶剣技として登録した剣技。闇と光を纏い攻撃方法と威力が増した絶剣技破ノ型へ烈華螺旋剣舞（れっからせんけんぶ）として変わった絶剣技。

カ「破ノ型へ烈華螺旋剣舞（れっからせんけんぶ）!!!十六連!!!電火!!!」

攻撃は麻痺によつて体の自由を奪われたグリーンムアイズの腹にヒットし、闇と光の閃光が刻まれた。

ゴアアアアアア!!

最後の一撃を受けたグリーンムアイズはけたたましい咆哮とともに膨大なポリゴンと

なつて爆散した。部屋中にきらきら輝く光の粒が降り注ぐ。

カ「終わったな・・・」

悪魔の消滅を確認しながらつぶやいた。この言葉は今の俺にも当てはまるのだが・・・
まあいいか。キリトたちが、何よりユウキが無事だったんだから・・・

ユウキ「お疲れ様！カイト！」

ユナ「まったく心配させないでよね」

カ「っ！！」

カイトは気づいた。彼女たちが泣いているのを。

泣かせたくなかつたそんな感じの気持ちと罪悪感で胸の中がいつぱいになっていた。

カ「な、なんで泣いている!!」

ユウキ「だってグスツカイトがやられたらどうしようかと」

ユナ「本当よお心配させないでよお」

ダキユ

ユウキ&ユナ「!?」

カ「朝の返事をしよう」

ユウキ&ユナ「ふえ?」

カ「我が儘だが俺はお前たちと結婚したいと思っている」

ユウキ&ユナ「ふえ、ふええええええええええ!!」

カ「ダメ。。。だろうか？」

ユウキ「。。。そんなことないよ。」

ユナ「ええ・むしろ嬉しいことよ」

カ「ならっ!!」

ユウキ&ユナ「ただし!!」

カ「・ツ!!」

ユウキ「ちゃんと幸せにしてね？」

ユナ「捨てたりしたら・来世まで恨むから」

カ「ふふ・さらっど恐ろしいことを言うなよ」

こんな感じで二人と結婚する事になった。クラインはキリトにスキルについて聞いてるらしく残ってた軍の連中は攻略完了の知らせに行ったようだ。しばらくの間俺たちは今出来る限りの時間ずつと抱き合っていた。

このままいつらと一緒にいれることを願おう。

決闘

「ボス戦後」

ク「カイの字って何してんだ？」

カ「んー？クラインに縁がないこと」ギュー

キ「何で抱き合ってるんだ？」

ユナ「ふふふ♡」

ユウキ「えへ♡」

ア「ユウキ？なにがあったの？」

ユウキ「あのね!!カイトとやつと結婚する事になったの!!」

ユナ「ええ!!やつと結婚する事ができたわ!!」

キク「はああああああ!!」

ア「ええええええええ!!」

しばらくして新聞が出た。ボス部屋でのこととかキリトの二刀流とか俺とユナたちとの重婚のこととか。まあ、色々書かれていた。

「エギルの店」

カ「キリト。お前大変だな」

キ「カイトの場合は男どもの嫉妬だな。おちおち家で落ち着けねえ」

カ「《二刀流》か。すごいな。〈黒の剣士〉さん」

キ「お前の《絶剣技》には負けるよ。〈舞姫〉さん」

74層突破の報はすぐにアイコンクラッド全域に伝わった。毎回のことだが伝わるの早いなホント。大方、アルゴあたりの情報屋が号外でも出して広めているのだろう、いい仕事をする。でも早すぎるぜ。街で待っている人たちにとってこれ以上はない朗報であり、ゲームクリア出来るのではないかという希望、そして明日への活力になる。なにやら催しを行おうということになったらしい。最後のクォーターエリアなので、ここで一息入れようとのこと。まあ別に良いけどさ、攻略はそんなに慌ててやるようなものでもないし。

じゃあ催しって何やんのよとアスナに聞いたところ

カ「最強を決める大会だあ？」

ア「そうみたい」

ユナ「つまりどういふことなわけ？」

ユウキ「戦うの？」

ア「なんでも、今のうちに決めてしまおうと言うことらしいよ」

キ「……なるほどな」

覚悟しているのだ。みんなも。今度の戦いは死人が出ることは必至だろう。現に、過去にクォーターエリアのボス戦で死人が出なかつたことはない。だからこそその大会。その人が確かにいたということを刻むために。まあ、純粹に誰が一番強いのか知りたいつていうのもあるんだろうけどな。それも、あまり考えたくはないが亡くなる前の今がラストチャンスなのだ。

キ「いいんじゃないか。アスナは出るのか？」

ア「私ではないというより、キリト君たちはもう出る雰囲気になつてるよ」

カ「”たち”？」

ア「カイトくん、キリトくん、団長よ」

いわゆる二つ名持ちの連中だ。

ユナ「そいつらがいなきゃ始まらないだつて。ほんと、自分勝手よね」

ユウキ「でもいいじゃない！カイトの活躍観れるわけだし！！」

ユナ「確かにそうね！！」

カ「お？嬉しいことを言ってくれるじゃないか？」ナデナデ

ユナ「当たり前でしょ？」／＼／＼

ユウキ「うん!! そうだよ!!」／＼／＼

と、辟易とした表情を浮かべる。けどよ、ユナとユウキ？緩んだ口元が隠せてないぜ。

まあ、それでも

カ「俺だつて負けるつもりはねえよ」

ユナ「ていうことは出るのね？」

カ「こうも挑戦的じゃあな、受けるしかないだろ、男として」

男つて本当に難儀な生き物ですよ。女性にこうも言わせて断れるわけじゃないじゃん。

見た目がアレだけど・

ユナ「絶対勝つてよね!! 勝たないと許さないから!!」

うん、いい覚悟だね。でね、そろそろ目を逸らしたいんですよね。結婚した女性とはいえ目を合わせるなんてことは俺には相当レベルの高いミツションでして、もう恥ずかしさMAXなんですわ。しかし、ここまでやられて目を逸らすわけには……あ、コイツ、からかつてやがる。さつきまでの挑戦的な目はどこへやら、コイツ面白いわー見たいな目をしてる。俺を使って遊んでやがる。

チクシヨー、いいだろう、俺だつていつまでもやられっぱなしじゃないんだ。俺は少

しずつユナの方へ顔を近づけていく。ユナはギョツとした表情を浮かべ、次第に顔が赤くなつていった。俺は既にゆでダコになつてゐるだろうけどな。ほら、どうした、逃げないよこのまま接触しちまうぞ。主に一部分が。手を軽くバタバタ動かしつつも目を逸らそうとしないところには流石の精神力の強さを感じる。

そして残りほんの数センチという所まで来たところで覚悟を決めたようにゆつくりとユナが目をつむつた。それが何を意味するか。

え、ちよ、待つて、ごめん、本当にするつもりじゃないんだけど。何で待ち受けてんの？

もつと、こう、ピンタするとかさ、抵抗すると思つてたのに。え、良いの？ しちやうよ？ 倫理コードとか無視してしちやうよ？ あつ結婚してたんだつた。キリトたちいるけど。

据え膳食わぬはなんとやら、男、カゼハヤカイト、行きます!!

あのあと恥ずかしくなつたので家で愛し合いましたまる。

大会は明日か。ヒースクリフにちよつと聞いてみるか。何故こんなことをし始めたのか。それが謎でわからない。いい気回だ。えーとヒースクリフ話しがしたいからちよつといいか？つと。あ、来た。いいだろう。k o b 本部まで来てくれ。か。よしっ

!!

そんなことをしているとユナが話しかけてきた。

ユナ「あら？何してるの？」

カ「ん？ああちよつとヒースクリフのところにな」

ユナ「ふーん。わかったわ気おつけてね？」

カ「おうわかっ。んむう!!」

ユナ「はむっ。れろっ。ぷはっ。ふふ行ってらっしやいのキスよ？」

カ「やれやれ。行ってぐる」

「K o b 本部 ヒースクリフの部屋」

ヒ「ひさしいな。カイト君。君の剣の素材を取りに行った時以来だな」

カ「そうだな」

ヒ「で？話しというのは？」

カ「……何が目的だ？」

ヒ「……何が？というの？」

カ「惚けるな。何故急にこんな大会のようなものを始める？」

ヒ「目的か」

カ「」

ヒ「目的というよりは賭けだね」

カ「賭けだど？」

ヒ「そう。君たちを我が《血盟騎士団》に入れるためだ」

カ「……っ！」

ヒ「キリト君たちとはすこし前に話しをしてね。そしたらキリト君の方から『こつちが勝つたらアスナを脱退させてくれ』と言うものだから代わりにこちらからはキリト君が入って貰うことにしたよ。」

カ「ならば何故俺と戦いたいんだ？」

ヒ「同じユニークスキル。同じ剣士としての気持ちだよ」

カ「あんたもお人好しだな」

ヒ「なんのことかな？」

カ「さあな？では失礼する」

ヒ「待ってくれカイト君。結婚おめでとう」

カ「ふんっ」

まあなんかかんやで大会当日になったわけだが

カ「志気を上げるっていうからK O Bの幹部クラスの数人しかいないと思ってたのに……」

ユナ「ざつと5000人以上いるわね。SAOにいるプレイヤーの9割はいるんじゃない？」

キ「おかしいだろ……。皆暇なのか」

ア「失礼なこと言わないの」

SAO全体のことを考えるってこういうことか。なにが『何名かのプレイヤーが見学にくる』だよ。目立つとかそういう次元じゃなくなってるだろうが。

ユナ「ヒースクリフも凄い事考えるわねー。ユニークスキル同士の戦いなんて皆興味あるに決まってるじゃない」

カ「俺はユニークスキルもって持ってなくてもやらされそうだな」

ユナ「カイトはカイトでユニークスキルみたいなもんじゃない。戦い方を生で見たとき本当はそういうスキルなんじゃないかと思っただわよ」

カ「残念ながらスキルが付く前は全部自力だ」

カ「普通に正面きって戦おうって言うてくれば、別に断りやしないのにな」

ユナ「それってカイトの推測でしょ？ 私にはヒースクリフがそれだけの理由でカイトを指名するとは思えないけどね」

カ「いや、あの人の思考回路は意外と子供っぽいぞ。自分の要望を通すための手回しが異常に上手いだけで」

ユナ「それが怖いよ・・・。何にしてもちゃんと警戒すんのだよ！ あんたが負けたらまた交渉とか言い出すかもしれないんだから！」

カ「はいはい」

ユウキ「大丈夫だよ!! カイトは負けないから!!」

カ「おう!! そうだそうだ」

ユナ「その自信は何処から来るのよ。そんなカイトも大好きよ!!」

俺は戦いの準備を済ませるため、ユウキとユナを連れて闘技場のフィールドへと繋がる入場ゲートまで移動する事にした。先にキリトが戦う事になっているから、キリトとヒースクリフの決闘は入場ゲートのところから見せてもらおう。

ユウキ「あれ？ あそこにいるのってキリトとアスナじゃないかな？」

カ「ん？ あー確かにあの色合いはそうだな」

ユウキの言うとおりの入場ゲートの近くには2人の人影が見える。片方は真つ黒で片方は白と赤の服を着ているのが見える。キリトとアスナは遠目でも色で判断できるから楽だな。

ユナ「あんた友達を色合いで判断するんじゃないわよ」

カ「黒の剣士なんていわれてるんだからいいだろ」

俺とユウキとユナが話しながら2人に近づくと、声が届いたのかアスナも俺達に気が付いた。

少し不安そうな顔をしていたが、俺とユウキとユナを見るといつものアスナと同じように笑いかけてくれた。

ア「カイト君、ユウキ、ユナ、おはよう」

ユナ「おはようアスナ」

ユウキ「おはよう!!アスナ!!」

カ「アスナはキリトの付き添いか？」

ア「うん。私の所為でこんな事になっちゃったから」

アスナの所為というかどちらかと言うとヒースクリフの所為なんだが

カ「それはともかく、もうすぐ出番だろ。勝算はあるのか？」

.....

キ「・・・正直分らない。けど、アスナの今後がかかっているからな。負けられない」

ア「ごめんねキリト君。私の所為でこんな事になっちゃって・・・」

キ「何度も言うけど、俺がやりたくてやってるんだ。安心しててくれ」

ア「・・・ありがとうキリト君」

ちよつと気を抜いたらすぐこれだよ。

何なんだこいつらは。試合前に俺のメンタルを壊しにくるんじゃない。というかお前も試合前なんだから緊張感を持って緊張感を。

カ「・・・負けてしまえばいいのに」

キ「ちよつ!?カイト!!」

カ「冗談だ冗談・0%ほどな」

キ「100%本気かよ!!」

カ「はいはいわかったから、そろそろ出番だぞ。さつさと行って来い」

キ「お前なあ・・・」

カ「変に緊張してると余計に上手くいかないだろ。どうせ意味の無い賭けなんだから
気楽にいけ気楽に」

キ「意味が無い賭け? アスナの今後を賭けた大事な勝負だろ?」

カ「あー・・・」

アスナも俺の言っている意味がよく分からなかったらしく、小首をかき上げている。

本当にこいつらこの賭けに意味が無いって事に気が付いていないらしい。半ば予想してたとはいえいつそすがすがしいな。ヒースクリフの作戦大成功じゃねえか。変なところで勘はいいのに。

カ「まあいいや、じゃあ本気でやって来い。出来るだけヒースクリフを追い込んで次の俺に楽させろ」

キ「ひどい理由だな・・・」

ユナ「あんた純粹に応援できないの？」

ユウキ「カイトらしいけどね!!」

好き勝手に言ってくれているが、正直なところキリトに頑張ってもらわないとキツイのも事実だ。

キリトが頑張っている内に色々情報集めないと俺までギルドに入れられたらまじで堪らん。

簡単に言おう。キリトの負け

最後のヒースクリフは早すぎる。いくら何でもあれは

ユナ「あーあ負けちゃった」

気づいて無いのか。そろそろ行くか。

ユウキ「あつ!! カイト行くんだね? はい!! 勝利のキス!!」

カ「んっ。」

ユナ「ほらっごっちも」

カ「はいはい。んっ。」

ア「頑張つてね?」

とうとう俺の出番がやってきた。やってきてしまった。

うわつくそ面倒っ!!

カ「本気でやる気が出んな」

ヒ「これから戦う相手の前で言う事かね?」

カ「これから戦う相手があんただから言ってるんだ」

ついさつきまでキリトが立っていた闘技場のド真中に今度は俺が立っている。

正面にいるヒースクリフと軽口を叩きあいながら、観客が落ち着くまでデュエル開始を待っている状態だ。

それにしても、なんでSAO最強クラスのプレイヤーとのデュエルをこんな大勢に見られなければならんだ。へたしたら思いつきりボロ負けする様をこれだけのプレイ

ヤーに見られると思うと憂鬱だなー。

ヒ「こちらの戦いも、上質な物にしたいがね」

カ「じゃああなたにとって、キリトとの戦いは上質だったわけか？」

ヒ「ふむ。少々手違いはあつたが概ねそういつていいだろう」

カ「手違い・・・ねえ」

どうにも含みの有る言い方をする人だ。俺の中の疑惑が大きくなるから辞めて欲しいんだけど、前々からこんな言い回しだから深く考えないようにしよう。

ヒ「観客も少し落ち着いたようだ。そろそろ始めよう」

カ「ああ」

ヒースクリフから決闘申請が届き、俺はYesのボタンをいやいや押す。

カウントダウンの音を聞きながらだが俺の考えをまとめよう。

9・・・

8・・・

7・・・

6・・・

5・・・

4・・・

さつきキリトがしてたみたいな、あんなレベルのクオリティを。
簡単にガードし勝利した。

3…

2…

1…

キリトみたいに正面からぶつかって瞬殺されるに決まってる。

だったら策を練るしかない。情報を集めたのはキリトとの1試合分だけだが、1つだけ作戦は組みあがった。それが上手くはまれば何とかなるだろう。

0…!!

無機質な機械音が試合開始の合図を告げた。

「先手必勝じゃあ!!いけ!エスト!!」

試合開始の合図と同時に、俺は左手に持っていた《魔神殺しの聖剣》をヒースクリフめがけてぶん投げた。

ヒ「なっ…!!?」

「はあああああ!!?」

流石に予想外だったのか、ヒースクリフが驚愕の声をもらすのが微かに聞こえる。ついでにさつきまで俺がいた入場ゲートのあたりからも3人の絶叫が聞こえるが、こつち

は知ったこつちや無い。俺の投げた《魔神殺しの聖劍》はまっすぐとヒースクリフの顔辺りに向けて飛んでいつている。

両利きとは言えさすがに不安だったがひとまずは成功。

自分で投げた《魔神殺しの聖劍》を追いかけるようにして俺自身もヒースクリフめがけて走り出す。《魔神殺しの聖劍》に追いつく事は不可能だが、どちらかと言うとAGI寄りな俺のステータスなら距離をつめる事くらいならできる。

ガキイ!!

っという音と共に《魔神殺しの聖劍》がヒースクリフの盾に防がれる。

完全に予想外の攻撃だっただろうにしっかりと防御をしているあたり流石だが、俺の目的は《魔神殺しの聖劍》で攻撃する事じゃない。というか多分投げられた《魔神殺しの聖劍》に当たったところでダメージなんか大したものじゃないだろうし、これはあくまでも準備段階だ。

さっきの試合で気が付いた事の一つ目。こいつは完璧な防御でキリトの攻撃を防いでいたが、それは反射神経で防いでいたわけじゃなかった。キリトみたいなめちやくちやな反応速度を持っている訳じゃない。この人は『敵の攻撃を有る程度予測してから行動するタイプ』のプレイヤーだ。

だったらこの人が予想して無いことをしてやればいい。先手からトリックプレイで

この人に考える時間を与えない！

カ「そんなでもって・・・！！」

気が付いた事二つ目。この人は予想外の攻撃が来た時に初めて『反射的に盾を出す』。さっきの試合でもキリトの攻撃スピードに対して判断が追いつかなかつた場面が何度か見て取れた。そのときの防ぎ方は『とっさに盾を出した』って感じの不自然な防御で、キリトが最後に盾を弾いたのもそんな防御をした後だった。

付け加えると、その時この人は、その時盾の後ろに顔を隠すこと。つまり一瞬だけ相手をverることが出来なくなる瞬間が出来る！

・ヒースクリフが予想していない攻撃で隙を突いて『反射的な防御』をさせる。

・その防御中に顔を盾の後ろに隠させる。

こここの二つはとりあえず成功。本番はここから、タイミングがすべての一回勝負
気が付いた事最後の1つ。この人は盾ごしに相手を見るときは必ず左上からだ。...

反射的に盾の後ろに顔を隠した後なら、必ず相手の様子を確認するために左上から顔を出すはずだ。

俺にキリト並みの攻撃力はあるにはある。盾をはじいて攻撃を当てる事は不可能ではない。

だったら盾で防げない攻撃をしてやる。狙うのはヒースクリフの盾の左上、ヒースク

リフが顔を出すであろうこの一点。顔を出した瞬間に魔剣がそこを通過するように攻撃するしかない！

カ「ここが・あめえぞ!!」

右手に持った魔剣で突きを放つ。

絶剣技スキルに突き技があるがただの突きになるので読まれる可能性がある、初撃決着モードで顔に攻撃が当たるとなら問題ない。

このタイミングならいける。さっきのキリトの試合を見て図ったタイミングとドンピシャだ。ヒースクリフが盾からこつちを除く瞬間に一撃入るはず……

ガキツ!!

カ「・ツツ!!」

ヒ「アツ!!」

カ「うおっ!! 絶剣技三ノ型〈影月円舞（えんげつえんぶ）!!!」

ヒ「ヌクリフからの攻撃を防ぐために急いで《絶剣技》を発動させて防いだ。

カ「早すぎるって・」

ヒ「・」

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

こんな感じの攻防が続くが時間切れでドローになった。

朝霧の少女と舞姫たち

キリトがああのギルドに入つて数日したら
 うわけで
 あいつらやつと結婚したそうなの。そうい

カ「行くか」

ユナ「何処に!?!」

カ「いや? キリトのところに」

ユウキ「何しに行くの?」

カ「お祝い」

ユナ「最初から言いなさいよ」

ユウキ「準備するから待って」

「キリトたちの家」

キリトたちがいる家の前に来た。

カ「おい!! キリト!! アスナ!! いるか?」

ダダダ

キ「だれだっつてカイトたちか」

カ「ようきっ」

ユナ「カイト？いつて」

ユウキ「二人ともだっ」

俺たちは固まった。キリトの腕のなかに女の子が抱かれていた。女の子が純粋な目でこつちを見ながら言った。

女の子「パパ、この人たちは？」

キ「ん？ああこのひと」

そこからキリトの声が聞こえなくなった。と言うより

カ「な、なあ？」

ユナ「何かしら？」

カ「ユウキもだが、何肩掴んでる？」

ユナ「この世界つてできたのね？」

カキ「えっ!!」

ユウキ「と、言うものだから、来て」

カ「いやトート!?ま、待て、えい、はやまるなあ!!」

ユウキ&ユナ「ふふふ」

カ「フーーーーー!!こ、怖い!?キリト!!た、助けて!!お、俺このままじゃ殺される!!」
キ「」

とりあえず話し聞くことになりました。

カ「つまり?」

ユナ「出来たのではなく?」

ユウキ「森で拾った?」

ア「う、うん」

キ「そ、そういうことだ」

カ「このあと何処に行くのか?」

キリトたちがしばらく考えたあとに

キ「始まりの町」

パパーママー

「始まりの町」

初めてここでデスゲーム宣言されて約一万人の人たちが絶望した場所でもある。俺が怪訝な顔をしていると

ユウキ「どうしたの？」

カ「あ、ああユウキは知らないのか」

ユナ「カイト」

カ「ここはなデスゲーム宣言された場所なんだ」

ユウキ「」

ユナ「いくわよ。追いかけてくちや」

そういいキリトたちを追いかけると教会についた。

キリトが索敵してるようだ。

キ「ああ、人はちゃんというようだ」

カ「なんか警戒されているようだ」

ア「わかるの？」

ユナ「カイトはみようにすごいよね」

ユウキ「それがカイトだよ」

カ「それ誉めてんのか？」

ユナ&ユウキ「もちろん」

カ「なんか嬉しくない」ムスツ

アキ「アハハ」

「おっ保母さんがきたぞー」

そう路地から聞こえてきた。なんとも不愉快な声を発する。おつととりあえず行くか。キリトたちも気になるように一緒についてきた。

保母？「子供たちを返してください!!」

カ「保母さんとやら気よ付けない信じるなよ!!そいつらの言葉を!!誰だつて顔してんで自己紹介させてもらうぜ!!俺h」

ア「カイト君私がやる」

カ「アツハイ」汗

ユウキ「アスナ僕も行くいいね?カイト?」

カ「アツウン」汗

子供「大丈夫なのかよ!!」

キ「安心しなあーしても姉ちゃんは強いんだぞ」

ユウキ&アスナ「ハアアアアアアアアアアア!!」

ギヤアアアアアアアアア!! マ、マテ!! オ、オイ!! オマエラナニシテル!! タスケロ!! ウワ
アアアアアア!!

まだ続くようですもうしばらくお待ちください。

—————

「貴様らー!! 覚えてろー!!」

カ「おう! 三秒だけ覚えておくよー」

ユナ「早くない!!」

ユウキ「カイトだからね」

キ「最近そんな言葉聞くなあ」
流行語と言う訳でアルゴに言うか

カ「キリト・殺す」

キ「なんでえ!!」

ア「いまのはキリト君が悪い」

キ「ユキ………?」

ユイ「うっ………あああああ!!!」

ユイが叫ぶといきなり周りにノイズが発生した 耳を抑えようとして少し腕の力を緩めてしまいその拍子にユイが背中から落ちようとしていた

カ「アツガツ?!ぐうっ」

キ「しまっ!」

ア「ユキ!!」

アスナはユイを慌てて抱き抱えた。一体何が

キリト「何だったんだ……今の……」

ユナ「ユイちゃん?!大丈夫!?!」

ユイ「………」

ユイは少し目を見開くと気絶してしまった

ア「ユキ………」

キ「何がどうなってるんだ………」

――

ウオーカツケー

保母さん「ありがとうございます。助けてもらって」

聞いたところ 軍の奴らが小さな子供3人を恐喝し 納税と称しアイテムや金を巻き上げようとしているらしい

そこを辞めさせようと1人の女の人が軍に立ち向かったようだ だったら女の人にそこは加勢するのが俺らだ。

カ「すつごい盛り上がり様ですね・・・」

ユナ「カイトが敬語を使つた!!」

ユウキ「そこに突つ込む?」

ここには沢山の小さな子供達がいる サーシャさんはそんな小さな子供達を保護してここで皆と暮らしているようだ

沢山の子供がいるだけあつて教会はすごい盛り上がりだ

サーシャ「毎日こうなんですよ?・・・ ユイちゃんの具合は大丈夫ですか?」

キ「おかげさまですつかり元気になりましたよ」

アスナ「ユイちゃんはもう大丈夫です」

サーシャ「今までにもこんな事があつたんですか?」

ア「私達も・・・22層の中で・・・」

カ「どうやら・・・2人とも記憶を失つてるみたいで・・・」

サーシャ「まあ・・・」

ユウキ「それで始まりの街にこの子達を知っている人はいるのかなって思っ……」

キリト「何か心当たりはありませんか？」

サーシャ「……多分始まりの街で暮らしてた子では無いと思います……」

サーシャ「デスゲームが始まり 皆が心に大きな傷を負いました 私はそんな小さな子供達を保護してここで一緒に暮らしてるんです 毎日困ってる子はいないか探してるんですがユイちゃんのような子は見た事が……」

キ「そうですか……」

こんこん 教会にノックの音が響いた

サーシャ「あら 誰かしら」

扉を開けてみるとそこには軍であろう女の人立っていた

「初めまして ユリエールです」女の方はユリエールと名乗った

ユウキ「軍の人……だよね……」

ユナ「軍の奴らがなんのようかしら？」

アスナ「昨日の件で抗議に来たって事ですか？」

ユリエール「とんでもない その逆です お礼を言いたいくらいです」

俺達は疑問に思い顔を合わせた

ユリエール「今日は皆さんにお願いがあつてきたのです」

ユウキ「お願い……?」

ユナ「なんですつて?」

突如訪問した軍のプレイヤー ユリエール お願いしたいと言っているが一体何を……?

カ「落ち着けまず先に話しを聞いてやれ」

とにかく俺達はユリエールさんの話を聞いてみることにした……

ユリエール「元々私達ギルドの管理者 シンカーは今のような独善的組織を作ろうとしたわけでは無いんです ただ、情報や食料をなるべく多くのプレイヤー達で分かち合おうとしただけで……」

キカ「だけど、軍は巨大になり過ぎた……」

ユリエール「はい、内部分裂が続く中、台頭してきたのがキバオウと言う男です」

カ「ツ!!」

『ワイはキバオウつちゆうもんや!』

『何でディアベルはんを見殺しにしたんや!!』

キバオウ……確かそんな名前の奴だ……

ユリエール「キバオウ一派は権力を強め、効率の良い狩場の独占をしたり、調子に乗っ

て徴税と称した恐喝紛いのことすら始めたのです」

ユリエール「でも、ゲーム攻略を蔑ろにするキバオウを批判する声が大きくなり、それをどうにかしようとしてキバオウは配下の中で最もハイレベルなプレイヤー達を最前線に送り出したのです」

ユウキ「コーバツさん……」

ユイ「私たちがあの時来る前に死んでしまった……?」

ユウキ「うん……」

ユリエール「結局作戦も犠牲が出て、キバオウは大きく批判の声を受け、もう少しでギルド追放まで追い込めたのですが……追いつめられたキバオウはシンカーを罠にかけるとゆう強行作に出たのです」

カ「強行作って……」

ユリエール「はい……シンカーを……ダンジョン奥深くに置き去りにしたのです……」

一同「「っ……!!」」

キリト「転移結晶は……?」

アスナ「まさか手ぶらで!?!」

ユリエール「彼は良い人過ぎたのです、キバオウの丸腰で話し合おうと言う言葉を信

じ・・・3日前に・・・」

カ「3日!?あのあのとんがりコーン野郎・・・!!!」

ユナ「と、とんがりコーン?!」

ユウキ「それで、シンカーさんは?」

ユリエール「やはりハイレベルなダンジョンの奥深くなので・・・身動きが取れないみたいで・・・全ては副官である私の責任です・・・ですが・・・とても私のレベルでは突破できませんし、キバオウが睨みをきかせる中軍なんて宛には・・・」

ユリエール「そんな中です、恐ろしく強い4人組が街に現れたとゆう話を聞きつけお願いに来た次第です」

ユリエール「キリトさん、アスナさん、カイトさん、ユウキさん、ユナさんどうか・・・私と一緒に・・・シンカーを救出に行ってくれませんか?」ユリエールさんはたち上がると俺らに頭を下げた

アスナ「・・・私達に出来る事なら力を貸して差し上げたいと思いますでもこちらでああなたの話の裏付けをしないと・・・」

ユリエール「無理なお願いだって言うのは分かっています・・・!!でも・・・今彼がどうしているかと思うと・・・もう・・・おかしくなりそうで・・・!!」ユリエールさんは涙ながらに話す

カ「やれやれアスナ 裏付けどうこうなんざ関係ねえ 俺はユリエールさんに力を貸すぜ」

ユリエール「カイトさん・・・」

カ「ユリエールさんの気持ち 俺にはわかります 大事な人が今 無事かどうかすら分からない・・・そんなの辛いですよね・・・」

ユイ「お父さん！ 私も力を貸すに一票だよ!!」

アスナ「2人とも・・・」

ユイ「それにね 私には分かるのその人の言っていることは本当だってね」

カ「へ？ユイちゃんそんな事分かるのか？」

ユイ「うん！上手くは伝えられないけど・・・分かるの！」

キ「・・・疑って後悔するよりは 信じて後悔しようぜ アスナ 行こうぜ」

俺らだけでなくカイト達もいるんだ何とかなるさ」

ユナ「むしろ敵がかわいそうね」

アスナ「相変わらず呑気な人ね・・・分かりました 私達で良ければ力をおかしいたします」

ユウキ「ボク達も力になります！」

ユリエール「ありがとうございます・・・！」

キリト「ちよつとお留守番しててない ユイ」そう言つてキリトはユイちゃんを撫でる

ユイ「や！ユイもいく！」

サーシャ「ユイちゃん私と一緒に留守番しましょう？」

ユイ「いや！」ユイは精一杯 首を横に降る

カ「おお・・・これが反抗期つてやつか・・・」

ユウキ「カイト！何言つてるの！ユイちゃん今から行くところは危ないから・・・」

ユイ「むう〜」ユイちゃんはキリトの腕にしがみついた

ユイちゃんはキリトにしがみついて行きたい！と言っている 連れてきたいけど危ないしな・・・ 反抗期の子供を持った親つてこんな気持ちなのか・・・

ア「ユイちゃん・・・」

カ「こうなつた子供には適わないのが親だ・・・しゃあねえ・・・連れてつてやる」

ユウキ「カイト!?!」

ユナ「えっ!! バカなの!! 死ぬの!!」

カ「後半・お前な」

ユナ「ふぁ!!」

俺がユイちゃんに振り向き

カ「たーだーし これを付けてくれよ」

俺は首に掛けていたエギルから貰ったネックレスをユイちゃんに掛けてやった

ユイ「何これ？」

カ「それはな？お父さんとお母さんの気持ちがおもったお守り お前をきっちり守ってくれるぞ 行く代わりにそれは絶対に付けること！じやないと連れてかないぞ？」

ユイ「連れてってくれるの!?わーい♪」

ユウキ「カイト!!」

カ「心配すんな 絶対守りきるからさ お前もユナも」

ユリエール「では、準備が整ったら言ってください 私がその場まで案内します」

—————

〔第一層黒鉄檻〕

ア「でもまさか始まりの街にこんな場所があったなんて・・・」

キ「βテストの時にはこんな場所無かったぞ？」

カ「へえ、キリトですら知らないんか」

ユリエール「上層攻略の進み具合によって開放されるタイプのダンジョンなんですよね キバオウはダンジョンを独占しようと計画していました」

キリト「専用の狩場があれば儲かるからな」

ユリエール「それが 60層クラスの強力なモンスターが出るので殆ど狩りは出来なかつたようです」

カ「所詮バカはバカなのだあ」

少し歩くとダンジョンの入口についた

ユイ「うわあ」ユイちゃんはキリトから降りてダンジョンの入口を眺めている ユイちゃんは隣で眺めている

ユイ「ユイ怖くないよ！」

前に目を凝らすとモンスターが大量にいるのがわかる

カ「ツ!!来たぞ!!」

そのモンスターの正体は.....

カ「か、カエル？」

そう、無数のカエルだった ゲコゲコと鳴き声をあげている

ユナ「ツ!?きやあああああああ!!」

ユウキ「!?い、いやあああ!!」ユウキとユナは俺の後ろに隠れると俺に抱きついてきた

カ「what?」

ユウキ「.....ボクね.....ああゆうの苦手なの.....」

ノ型（紫電（しでん））!!!」

キ「んなっ!? 卑怯だぞ!!」

カ「フハハハハハハ!! 勝てばよかろうなのだー!!」

ア「はあ・・・また始まった・・・」

ユリエール「いつもあれなんですか?」

ユウキ「いえ、今日はたまたまでして・・・」

ア「子供の事になると意地になっちゃって・・・負けず嫌いと言うか単純に馬鹿と言いますか・・・」

ユイ「ねえね、にいにいとキリトさんってどつちが強いのか? 2人とも」

ユウキ&ユナ「それはもちろん!」

アスナ「ね?」

ユウキ・アスナ・ユナ「カイト（キリト君）だよ!」

ユナ「は?」ユウキ「へ?」

アスナ「あら?」

ユリエール「・・・皆さん仲がよろしいんですね」

ユリエールはそう言つてクスつと微笑んだ

ユイ「あゝ! お姉さん初めて笑つた!」

く数分後く

キ「せりやあ!!」

カ「絶剣技三ノ型〈影月円舞（えんげつえんぶ）〉!!!!

ユリエール「……………それにしても何だかすみません……………任せっぱなしで……………」

ア「いえいえ、私達が入ったら多分凄く怒ると思いますし……………」

ユウキ「子供達も喜んでる事ですしね」

ユイ「すごい♪」

ユナ「大分奥に来たけどもうすぐかしら?」

ユリエール「シンカーは一定の場所ですつと止まっています 恐らく安全エリアにい

るとおもいます そこまで行けば転移結晶が使えますから」

カ「いやあく狩った狩った♪」

ユウキ「お疲れカイト!!」

ユイ「よくやったわねえ」

カ「おう! んで?」

キ「何匹だ!?!」

カ「んんつと……………120つてどこかな?」

キ「何っ!?!負けただど!?!」

カ「本気!?!よっしゃあ!!!俺の勝ちだあ!!!これで勝ち越しい!!!」

キ「お前ずるいぞ!!絶剣技を使うなんて聞いてないぞ!!あれ使われたらどうしようもないだろ!」

カ「武器の持ち味を最大限に活かしただけです!大人しく負け認めろ!男らしくねえぞ?過程など」
キ「方法などお」
カ「どうでもいいのだあー!」

キ「くそ!!」
ア「?どんなアイテムなの?」

キ「ふっふっふ・・・これを見ろ!!」

キリトはそう言つてアイテムストレージから何かを取り出した

〈スカベンジトードの肉〉

ユウキ「?!ひいひい!!!」

ユナ「!?ひやあああああ!!」

ユウキとユナはそれを見るなりまた俺に抱きついてきた
ア「な!なによそれ!!」

キ「スカベンジトードの肉」

その肉はなんかもうグチヨグチヨ動いてキモかった。

いや、茅場さんここまでリアルにしなくていいですよ

・
・
・

カ「あくそーういやドロップしたわ アレ」

ア「あのカエルの肉よね!？」

キ「ゲテモノ程上手いってゆうじゃないか♪ 後で料理してくれよ!!」

ア「っつ!! 絶! 対!! 嫌ああ!!」

アスナはキリトから肉を奪い取ると投げ捨てた

キ「ああ・・・なにするんだよ!」

ア「ふんっ!」

キ「くっそ! それなら・・・これでどうだ!!」

キリトは恐らくさつきドロップした肉を全部オブジェクト化した

ア「ひい!! いやああ!! 嫌!! 嫌!! いやああああ!!」

次々と肉を掴んでは投げ捨てるアスナ

キ「ちよ! アスナ!! やめ!!!」

ア「いい加減にしてよもく!」

キ「貴重な食料があああ!! せ、せめて一つだけでも!」

キリトはラストとなる肉を口に含んだ。んなアホな

ユナ「む、むりい」

ユウキ「うう・・・怖いよお・・・」ユウキとユナが抱きつく力はどん

どん強まっっていく

カ「おいおい・・・ユイちゃんに笑われんぞ？」

ユウキ「それでも嫌なものはやなの!!! あ！そう言えばドロップしたって言ってたよね
!？」

カ「カエルの肉？」

ユウキ「そう!!今すぐ捨てて!!じゃないと!!」

カ「わかってるさ俺はカエルの肉なんて作らないぜ」

ア「や！め！な！な！さ！い！！！！」

キ「ああ!?!ラストの肉が!!」

カ「さあて、捨てるかな」

キ「待てカイト！捨てるくらいなら俺に!!アスナが駄目なら後でエギルの所に・・・」

ユウキ「くくく!!!」

ユナ「フアウアアアアアアア!!」

ユウキとユナは俺から離れるとメニューを開き何かをいじる

少し待つと大量の肉がユウキの手元にあつた

ユウキとユナの顔は今にも泣き出しそうな顔だった

多分火事場の馬鹿力で肉を持つてるんだろうな・・・

カ「ヘアツ!？」

ユウキ&ユナ「欲しいなら……全部上げる(わ)!!!!」

ユウキとユナはキリトに向け肉を投げた。

キ「へ!? ちよ待っ!」

キリトは大量の肉の下敷きになった。わぁお

カ「やれやれだぜ……」

ア「自業自得ね!!」

ユウキ「……」

ユナ「……」

カ「ユウキ? ユナ?」

ユウキ「……やっぱり気持ち悪いく!!!!」

ユナ「ふうえええええええ!!」

ユウキとユナはそう言うときまた俺に抱きついてきた

カ「はあ……困ったやつちやなあ……」

ユウキ「ううう寒気がしてきた!!」

ユナ「ううカエルはもうイヤア……」

カ「全く……今日のはか弱い乙女だなお前は」

ユウキ「だつてえ．．．」ユナ「フアウウウ．．．」ユウキとユナはうるうるしながら話す

目で俺に何かを訴えているのが分かる

カ「はいはい よく我慢したな」

—————

ユリエール「もうそろそろでシンカーの元につきます 急ぎましょう」

カ「大分進んだな．．．．．」

ア「あ！あれって安全エリアじゃない？」

俺らの進んでる道の先に光っているエリアがあつた ところが安全エリア 何も無け

ればあそこにシンカーさんがいるはずだ

キ「．．．．．奥にプレイヤーが一人いるな．．．．．」

ユリエール「つ!!!シンカー!!!」

ユリエールさんは安全エリアへと一心不乱に走り出した

キ「お、おい！」

カ「俺らも行くこう！」

ユリエール「つ．．．．！はあ．．．．！はあ．．．．！」

「ユリエール!!!!!!」

まだ安全エリアには遠いから人物像はよく分からないがとにかく一人のプレイヤーが叫んでるのが見えた

ユリエール「っ！シンカー！！！」

キ「どうやらあれがシンカーさんのようだな」

カ「やったな無事に発見だ」

シンカー「来ちゃ駄目だ！！！」

4人「！！！！」

シンカー「その通路は！！！」

ユリエールさんが手を振りながらシンカーさんの元へと行こうとしてる時 俺の視

界にトラップ警戒の文字が現れた

カ「っ！くそ！！！」

俺はユリエールさんを助ける為 スピードを上げて走った

キ「まずい！！」キリトも俺の後を追って走ってきた

ア「駄目！！ユリエールさん！！戻って！！」

ユリエールさんが進もうとしてる右の柱からでかい鎌のような物が出てきた

カ「間に合えよ！！！」

俺はユリエールさんを抱え、鎌に当たらない様、走っていたスピードを落とすため魔

剣を地面に突き刺した

少しすると黒かった周りの壁には宇宙の様な物が広がり、鎌の持ち主の敵が現れた

キリト「大丈夫か!？」

カ「うぐつくそつ！ユリエールさんはここにいてください！」俺はユリエールさんを安全とは言えないがまだ安全そうな柱の近くに連れていき俺は敵の元へと駆けた

アスナ「2人と一緒に安全エリアに行ってください！」アスナはユイをユリエールさんにあずけた

ユリエール「は、はい！」

ユイ「お母さん・・・」

ユリエール「さ、こつちへ」

ユリエールさんが安全エリアに向かったのを確認するとユウキとアスナはこつちに
来た

あのかい鎌の持ち主？ それは俺の異名をそのまま使ったような奴だった
カ「死神・てか・はんつごたいそんな名前だな。」

黒いローブを着て、鎌を持った骸骨 死神そのまんまだった

ユウキ「強敵そうだね」

ユナ「長期戦の予感ね」

カ「いや、ユウキ お前は戻れ」

ユウキ「へ!？」

ユナ「ちよつと!？」

カ「今すぐユリエールさんと合流して、ユイちゃんを連れて転移結晶で脱出しろ!!」
 カ「識別スキルは優先的に上げてるつもりなんだがな。データが見えねえんだ。多分
 80...いや、90層クラスのバケモンだ。そんなバケモン女に戦わせるわけにゃいか
 ねえ...」

通常、敵の名前の横にはレベルが書いてあるはずなのだがあいつには書いてなかった
 それは余程今のレベルでは適わないような強敵だと言うことだ

キリト「俺とカイトで時間を稼ぐ! 2人は早く逃げろ!!!」

カ「早く行け!! もたもたしてる暇はねえ!!!」

ア「つ...」アスナはユイの方を振り向いた

通常、敵の名前の横にはレベルが書いてあるはずなのだがあいつには書いてなかった
 それは余程今のレベルでは適わないような強敵だと言うことだ

ユウキ「アスナ」

アスナ「ユウキも同じみたいね」

ユナ「私もいくわ」

ユウキ「2人をお願いします!!皆で脱出を！」

カ「っ!?ユウキ!!ユナ!!」

ユリエール「いけない・・・!そんな「早く!!」っ!」

ユウキとユナとアスナの目線で2人に合図を送り、ユリエールさんとシンカーさんは
転移の準備をし、ユウキとユナとアスナはこちらに来た

カ「抜かしたことを!!!何で脱出しなかったんだ!!!」

ユウキ「ボクだってやれる!!!それにテツヤを見離しに何か出来ない!!!!!!」

ユナ「援護ぐらいできるわ」

カ「っ・ユウキ・ユナ・」

ユウキ「ボク達ならきつと大丈夫 ね？」

ユナ「すこしは信用してほしいわ」

カ「・そうだな・よしっ!ちゃんと付いてこいよユウキ!!ユナ!!」

ユウキ「うん!」

ユナ「任せて!!」

キリト「っ!!来るぞ!!!」

死神が鎌を振りかぶった時、俺は魔剣と聖剣で自分の身とユウキを守り、ユウキも双

剣の前に剣を出してくれて2重のガード体制になった 恐らく生半可な攻撃じゃ破れないはずだ

しかし、思った以上に奴の攻撃は大きく、俺らは吹っ飛ばされた

カ「のわあっ!？」

俺は天井にぶつかりそのまま落下した、少し体に振動が残りながらも何とか立ち上がり、パーティーのHPを見る

俺とキリトは辛うじてHPバーのグリーンを保っていたけどアスナとユウキがイエローになっていた

ユナ「カイト!？」

カ「っ!!!」

キ「ぐっ・・・なんて威力だ・・・!」

俺らは最前線で常に戦いを続けた攻略組 レベルも自慢じゃないが恐らく最上位のクラスだろう その俺らですら満タンだったHPがかなりの勢いで減った その攻撃力は並大抵のプレイヤーなら恐らく一撃で死んでしまうような威力を持っていた

まさに死神の名にふさわしいかも知れない

カ「!!ユウキは!!!」

ア「っ!敵の前に!!」

カ「何っ?!」

前を向いてユウキを見るでもユウキは何故か立ち上がったてはいなく倒れたまんま
 だった。指一本ど動かず倒れたまんま

カ「は・おい・ユウキ!!! どうしたんだ!!!」

この時思い浮かんだのは二つ。あの威力でスタンを食らったか重いノックバックが
 発生したかの二つだった。

カ「こんな時に・・・!!!」

敵はユウキに向け鎌を振り下ろそうとした

カ「っ!! なめるな骨やろおおおおお!!!」

ユウキのHPはイエローだ・・・あんな攻撃食らったら一溜りもねえ!!

俺はすぐさまユウキの元へ行き、カウンターの絶剣技を発動したて敵の攻撃を単身で

防いだ

カ「絶剣技終(つい)ノ型(天絶閃衝(ラスト・ストライク))
 ！！！！」

でもやはり俺の体は吹っ飛ばされ宙に浮いた

その拍子に俺のHPバーが一気にレッドに落ちた

カ「あつぐあ・くそつ・流し斬れないか」

こんな所でユウキとユナを失ってたまるか!

やつと守るものたちを見つけたのに!!

まだだ・まだ終わらせない!!

カ「絶剣技破ノ型（烈華螺旋剣舞（れっからせんけんぶ））!!!十六連!!」

死神に向かって放たれた絶剣技奥義。だが死神はイエローにはなったが全然ケロツ
としていた。

カ「はっ・化け物め」

敵は何かは反応すると 俺への攻撃を止めた

カ「・ツ!？」

そう、反応したのはユイちゃんだった

ユイちゃんは俺の前に立ち攻撃を止めるように割って入った

ア「何で・・ユイちゃんが・・!？」

カ「っ!!しまっ!!!」

今度はユイちゃんに向かって攻撃を仕掛けようとした死神

ユイ「大丈夫だよ。お母さん」

奴はユイちゃんに向け、鎌を振り下ろした

キ「ユイ!!!」もう見てられねえ・・・!俺は思わず顔を背けた

けどユイちゃんへの攻撃は通らず防御壁のようなもので守られ、死神は後退した

そしてユイちゃんの上に現れたのは《Immortal Object》の文字
 ユナ「破壊不能オブジェクト・・・ですって!!」

ユイちゃんは敵に向かうと少しずつ浮かんでいき

ユイちゃんは手を前に出すとユイちゃんの周りには炎を纏った剣を取り出した

死神に攻撃を仕掛けると死神の鎌はいとも簡単に折れ、剣で斬られると炎の丸い玉に包まれた、そしてその玉は次第に消えていき、最後は花火のように散っていった

ユウキ「あ・・・れ・・・?ここは・・・?」

ユナ「ユウキ!!!気がついたのね!!!」

ユウキ「何がどうして・・・ってユイちゃん!?何でここに!?!」

カ「もう戦いは終わったんだ・・・それよりもだ・・・ユイちゃん・・・ユイちゃん・・・」

さっきのあれは一体何だったんだ?破壊不能オブジェクトと現れたと思ったら今度はあの死神を消し去っていったし・・・

ユイ「お父さん お母さん 私ね? 全部・・・思い出したんだ」

俺達は ユイちゃんの話聞くため 安全エリアまで移動した

カ「・・・ユイちゃん・・・思い出したんだな・・・昔の事・・・」

ユイ「はい・・・カイトさん、ユウキさん、ユナさん」

「っ！」

ユイ「ソードアート・オンラインと言う名のこの世界は一つの巨大なシステムによって支配されています」

ユイ「その名前は『カーディナル』 人間のメンテナンスが必要無いこのシステムがSAO この世界のバランスを保っていて、自らの判断によって色々なものが制御されます」

ユイ「モンスターやNPCのAI アイテムや通貨まで、出現バランス、何もかもがカーディナル指揮下のプログラム軍に操作されています プレイヤーのメンタル的なケアも」

ユイ「メンタルヘルスカウンセリングプログラム 試作1号 コードネーム ユイ
ア「っ！」

カウンセリングプログラム・・・通りで俺がユイを保護した時プレイヤーマーカ―も何も出なかった訳だ・・・

ユウキ「プロ・・・グラム・・・？ ユイちゃんはAIだってゆうの・・・？」

ユイ「プレイヤーの皆に違和感を与えないよう、私達には感情無法昨日が取り組まれています」

ユイ「つまり私はニセモノ 何もかもが……この涙も……」

ユイの頬を涙が伝う 何度も何度も 俺達からしたら涙は悲しい時流れるものだでも本当にユイに感情が無いとしたらこの涙は何だ？

ユイ「ごめんね……アスナさん……キリトさん……」

ユナ「ユイちゃん……」

ア「でも、記憶が無かったのは……AIにそんな事起きるの……？」

ユイ「二年前 正式サービスが始まった日 カーディナルは何故か私達にはプレイヤーに関する一切の干渉の禁止を言い渡しました 私達はやむ無く プレイヤーのメンタル状態のモニタリングだけを続けたんです」

ユイ「状態は……最悪と言つてもいい物でした、恐怖 絶望 怒りと言つた負の感情に支配された人々 時として 狂気に陥る人もいました」

ユイ「本来であれば すぐにでもそのプレイヤーの元は赴かなければ行きませんが、でも 人に接触する事が許されない 私は徐々にエラーを蓄積させ、崩壊していきました」

ユイ「ですが、他の人達とは大きく異なるメンタルパラメーターを持った二人のプレ

イヤーに気づいたの 喜び 安らぎ でもそれだけじゃない そんなキリトさん達に会いに行きたくて私は それぞれ別れ 皆さんの元に行くため、フィールドをさまよいました」

ア「それで22層の森の中に・・・」

ユイ「はい、キリトさん、アスナさん 私ずっと 2人に会いたかったんだ・・・おかしいでしょ？ そんな事思えるはず無いのに・・・私は・・・ただのプログラムなのに・・・」

ア「ユイちゃん・・・ユイちゃんは本物の知性を持つてるんだね・・・」

アスナがそう言うとユイは横に首を振る

ユイ「私には分からない・・・私がどうなったのか・・・」

悲しそうに涙を流す2人の前に行き、話しかけた

カ「ユイちゃん お前達はシステムに操られるプログラムなんかじゃない だからさ 望むことを話せるはずだお前の望みは何かな？」

ユイ「私は・・・私は・・・ずっと・・・一緒にいたいよ・・・！お父さん・・・！お母さん・・・！」

涙を流しながら俺らの方に手を伸ばすユイちゃんでも言えたね ユキが願ってることを

ア「っ……!!……ユイちゃん!!」

アスナはユイちゃんの元へ走ると、そのまま抱きしめた

ア「ずっと……ずっと一緒だよ……!!! ユイちゃん……!!」

キ「ユイは俺達の自慢の子供だ……離れる事なんかねえ……!」キリトはユイちゃんの元へ行き、2人をそつと抱きしめた

3人でずっと 永遠に過ごしていこう そう固く誓った

でも、その誓いは すぐさま破られるものとなった

ユイ「……ごめんなさい……もう……遅かったみたいです……」

ア「へ……?」

キ「遅いって……」

ユイ「今私が座ってるこれは、GMに緊急アクセスするために設置されたコンソールなのです。これを使って あのモンスターを消去しました……それと同時に 今のプログラムのチェックされているの カーディナルの命令に違反した私は システムにとっての異物 すぐにも消されるのです……」

ア「そんな……!」

キ「嘘だろ……!? 何とかならねえのかよ!!」

ユイ「……お父さん お母さん 今までありがとうね これでお別れだよ?」ユイ

はそう言うのと微笑んだ

ユイ「ばいばい・・・！お父さん！お母さん！」

ユキはそう言うのとアスナが抱きしめて腕から消え去ってしまった

最後にアスナの頬に触れていたユイの手だけが残りその手も次第に消え去ってしまった

ア「っ!!・・・そんな・・・」

ユウキ「うっ・・・ああああ・・・!!!何で・・・何で!!!」ユウキとユナと

アスナがその場で座ると涙が次々と流れ落ちる

ユウキたちが泣いたことで 俺はその言葉で今まで溜めていた感情が爆発した

カ「上等だあごらあ!!カーディナル!!!いや!茅場!!!そう毎回毎回 お前らの思い通り

になると思うんじゃねえぞ!!!」

キ「やるぞ!!カイト!!!」

カ「ぶちかますぜえ!!」

俺とキリトは先程までユキ達が座っていたコンソールシステムに手をつけた

ユウキ「カイト・・・何を・・・」

ユナ「何をするつもりよ」

カ「ユイちゃんが消えてまだそう経って無い!!その今ならここのGMアカウントでシステムに割り込める筈だ・・・!!」

俺とキリトがキーボードを打ち込み 着実とシステムの奥深くまで行けた

そしてロードゲージの様なもの満タンになると同時に

その場が光だし 俺とキリトは吹っ飛ばされた

カ「ぐっ・・・!!」

ユウキ「カイト!!!」 ユナ「カイト!!」 ユウキとユナは俺の側まで来てくれた

ユウキ「大丈夫?」

ユナ「怪我はない?」

カ「あ・あ・大丈夫だ・キリト?どうだ?取れたか?」

キ「取れたぜ・これがユイの心だ」

その数日後に決るようにヒースクリフからメールがきた

『七十五層のボス部屋が見つかった』
つと

骸骨の狩人

カ「偵察した奴らが全滅?!」

偵察に入った部隊が危険になつたらすぐさまボスフロアの外で待機している部隊が救援に入るはずだった…ただの結晶無効化エリアならそれで済むはずだったのだが、偵察部隊が入つたら扉が閉まつたというのだ。

押しても引いても、《鍵開け》スキルを用いても扉はビクともせず、開いた時にはプレイヤーは一人もいなかったという事だ。黒鉄宮の名前にラインが引かれていたので脱出出来たわけではない…彼らはこの世界からも現実からも退場したということだ。

これまでの戦いではプレイヤーの安全のための偵察が重要であった。偵察での情報から対策を建てて最小限の犠牲で攻略を進めて来たのだ…俺だって情報無しでの戦いは74層が初めてだったしな…

それが急に出来たところ勝負なんかにされて…

それに今回はそれだけではない。75層のボスという点も問題だ。25層に50層…クオーターポイントと呼ばれる層のボスはこれまでのボスとは一線を越える強さであった。今回もこれまでのボスとは比べようの無い程の強さを持ったボスが現れるだ

ろう。

圧倒的な力を持ったボス、情報無し、脱出不可能…俺たちの心を折るには十分なほどのトリプル攻撃だ…それでも…

カ「や•ら•な•き•や•い•け•な•い•ん•だ•よ•な•…」

ヒ「そ•う•だ•誰•か•が•や•ら•な•け•れ•ば•な•ら•な•い•」

カ「わ•か•つ•て•る•」

ここで止まってしまったら俺たちが現実には大幅に遅れてしまっただろう。さらに今回のボス戦で全滅したらもはや攻略は諦めることになることになるかもしれない。どっかの誰かさんは攻略組は全プレイヤーの期待を背負っていると言っていたが改めてそれを実感している…正直そんな責任は重たいがな…

そして、これ以上攻略を遅らせて士気が低下することを懸念した血盟騎士団団長《ヒースクリフ》は早急に討伐隊を結成しボス戦に挑むことを提案し他の有力ギルドもそれに賛同した。ボス戦は明日…それまでにやれることはやらないとな…

「家」

ユナ「ボス戦明日なんだっけ？」

カ「そうだけど…急にどうしたんだ？」

コイツらとはそれほど長い付き合いでは無いが、なんとなく今日はいつもと違うと感じた。一体どうしたのだろうか？

ユナ「そのボス戦って入ったらボスを倒すまで出られないだよね？」

カ「ああ、そうだよ」

俺がそう言うのと口を閉ざしてしまった。しかし、しばらくすると顔を俯かせたまま口を開いた。

ユナ「カイトはさ：怖くないの？正直な話死んじやう可能性の方が高いんよ：」

なるほど：俺のことを心配してくれているのか：別にお前が気にすることでも無いのにな。

すると彼女はさらに口を開いた：その内容は俺が初めて聞く彼女自身の話であった。

カ「早かれ遅かれ人は死ぬんだ。このデスゲームだってそうだ。早くクリアしないとリアルに身体が持たないかもしれない」

だから言うこいつを。ユナを安心させるために

カ「だとしてもこのデスゲームで死ぬつもりはないさ。死ぬときは寿命で死ぬさ」

俺がそういうとユナは顔をうつむいた後に笑顔でいった。

ユナ「ふふふ。何よそれぞれの安心させるようでさせない話しは」

カ「むっ結構いい感じに喋れたと思うのに。」

ユナ「ふふそんなことないわ！惚れ直したわ!!」

ユウキ「何話してるの？」

ユナ「なーんにも!!」

そんなことがあつた次の日、俺は75層《コリニア》の転移門広場にいた。ここに
いる連中が今回のボス戦に挑む連中だ。時間はまだあるのもう少しは増えると思うが

：

ク「おーい!!カイト!!」

カ「なんだえーとクライインじゃなくてアジ・ダカーハ？」

ク「誰がアジ・ダカーハだ!!」

カ「冗談だよ冗談。10割だけな」

ク「なあんだあ。冗談か。って全部本気かよ!!」

ユウキ「カイトだからね!!」

ユナ「便利ね。」

ヒ「皆、今日は集まってくれて感謝する。それでは行こうか」

聖騎士ヒースクリフ：コイツの強さは規格外だ。コイツ無しでは壁が崩壊する可能

性が高い。久しぶりの出陣だ：聖騎士殿には頑張つて貰おう。壁として

ヒ「コリドー・オープン」

その言葉と共に回廊結晶が起動する。俺たちはその中に入って行つたのであつた。

回廊結晶がセットしてあつたボス部屋の前に辿り着いたが、正直薄気味悪いな：まあの先何が起こるのか分からないという不安のせいだと思うが：

ヒ「それでは諸君、解放の日のために！」

「「「おおおおおおお!!!」」」

ヒースクリフの言葉に周りから大きな声が起こる。本当にあのおっさんはぶれないな：いつも堂々としていて：

俺には真似出来そうに無い、いやそれ以前にしたくない。周りの連中はいつ戦闘が始まってもいいように武器を構える。自分もこの相棒である《魔神殺しの聖剣》と《真実を貫く魔剣》を装備して構える。この緊張感。今まで以上だな。

ヒ「戦闘開始！」

その言葉に続いて全員がボスフロアに入り扉が閉まる。ついにボスとご対面だと思つていたのでが：

『おかしい…ボスがない』

ボスは一向に現れなくて出てくる気配さえ無い。周りは気味が悪い程静かで逆にそ

れが俺の恐怖を煽っている：昔のホラー映画の演出のようだ。

ア「上よ！」

アスナの声に従い天井を見上げると骸骨の頭部に骨だけの百足のような胴体、そして両方の手に鎌を持ったモンスターがいた。：名前は《スカル・リーパー》か：本当にホラー映画のような登場をしやがって。貞子かって貞子よりましかな？

カ「固まるな！距離を取れ！」

《スカル・リーパー》はそのまま俺たちが固まっている場所に急降下している。ヒースクリフの声にほとんどの奴は反応して各々散開したが逃げ遅れた奴が二名：おそらくあいつの姿にビビッてしまったのだろう。

キ「こつちだ！走れ！」

キリトの言葉に二人はようやく走るが間に合わないだろう。おそらくボスの攻撃が直撃する：しかしどっから見てもあの鎌による攻撃は下手をしたら一発で死ぬレベルの攻撃力を秘めているだろう。開始早々にやらせるかよ！

カ「初（はつ）ノ型（へ紫電（しでん））！！」

キリトの言葉に二人はようやく走るが間に合わないだろう。おそらくボスの攻撃が直撃する：しかしどっから見てもあの鎌による攻撃は下手したら一発で死ぬレベルの攻撃力を秘めているだろう。開始早々にやらせるかよ！

てめえの奇襲なんて返り討ちにしてやる！早速俺は本日一本目の絶剣技を使用する。
紫電：その名のソードスキル立ち上げのための動作が最短である技だ。突きでの攻撃だ。

karararararararararara!!!!

なんと運の良いことに奴の赤い目に直撃した。そこが奴のクリティカルポイント：まあ目が弱点じゃない奴なんていないと思うが：だったらしく、態勢を崩した奴は床と衝突した。

ヒ「！全員ボスを囲め！」

流石ヒースクリフ：咄嗟に起きた出来事を冷静に分析してすぐに指示を出した。その指示に従って、未だに硬直している俺以外の連中が全員ボスを囲んで攻撃を開始した。しかし、ボスもあの巨体からは考えられない程の速さで態勢を直し、俺目掛けて突っ込んで来た。

カ「！ツち：！」

ボスの鎌による攻撃を防ぐ、しかし俺は今更ながらある事実に気づいた。

カ「コイツは鎌が二つあるんだった！」

ボスの鎌が次から次へと俺を襲い反撃をする隙すら与えてくれない。二刀でもダメージは俺に蓄積してHPは既に黄色を迎えている。

ヒ「ふん！」

しかしその猛攻は俺とボスの間に入ったヒースクリフによって防がれた。あの攻撃を弾くなんてどんな化け物だよ……まあお陰で助かったのだが……俺はポーシオンを取り出して飲む。すると俺のHPはゆっくりと上昇していきついには最大値まで達する。さて……戦いは始まったばかりだ。俺はボスに向かって走った。

カ「……ヒースクリフ!! 肩あ!!」

ヒ「……ッ!!」

ヒースクリフが俺の言葉に反応して肩を差し出した。

カ「ユウキ!!」

ユウキ「うん!!」

俺とユウキは一緒にソードスキルを放つ。

カ「絶剣技月ノ型へ十六夜(いぎよい)!!」

ユウキ「ハアアアアアア!!」

karararararararararara

!?!?!?

突然のアクシデントで先制攻撃に成功した俺たちであったが時間が経つにつれて旗

色が悪くなってきた。

パリーン

また一人ボスの鎌の犠牲になってしまった。

このボスは防御力もさることながら最大の問題はその攻撃力の高さであった。特にあの鎌による攻撃……あれこそが先ほど攻略組のトッププレイヤーをたつた一撃で葬ったものである。しかも奴はそれを二つも持っている。それに側面から攻撃しても見た目に合わずちよこまかと動く上に側面の足にも攻撃判定があるので攻撃を当てづら。正直俺たちは攻めあぐねてた。せめて鎌が一本ならここまで攻めづらくなることはないはずだ。それに俺には奴の腕を一本消せれる技がある。しかし……そいつは相手に当てるのが困難な技だ。

カ「せめてあいつに近づけたら……！」

しかし、鎌の猛攻を凌いで正面から懐に入るのはたかが火力プレイヤーの俺には不可能だ。

今も正面に立っているが防ぐだけで精一杯だ。そんな時に千載一遇のチャンスが来た。

ヒ「行きたまえ。カイト君」

難なく二つの鎌をヒースクリフは盾で受け止めて俺に声をかけた。奴の懐はがら空

きで隙だらけ……こいつを使うなら今しかない！俺は聖剣と魔剣を取り出した。でもこいつを決めれば俺たちは有利になる。絶対に外さねえ……！

全速力で走って右足を前に左足を後ろに……所定のモーションを行うと闇と光のライトエフェクトを纏った剣が相手の腕の付け根に刺さる。だがまだ終わりじゃない……ライトエフェクトを纏ったままの剣をそのまま射出する。

《絶剣技スキル》最上位火力技の一つ《流星》……この技の特徴は《絶剣技スキル》で硬直時間が短いこと。

高速移動する剣が対象の耐久値を削る事である。

思った通りライトエフェクトを纏って振り下ろされボスを削り硬いものを削る音がする。そして……

パリーン

ボスの腕は床に落ちて消滅する。これで奴の脅威は半減した。

ヒ「全員ボスの腕が再生する前に叩くぞ！」

パリーン

ボスの腕は床に落ちて消滅する。これで奴の脅威は半減した。

ヒ「全員ボスの腕が再生する前に叩くぞ！」

キ「うおおおおお!!」

カ「はあああああ!!」

キリトの《二刀流》のソードスキルとアスナの細剣最上位技の一つ《フラッシング・ペ
ネトレイター》がボスに突き刺さりボスが仰け反る。対してカイトは《絶剣技》破ノ型
《烈華螺旋剣舞（れっからせんけんぶ）》を放つ。

ク「おりやーーー!!」

エ「うらああああ!!」

そしてクラインの《刀スキル》による連続攻撃とエギルの地面を揺らすような斧の一
撃が叩き込まれる。

ユウキ「やあああああ!」

「うおおおおお!!」

ユウキの《片手剣》最上位技の一つ《ベルセルク・カリヴァー》と《血盟騎士団》の
攻撃プレイヤーによる様々なソードスキルについてボスは態勢を大きく崩した。

ヒ「全員突撃！」

そんなチャンスに逃すわけなくヒースクリフの号令で壁プレイヤーも含めて全員がボスに突撃する。

karararararararararara!!

そうボスが叫び身体を捻らせてきた。

グサツ

カ「なん・だど!!」

意外ツ!!それは尻尾ツ!!ボスが身体を捻らせて放った尻尾の先端がカイトの身体を貫いた!!鎌ほどの攻撃力はないがその攻撃方法には全員さすがにこれにはびびった。

ユナ「カイト!!」

このことにユナは歌をやめてしまうほどことであつた。

ユウキ「あああ・ああ」

ユウキは攻撃を中断してしまった。

ヒ「カイト君!!」

キ「カイト!!くそつ!!」

ア「カイト君!!」

karararararararararara!!

ボスはカイトを嘲笑うようにみていたが

カ「なめるなよ。この」

カ「骨野郎がああああああああああああ!!」

カイトはすぐさま絶剣技を発動させた。聖剣が尻尾び当たり尻尾が破壊されてカイトが落ちた。

ユウキ「カイトツ!!」

カ「あぐうぐがあ」

ユナ「早くこれを飲みなさい!!」

ユナはカイトに聞いたが問答無用の如くカイトの口の中にポーシオンを押し込んだ。

カ「んぐう!! んぐつ んぐつ ぷはッ!! た、たすかったぜ」

ユウキ&ユナ「カイトツ!?!」

カ「とりあえず抱擁は後だ」

ユウキ「そうだね。ごめんね、とりみだしちゃった」

ユナ「そうね。キリトたちも頑張ってるんだし」

カ「さあ。ユナの歌も俺たちの戦いも」

クライマックスだぜ!!」

『うおおおおおおおおおおおおおお!!』

ヒ「カイト君!! 決めたまえ!!」

ク「決めな!! カイト!!」

ユウキ「イツケーーーー!! カイトーーーー!!」

キ「カイト!! 行くぞ!!」

カ「ああ!! 行くぜ!! 二人で最高のスキルを」

・

『一緒にぶちかます!!』

こうして犠牲は少なからずあつたが戦いは終わった。
波乱はこれだけでは終わらない。

END OF THE WORLD

スカルリーパーとの戦いは終わった。歓喜の声をあげる者は誰もいなかった。俺たちは体力と精神を大量に使い倒れこんでいた

ク「何人やられた…？」

クラインがかすれた声で言う。

エ「…12人死んだ…」

ク「嘘だろ…」

エギルさんの言葉に俺たちは信じられなかった。

ク「あと…25層もあるんだぜ…」

エ「俺たち、本当にてっぺんまでたどり着けるのか…」

カ「それに、このクォーター・ポイントでこの強さってことは100層にいる奴って

…どのくらい強い強さだ…」

クラインさんとエギルさんのあとに俺が続けて言う。

スカルリーパーでこの強さだと100層のボス戦では9割近くが死ぬことになるか

もしれない……。この戦いで死んだ人、これから多くの人が死ぬと考えただけでも恐怖を刻み込まれた気分になった。他の人も俺と同じ気持ちだろう……。

辺りを見回すとヒースクリフ団長だけが普通に立っていた。さすが、最強のプレイヤード……。あの戦いで体力と精神を大量に使ったはずなのに凄いな……。体力？ と思いつくとヒースクリフのHPをみた。するとヒースクリフのゲージはイエローゾーンではなくグリーンゾーンで留まっていた。とつさにキリトの方を見るとキリトも感じたのかキリトが頷いた。

ユイ「うぐっぐすう。どうしたの？」

ユウキ「ヒースタリフに何かあるの？」

ユウキとユナが抱きついた状態で聞いてきた。

俺は決心をつけてユウキたちにいった。

カ「なにがあっても俺の味方で居てくれ」

そう言いユウキたちを離し《魔神殺しの聖剣》と《真実を貫く魔剣》を構える一閃した。

カ「ッ！！」

ヒ「ッ！！」

ギキイン！！

カ「ハッ!!こっちは囷だ」

ヒ「**・**何？」

キリトの攻撃がヒースクリフ団長に攻撃する。それに気づいたヒースクリフ団長が盾で防ごうとしたがキリトは軌道を変えて剣を突き刺そうとした。しかし、紫の障壁で防がれた。

団員「何なんだ、あれは…」

さすがの俺はこれにはびびった。

ア「システムの不死…？って、これはどういうことですか、団長…？」

キ「この男のHPゲージはどうだろうとイエローまで落ちないよう、システムに保護されている」

キリトとアスナの会話から俺は確信した。そう感じた俺はヒースクリフに言うてやった。

カ「この世界に来てここに閉じ込められてからずっと疑問に思っていたことがあった。あいつは、今ここで俺たちを観察し、世界を調整しているんだろうって…。でも、俺は単純な心理を見落としていたよ…。『他人がやっているRPGを傍らから眺めるほどつまらないことはない』…そうだろう、

茅場晶彦：「

その場にいる全員が驚く。

ヒ「何故気づいたのか、参考にまで教えてくれないか」

キ「最初におかしいと思ったのはデュエルの時だ。最後の一瞬だけ、あまりにも速すぎたよ……」

ヒ「やはりそうか。あれは私にとっても痛恨事だった。君の動きに圧倒されてつい、システムのオーバーアシストを使ってしまった」

そのままヒースクリフは言いきった。

ヒ「確かに私は茅場晶彦だ。付け加えれば、最上階で君たちを待つこのゲームの最終ボスでもある」

カ「へー。身近なところにラスボスか。御大層なもんだな茅場晶彦」

ヒ「そうだカイト君。どうだいいいシナリオだろ？」

俺の言ったことにヒースクリフ団長いや茅場晶彦が答え、キリトの方に顔を向ける。

ヒ「最終的に私の前に立つのはキリト君、君だと予想していたよ。二刀流スキルは全
てのプレイヤー中で最大の反応速度を持つ者に与えられ、その者が魔王に対する勇者の
役割を担うはずだった。だが、君は私の予想を超える力を見せた。まあ、この想定外の
展開もネットワークRPGの醍醐味と言ったところかな」

カ「じゃあ俺のスキルは？」

ヒ「あれは非常事態のものだスキル名まで決めていなかったただがね。やるまえにスキ
ル名教えてくれるかい？」

カ「《絶剣技》だ」

ヒ「そうか《絶剣技》か」

団員「俺たちの忠誠：希望を…よくも、よくも！よくも——！！」

血盟騎士団の1人のプレイヤーがヒースクリフに攻撃しようとする。しかし、ヒース
クリフはメニニューウインドウを開き、何かを押す。すると、ヒースクリフを攻撃しよう
としたプレイヤーが倒れこむ。麻痺状態か…。

ヒ「今、私と戦う権利があるのはキリト君、カイト君だよ」

カ「どうということだ？」

俺が問う。

ヒ「君たちには私の正体を看破した報酬を与えなくてはな。今この場で不死属性を解

除した私と1対2で戦うチャンスをあげよう。私に勝てば、ゲームはクリアされ、生き残った全プレイヤーがこの世界からログアウトできる。どうかな？」

キ「わかった…」

キリトも戦うつもりだ。

ア「駄目よ、キリト君」

ク「キリト！やめろ！」

ユナ「やめてカイト!!」

ユウキ「カイト!!」

アスナ、クライン、ユナにユウキが必死に俺とキリトを止めようとする。

キ「アスナ、必ず勝つてこの世界を終わらせる」

ア「わかった、信じているよ」

キ「エギル、今まで剣士クラスのサポート、サンキューな。知ってたぜ、お前が儲けの殆どを中層プレイヤーの育成につき込んでいこと。クライン、あの時、お前を置いて行つて悪かった…。」

俺もユウキたちのところに行き

カ「勝つて現実に戻れたら結婚してくれ」

ユナ「ふふふそれ、少し早くない？」

ユウキ「うん。まだ結婚出来る歳じゃないでしょ僕たち」

カ「あら？じやあ付き合ってくれ」

ユナ&ユウキ「はい」

ユウキたちに言ってヒースクリフに向き合う。そうするとキリトがヒースクリフに言った

キ「1つ頼みがある。簡単に負ける気はないが、もし俺が死んだら暫くでいい、アスナが自殺できないように計らってほしい」

ヒ「よかろう」

ア「キリト君！駄目だよ！そんなの、そんなのないよ!!」

カ「あ、じゃあ俺の方も」

ヒ「了解した」

ユウキ&ユナ「!？」

アスナさんの叫び声が聞こえる中、デスゲームに囚われたプレイヤー全員の命を賭けた戦いが始まった。

キ「ハアアアアアアアアアアツ!!」

キリトが走った。

ガキイン!!

ヒ「フンツ!!」

カ「忘れてるぞ!!」

そう言いながらヒースクリフに《絶剣技 初(はつ)ノ型(紫電(しでん))》を放ちながら接近する。

ヒ「ムツ!!」

ギャリィィィ!!

カ「ちい!! スイッチ!!」

キ「セイヤアアアアアアア!!」

ヒ「ムツ!!」

キリトがヒースクリフに接近して剣を振るう。しかしそれも弾かれキリトが焦りソードスキルを発動させた《二刀流スキル(ジ・エクリップス)》

カ「キリト!! くそっ焦り過ぎだ!!」

そう叫んで接近しようとするが

パキーン!!

カ「なっ!!」

ヒ「去らばだキリト君」

そう言ってライトエフェクトを纏った剣による一撃を放つ。それを動けないキリト

が避けられるはずがなくそのまま剣はあいつの体を…

キ「な…!! なんだ!」

しかし奴の剣はキリトに当たらなかった。それはキリトの前に麻痺状態で動けないはずのアスナが飛び出しその一撃を代わりに受けたからである。

奴の攻撃を受けたアスナをキリトは抱き締める。そしてアスナの体はこの世界で死んだ奴と同じようにポリゴン片になって消えた。なんでこんな事に…!! ちくしょう! ちくしょう!

カ「ヒ、ヒーースクリフーーーーー!!」

俺は怒り《絶剣技 終(つい)ノ型(天絶閃衝(ラスト・ストライク))》を発動させる。

カ「ハアアアアアアアアアツ!!」

だがすべて防がれた。

ヒーースクリフは剣ろ盾を俺とキリトに向けた。

ヒ「今度こそさよならだ」

ユウキ&ユナ「カイトーーーーー!!」

ザクツ

カ「ガハツ
.....」

キ「セイヤアアアアアア!!」

カ「なめるな! あああああああ!!」

キリトは剣を光らせて俺はヒースクリの剣挟むように剣技を発動させる。

カ「絶剣技」

ヒ「!?!」

カ「へ天双絶閃衝（ラスト・ストライク・デュアル）<」

キリトは叫びながら奴にアスナの細剣を突き刺した。おして…

パリーン

二人の体はガラスのように砕け散った。俺のHPもなくなってガラス片となり散った。ユウキとユナの方を見ると泣き崩れていた。やれやれと思ひユウキとユナに笑顔に向けて『ありがとう』と言った。

『全プレイヤーのみなさんにお伝えします。ゲームはクリアされました。現在ゲームは強制管理モードで…』

———?———

「は？」

『ここはゲームマスターの茅場様が作った場所です。マスター』

『ええそうね。ゲームクリアおめでどうと言えはいいのかしら? マスター』

カ「お前は?」

『私の名前はテルミヌス・エストです。つまりマスターの剣です』

『私もそうよ。レスティア・アッシュドール。あなたの剣よマスター』

カ「ええ、そうなのか。エスト？レステイア？」

エスト『なんでしよう』

レステイア『なにかしら』

カ「ここがなくなったらお前たちがどうなる？あとマスターはいいカイトだ」

エスト『私達は問題ありませんカイト』

レステイア『ええノープロブレムね』

カ「ん？どういうことだ？」

エスト『私達はあなたの剣です』

レステイア『何処でも一緒よ』

カ「そうか」

意識がうすれて

『だから安心して何処へあなたが行こうと私達はあなたの剣。どんな世界でも一緒に。あなたの剣であるために』

知っているようで知らない天井だ。

気が付くと俺の視界は真っ暗で頭に何か重いものが載っているような感じがした。筋力が低下しているのだろう…上手く動かせない腕を使ってそれをどける…すると目の前には真っ白な天井に真っ白な壁…ここは病院であろう。にしてもガリガリになっているかと思ったら全然大丈夫なんだな。

こうしてデスゲームが終わった。

A L O 編

アルブヘイム

カタカタカタ

一つの部屋にパソコンを叩く音が聞こえる。

その前に立つものは画面の前で満足げに笑顔を向けたがすぐに顔を軽くかした。

カ「あく、ここまでいいんだが、中にいれるものがないな。」

そう、この俺風早 界斗（カゼハヤ カイト）

S A Oはクリアされて現実に戻され多くの者が歓喜した。が戻って来ないものもいた。

カイトはそこで思考を切り替え席を立つ。

カ「さて、病院いくか」

病院にいく準備を進めた。S A Oにログインしその中のデスクゲームで会い一緒に行動して攻略したり結婚までしたプレイヤー、ユナとユウキが未だに目覚めない病院へ。

病院に着いた俺はまず病室へと足を運んだ。

病室前の札にユウキたちの名前があった。中に入ろうとしたら和人がこっちに来ていた。

界斗「キリトか」

和人「キリトじゃなくて和人な」

界斗「おつとすまない」

和人「にしてもお前のその格好、女の子にしか見えないな」

界斗「うっせ気にしてんだ、てかお前もそうだろ？」

和人「界斗よりましだな」

界斗「とりあえず入ろう」

—————

ガラガラガラ

そんな音をたて病室内に入ると三人の眠り姫がいた。

未だにナーブギアを被り腕に点滴が繋がれていて二年たったと言うのに全然キレイだった。

界斗「相変わらずだな」

和人「そうだな」

そう続かない会話を続けているとこの病室内に誰かが入ってきた。何回か来て何回

も会ったことがあるから面識があるが知らない気配が混じっていた。

「やあ、来てくれたんだね。いつもすまないね、カイト君とキリト君」

界斗「いえそんなことないです」

その男、結城章三は、二人の手を取って感謝の言葉を述べた。

結城父「で？どちらが娘と一緒に居てくれたのかな？」

界斗「こつちにいる和人です」

和人「娘さんと一緒に居させていただいた改めて桐ヶ谷和人です」

結城父「そうか。和人君は娘を愛していたか？」

和人「はい」

結城父「そうか」

そう結城父が和人に問いを聞き終えたら少し間が置きアスナの顔を見たあと今度は

こつちを見てきた。えっ？！な、なに？！なんのよう！？

結城父「君はゲトム内で他のその木綿季さんと悠那君をどう思っているのかね？」

界斗「愛してます」

即答。即答であった。さすがに結城父はこんなに早く答えられるとは思っていないな

かつたらしく目を見開いていた。

結城父「わかった」

結城父はしばらく考えてから顔を上げて扉の方を見て言った。

結城父「入ってきたまえ」

結城父もとい結城章三が言ったあとに一人の男が入ってきた。

「はい、こちらが？」

結城父「そうだ。和人君に界斗君だ。紹介しよう。こちらは須郷君だ」

「これはこれは!!英雄のカイトさんとキリトさんか!!。つていけないゲーム名の名前を言うのはマナー違反でしたね」

和人「い、いえ大丈夫です」

界斗「。(こいつ)」

須郷「社長そろそろあの話を」

結城父「そうだなそろそろ決めないとな。外で待っている二人と話すといいそのあとにこちらで話をしよう」

須郷「はい、社長」

ガラガラガラ

と結城章三が病室から出ていくと須郷が口を開いた。

須郷「君たちはこの三人と一緒に暮らしていたようじゃないか」

和人「え、ええ」

須郷「今の話だが、僕がこの三人と結婚をしよう話なのだよ」

和人「!?」!!

界斗「貴様」

須郷「知つて・いる・だろ? 今の現実世界では重婚が可能だと言うことを」

和人「昏睡状態を利用するつもりか!!」

須郷「アスナは一方的にこちらを嫌つていてねえ」

こちらを見たまま話を続けた。

須郷「君達も知つて・いる・だろ? S A O のサーバーを今管理しているのは僕の部署だ。」

つまり今、明日奈さんの命を握つているのはこの僕という事になる。ならば、少しくらいの見返りがあつても構わないだろう?」

和人の顔から色が無くなつていく、ん? アルビノかな? 和人に限つてないか。

こんな状況でもものんきな界斗であつた。

界斗「さつきから色々話してますけど、俺達が章三さんに告げ口したらどうするんですか?」

須郷「私は社長から絶大な信頼を得ているからね、どちらの言葉を信じるかは明白さ」
須郷にこう言われて和人は絶望したような顔をしていたが対して界斗は余裕そうな

顔をしていたため須郷は上機嫌から不機嫌になった。

須郷「……何で余裕そんな顔をしているんだ？」

界斗「……余裕？ 余裕そんな顔だと？ そんな顔じゃなくて余裕なんだよ！」

須郷「ふ、ふん!! 切り札はこっちにあるんだ!!」

そう須郷は言い捨てて病室を出ていった。

和人「? 界斗どういうことだ？」

界斗「……まあ待て落ち着け少し待てば分かる」

和人「……」

和人と界斗はしばらく愛した者を眺めていると須郷が怒鳴り込んできた。

須郷「貴様らああああ!!! なああにをしたああああ!!」

界斗「さあな? なんのことがわからないな」

須郷「惚けるなあああ!! 何をしたら社長があんなことを言う!! 彼女らの意見を聞くためにしばらく結婚の話を延期するなどありえぬものかああああ!!」

よし掛かった。これでしばらくは安心できるが。

須郷「覚悟しておけガキどもめが後悔することになるぞ!!」

和人「……!!」

須郷は言葉を言い捨てて病室を再び出ていった。

和人「界斗!! お前 ツ!!」

界斗「ふう 良かった」

界斗は安心したあとにすぐに雰囲気が変わった。和人を真っ直ぐにみて言う。

界斗「安心するにはまだ早い」

和人「ツ!! わかった」

すると奴と入れ替わるように扉からノックが聞こえてきた。その時ドアがノックされた。訪ねて来たのは菊岡だった。

菊岡「界斗君、アスナ君と木綿季君と悠那君と他のプレイヤーの接続先がわかった」

界斗「遅かったな」

和人「界斗!! これはどういうことだ!!」

菊岡「界斗君に任せてね やつとまともな仕事ができた気がするよ S A O 事件ではほとんどいや全然役に立たなかったからね」

界斗「で? 何処にいるんだ?」

菊岡「場所は

アルブヘイムオンラインという場所だ」

菊岡から場所を聞いた。ナーブギアに繋がれ寝たままと言うことは何処かのゲームに
いるかもしれないと言う可能性があるかもしれないと思っていたが、『アルブヘイ
ム』・レクトのところが管理してらしいが
界斗「これがALOか」

と
その手にもつはゲームのケースその表紙です書かれている名前が『アルブ Heim』

・和人に連絡してみるか

プルプルプル

界斗「和人か？」

和人『界斗？どうしたんだ？』

界斗「いや？いつログインするんだろうと思つて」

和人『今からだか？』

界斗「種族どうするんだ？」

和人『俺？俺はスプリガンだ』

界斗「やつぱり？あれか？」

和人『ああ黒いからだ』

界斗「そうかそうかブラッキーさん 俺は色的にウンディーネ」

和人『まあ 会えたら会おう』

界斗「ふっ そうだな 会えたらな」

和人『ゲーム内でお前が男だ知ったらショックだろうな』

界斗「 斬るよ？」

和人『悪かったけど怖えよ!!』

界斗「じゃあゲームで」

和人『わかった』

p i

・ ・

リンクスタート!!

プレイヤー名カイト

種族ウンディーネなどにして

細かい設定をカットしていま現在

落ちています。

えっ?!なにこれ?!どういうことだ?!設定終わったら黒い穴が空いて今現在こんな状況です。

いや、訳がわからないよ

あっ!!地面がm

ズドーーーーーン!!

痛くもないなんてないからHPくあぶねー!!

痛みは無いのに今までの癖でくるくる回って数分。

カ「ん? 洞窟?」

洞窟。目の前に洞窟がある。

カ「中に入って見るか」

—————

洞窟内はキレイで整っていた。中は薄暗く肌寒い感じがする。

カ「えーと?なにここ?あれ?」

しばらく歩いたら石碑があった。

カ「石碑・か？」

『この洞窟には二本の剣が封印されている。』

一つ剣は魔王が使っていたと言われている。はずの剣。

もう一つの剣は魔王を打ち倒した聖剣。だと思ふもの。』

カ「石碑曖昧過ぎるだろ!!」

思わず叫んでしまった。しかし俺は悪くない。こんなことをかかれて声!! 叫ばずに
いられない!!

『この二本の剣を抜けたものはほかの妖精には無い力が授けられるだろう。他にはなん
ちやて宝具が使えたり使えなかったり』

カ「いやどっちなんだよ!!」

『でも使うと口調変わるだよねえ』

カ「軽い!! 石碑を書いた奴軽い!! つて書いたのは運営か!! 運営なのか—————!!
最後は？」

『結論：強い』

カ「それだけかい!!」

バツカアンツ!!

石碑を蹴り壊した余波で後ろの壁が抉れた。

カ「ふー少しオーバークルだがスッキリした」

そして俺はその二本の剣の方へ向く。少し。いやものすごく驚いた。あの約二年
S A O で世話になった剣ににている!! 驚きながらも俺は近づき抜こうとするが

カ「抜けない・あつ」

思い出した石碑の最後らへんに詠唱みたいなのが

とても中二臭くて言いたくないが言うしかない!!

カ『——旧き聖剣と魔剣に封印されし、気高き精霊よ!!』

カイトは続ける

カ『——汝、我を主君と認め契約せよ!!』

愛している者のため

カ『——さすれば我は汝の鞘とならん!!』

救うために

カ『——我は三度、汝に命ずる!!』

助けるために

カ『——汝、我と契りを結び給え!!』

二つの剣を抜く

すると闇と光の閃光がはぜた。

えっはぜ

カ「ぐはっ!!」

どかーん!!

カイトはそこで意識を落とした。

—————

カ「知る・分けない天井だな」

言ってみたかったそれだけだ

すると頭上から声が聞こえた。

「あら？ やつと起きたのね？ カイトつたらお寝坊さんなのね？」

「仕方ないと思います。私達を抜いた衝撃をもろにくららってしまったのですから
れくらいわかってください闇精霊」

.....

そ

「だから膝枕をしてあげてるんじゃない」

目が覚めたら美少女が

「あら？美少女なんて嬉しいことをいつてくれるじゃない」

「早く離れてくださいこんどは私がします」

カ「いや、何をしているんだ？てか誰だ？」

「忘れちゃたのかしら？まあいいわ私はレスティア・アッシュドールよ」

カ「!?じゃあお前は!?」

「はい私達はあなたの剣ですカイト」

うえー—————!!

—————
レスティアとエストと改めて自己紹介したあと目的を伝えた。彼女らも協力してくれるらしい

カ「たしかこのゲーム飛べるんだよな？羽はどうするんだ？」

レスティア「そこは私に任せて」

エスト「私は飛べませんしそもそも羽がありません」

またまた数分かけて飛ぶことができた。周りをキョロキョロしたあとレスティアた

ちを見た

レスティア「私は剣なるわ剣精霊さんは？」

エ・スト「私も剣になりますあなたの剣ですし、飛べませんし」

結構気にしてるようだ。あまり話題に出さないようにしよう。

カ「行くか!!」

俺は二人に剣になってもらい両腰に着けた途端に急に懐かしさが込み上げてきた。

レスティア『どうしたの？急に涙浮かべて』

カ「いや懐かしくてな」

エ・スト『そ、そうですか。／／』

レスティア『剣精霊？なに照れてんの？』

エ・スト『うるさいです!!』

カ「剣の状態での会話はしないでくれ」

—————

ここらへんにプレイヤー反応があるはずなんだがこの気配は

「あてて、着地はつぼだな」

ふむ、しばらく見ているか

レスティア『いい趣味ね』

俺だからな

エスト『・闇精霊なんかなくなつとくしてしまいます』
まあまあ良いじゃないか

と剣たちに語りかけながらエストを抜く

「セイツ!!」

「ぐあああああああ」

そろそろでるか

カ「おん？」

「ちい貴様だけでも!!タヒね—————!!」

赤い人——もといサラマンダーの人が斬りかつかてきた。

その状況を見た二人は焦った。

カ「行くぜ!!試しのなんちやて宝具の力を!!」

そこでスプリガンの少年は気づいたウンディーネの手に握られている剣を!!

カ「なんちやて宝具発動!!《童女謳う華の帝政（ラウス・セント・クラウディウス）》

!!!
」

黄金の劇場?いらんご都合主義つてやつだ。

赤い人「ぐあああああああ」

ズガ—————!!

凄い剣から発せられた剣圧と共に火柱が上がった。さすがのこの状況にカイト以外
 啞然とした顔をしている

カ「なんて顔をしておる？余は楽しかったぞ？」

スプリガンの少年「ま、まさかお前は!？」

カ「うむ！余の名はカイトである!! ようやく会えたのー」

シルフの少女「な、何者よあなた!!」

カ「む？うむ！少女よ!! しかと聞き届けよ!! 余のカイトであるぞ!!」

シルフの少女「いや……そっぢやなくてねえ」

カ「それよりもじや……キリトでいいのかって戻った」

キ「やっぱりカイト!!」

シルフの少女「誰なのよ?! 知り合いなの?!」

カ「まあ知り合いだな」

キ「そうだな」

自己紹介しました。剣のことも教えました。エストたちはまだですw

—————

カ「なありーファ？近い町はない？」

リ「つまりあなたたちは世界樹をめざしているにね？」

カ「ああ」

キ「そこにはどういけばいい？」

リ「決めたわ!! 私が案内するわ!!」

キ「しかし」

カ「じゃあ旅する仲間を紹介しなければな」

リ&キ「えっ!!」

カ「来な・レスティア、エスト」

リ&キ「はあ!!」

レスティア「どうもはじめましてかしらね? カイトの剣のレスティアよ」

エスト「こんどは私です。エストですカイトの剣です」

とエスト言いながら膝に座った。「ここは私の特等席です」と言いながら、その可愛らしい行動に反射的に頭を撫でてしまったが、なんか顔がトロンとしている。満更でもないようだ。

レスティア「あら? あなただけはするいわ」

カ「へいへい」

キ「いやいや!! 誰なの!!」

リ「そ、そうよ!! その子たちはなによ!!」

カ「えっ? 何って俺の相棒?」

キ「お、お前なあ!! なに言ってるんだこいつ? みたいな顔されてこな!!」

レスティア「だって事実だもの」

エスト「カイトですから」

キ「ああそうだった」

カ「そういうことだ」

リ「えっ?! それで完結するの?!」

カ「まあ明日頼むぜ」

リ「え、ええわかったわ」

「キリトside」

キ「ユイ? まだ起きてるか?」

ユイ「何ですかパパ?」

キ「カイトの近くいた子たちだがなんなんだ?」

ユイ「あれは正直わかりません」

キ「わからない?」

・

ユイ「はいAIでありそうでないような感じがするんです」

キ「つまりどういうことだ？」

ユイ「彼女らにはいにいの剣であり私以上の性能があります」

キ「剣が意識を持つと言うのは？」

ユイ「そつちのほうがあり得ないです剣がデータが意識を持つと言うのが」

キ「まあカイトだしね」

ユイ「そうですねいにいからですからね」

キ「俺は寝るよ」

ユイ「はい一緒に寝ていいですか？」

キ「あ、ああいぞ」

ユイ「はい！ありがとうございます。パパ!!」

キ「お休みユイ」

ユイ「はいお休みです。パパ。」

この世界（ALO）はある噂が流れる

目が覚めたエストとレスティアと話し合いしたり剣のことを話したりしたな。

なんかエストの目がキラキラしていたのは可愛いと断言しよう!!んー絶剣技とかリアルじゃあ銃弾を弾いたぐらいだしなあつちちゃんと木刀だよ。

こつちもだめか。まあこのことはいつか話しをしよう。目が覚めたら

カ「知ってる天井だはそりや。」

『なにを言っているの?』

カ「はええよ。ハツキング出来んのかよてかするなよ。」

レスティア『かなり苦労したのよ? いままでにないくらい』

カ「そりやあ俺が作ったファイヤーフォールだからな。てかエストは? あいつなら来

そうだが?」

レスティア『なんてもん作ってんよ。あの子なら置いて来たわ。』

カ「飯作るか。」

レスティア『あら。ご飯食べるの? 私も食べたいわ』

カ「ボソツ（その願いはその内叶うよ）」

レスティア『?なんか言った?』

カ「いいや?なんでも」

レスティア『なんか気にくわないわ』

カ「ふふふ」

レスティア『!?』／／

カ「どうした?」

レスティア『な、なんでもないわ!!』

カ「そうか」

レスティア『（は、反則過ぎたわ。』

—————

翌日、剣で稽古もとい絶剣技の型の練習をしていた。

初（はつ）ノ型（紫電（しでん））から

破ノ型（烈華螺旋劍舞（れっからせんけんぶ））くらいまで

終（つい）ノ型（天絶閃衝（ラスト・ストライク））はカウンター技だからしないし、

この技結構負担がくるんだよね

おい、なんだそのお前が?カイトが?みたいな顔。俺でもキツイときはある

午後3時になると、ベッドに横になり、ALLOにログインした。

すると、ちょうどキリトとリーファもログインしたところだった。

カ「おん？来ていたのか？」

キ「ああ今さっきな」

リ「私もよ」

キリトたちはリーファと顔合わせしているようです。

よく見たらキリトは丸々初期装備である対して俺は両腰に《魔王殺しの聖剣》と《真実を貫く剣》があるくらいやだ。私の武器（相棒）強すぎ。

レスティア『私のほうが強いのか？』

エスト『私のほうが強いのです!!』

レスティア『ふふふ。この時に勝負をかけるべきかしら？』

エスト『同意見です。闇精霊。バラバラのひき肉にしてあげます。』

カ「こんな話題出しておいてなんだが怖いことを言わないでくれ!!」

キ「何言ってるんだ？」

※エストとレスティアたちの声は聞こえてません。現実には非情なり。時に牙を向か

れるのだ
カ「い、いやなんでm

ユイ「逆に考えるんです。ににだからいいですと」
カ「ちよ、ちよつと待った!!これは弁解させていただきたい!!」

誤解を解くのに十分もかからなかった

リ「そろそろ買い物しに行きたいけどいいかな？」

カ「ああ構わんよ」

リ「キリト君はお金あるの？」

キ「このユルドって書かれてやるのか？」

カ「ん。うわあ。これは」

キ「酷いな」

リ「何??お金足りない？」

キ「い、いや足りる」

リ「そう?じゃあ装備買いに行くわよ?」

「カイト s i d e & a」

カ「んー。お？おっおっおっ」

レスティア『なによ』

カ「ぐ、軍服がある」

エスト『な、何ゆえにですか？』

カ「知らんがちょうどいい!!」

レスティア『どういうこと？』

カ「今までの装備が巫服だったから今度からこの軍服にしようかって地味に性能いいなっ!!」

エスト『いいですね似合いますよカイト』

カ「えへへありがとう。ハッ!!」

レスティア『あらあらうふふ♡』

カ「さつさといくぞ!!」

エスト『ふああ!!そんなに激しくしないでください!!』

カ「誤解を招くようなころをいうなあ!!」涙目

—————

リ「あら？随分様になっていのね」

ユイ「にいに!! カッコいいです!!」

カ「あはは。ありがとう」

現在のカイトの装備は青みを帯びた軍服に軍服のズボン、それに合わせるかのようなコートを見事に着こなしている。過去の分と比べてみると可愛いのが有るにはあるが凛々しいとも言える格好である。さすがに服だけではいけない思ったが邪魔なだけなので買っていない。

ぶつちやけ秘密なのだが店主にスカートを進まれたのは内緒だ。

カ「キリトは。知ってた」

黒い。圧倒的に黒い。剣もなんかこう。デカイ。

リ「本当よ。」

キ「いいじゃないか黒」

キリトはアバターと同じぐらいの大きさの剣を選んでいた。

確かに重いだろうけど………俺は呆れとエストとレスティアが驚いてる中、リーファは笑っていた。

剣の先が地面に擦りそうになっていて、まるで剣士の真似事してる子供に見えた。その後、世界樹に向け出発する際、シルフ領のシンボルの風の塔へと向かっていた。

カ「どこへ行くんだあ？」

リ「あの塔よあれを使えば高度が稼げるの」
 キ「へー」

エスト『た、高いです』

レスティア『あら？何？怖いのか？』

エスト『こ、怖くないです』

地面に着いたら休憩ついでに撫でてあげるからさ！今は我慢してな？

エスト『マ、マスター』

そんなに怖いのか。高いところがレスティアはいいのか？

レスティア『私は大丈夫よよく飛んでたし』

カ「手汗ばんでるぞ？」

レスティア『えっ？！うそっ？！』

カ「嘘だが？」

レスティア『』

カ「えっ！？嘘！？」

レスティア『なさい』

カ「ひや、ひやい！！にや、にやんせしゆか！！」

レスティア『私も撫でなさいって言うの』

カ「ひよ、ひようかいいたしましいた。」

リ「さ、行こ。夜までには森を抜けておきたいからね」

リーファはキリトと俺のお背中を押し、塔の中へ入っていく。

塔の中はたくさんシルフ族でにぎわっていた。

キ「なあ、なんか俺、おもいつきし見られてない？てか、睨まれてない？」

カ「俺はともかくキリトはスプリガン仕方ないとおもうぜ？」

シルフ族の視線にビビり気味のキリトを励まし、近くの魔法力で動くエレベーターに向かう。

「リーファー！」

リ「あ、こんにちは、シグルド」

行き成りリーファに声を掛けてきた男性プレイヤーはリーファさんの知り合いらしく、リーファさんは挨拶する。

シ「パーティーから抜ける気なのか、リーファ」

リ「うん、まあね」

シ「残りのメンバーが迷惑するとは思わないのか？」

リ「パーティーに参加するのは都合の付くときだけで、抜けたくなったらいつでも抜けていい約束だったでしょ」

シ「だが、お前は俺のパーティーの一員として既に名が通ってる。そのお前が理由もなく抜けたら、こちらの顔に泥を塗られることになる」

自分勝手にも程がある。

約束しておきながら自分の都合が悪くなると、理屈を付けて誤魔化そうとする。

SAOでもこういう大人はいた。

前にユナとかユウキをパーティーにしようとして来たことがたまにあつた。

そういうやつデュエルで瞬殺してつてトラウマを植え付けたのだが、こいつにもするべきか？

レスティア『やめたげて、さすがに可愛そうだわ』

エスト『今回は気が会いますね、私もそう思います』

キ「仲間はアイテムじゃないぜ」

シ「なんだと？」

キリトが前に出て、シグルドの前に立つ。

カ「他のプレイヤーをあんたの大事な剣や鎧みたいに装備欄にロックしとくことはできないって言ったのさわからないのか？」

とシグルドをゴミを見るかのような目を浮かべている。

シグルド本人カイトが男であることを知らないのでプライドが傷付いたのであろう

シ「き、貴様！」

ほら食いついてきた

キリトと俺の目と言葉に、シグルドは腰の剣の柄に手をかける。

シ「屑漁りのスプリガン風情とウンディーネごときがつけあがるな！どうせ領地を追い出された《レネゲイド》だろうが！」

リ「失礼なこと言わないで！彼はあたしの新しいパートナーよ！」

シグルド（笑）の言葉にリーファは叫び替えしていた。

シ「なん……だと……リーファ、領地を捨てる気なのか……」

憎たらし目でリーファを見つめてあと

シ「……子虫が這いまわる程度なら捨て置こうと思つたが、泥棒の真似事とは調子に乗り過ぎたな。のこのこと他種族の領地に入ってくるからには斬られても文句は言わんだろうな」

キリトに剣を向け、芝居がかったセリフにキリトは肩をすくめる。

そんなキリトお態度にシグルドは今にも斬り掛かりそうだった。

そこで、俺はキリトの前に出た。

カ「キリトを斬るなら、最初に俺を斬って見ろよ無抵抗のプレイヤーを斬るのはどうなるか貴様でもわかるだろ」

シ「何？」

シグルドは意外そうに俺を見てくる。

カ「それとも、人を斬ることも出来ない軟弱プレイヤーだから斬るのが怖いのか？ええ？」

シ「なっ!?……………このアマ、ふざけたことおっ!!」

カ「人を斬るってことはその覚悟がある奴だけだ。そんな覚悟がねえ奴に斬る資格はないねえ!!」

これは建前。この言葉の裏には一様効果はあるし意味もある。

覚悟もいるが今の俺はウンディーネだ。

ウンディーネを斬るとデメリットが生じる可能性がある。シルフ以上の回復魔法が使えるウンディーネと仲が悪くなり強いモンスターに挑めなくなってしまうからだ。

相手もそれは避けなければならない。

これで、大人しく下がるはず……………

シ「せいぜい外では逃げ隠れることだな。……………リーファ、……………今俺を裏切れば、近いうちに必ず後悔することになるぞ」

リ「留まって後悔するよりはずつとマシだわ」

シ「戻りたくなかったときのために、泣いて土下座する練習をしておくんだな」

それだけ言うとしグルドとその仲間たちは去って行った。

リ「ごめん、変なことに巻き込まんじやって」

キ「いや……でも、いいのか？ 領地を捨てるなんて？」

カ「領地入りにくくない？ こんなことしといてだけど」

キリトと俺のお言葉にリーファさんは無言になり、そのままキリトの背中を押してエ
レベーターに向かう。

その様子を見て、俺も慌てて乗る。

塔の最上階に着くと、そこには、海原、草原、森、山脈が広がっていた。

カ「おお、すごい」

ユイ「それが近いです」

キ「手が届きそうだな」

俺、ユイ、キリトの順番で感想を言う。

相変わらずエストとレスティアは塔に登ってからずっとだんまりだ

リーファに追いつくとリーファは俺たちの方を振り向く。

リ「さ、急ごう！ 一回の飛行であの湖まで行くよ！」

笑顔でそう言った。

—————

暫く空を飛び、世界樹を目指していると《古森》エリアまで飛びユイとの会話をしながら飛行していると羽が疲れてきたので一旦休むことにした。

地面に降りるとキリトさんは体を伸ばしたり、肩を回したりした。

リ「疲れた？」

キ「いや、まだまだ」

リ「頑張るわね。でも、空の旅はここでおしまいよ」

ユイ「どうしてですか？」

リ「あれよ」

ユイちゃんの質問にリーファさんは聳える山を指差す。

リ「あの山の高さが飛行限界高度を超えてるのよ。だから、山越えにはあの山にある

洞窟を抜けないといけないのよ」

カ「洞窟って、なげえのか？」

リ「かなり。途中で中立の鉾山都市があつて休めるけど、三人はまだ今日は時間大丈

夫？」

カ「えっと、リアルだと今は夜の7時か。俺は平気」

キ「俺も問題ないぜ」

リ「じゃあ、もうちよつと頑張ろう。ここで、ローテアウトしよっか」

「ローテアウト？」

リ「ローテアウトってのは、交代でログアウト休憩することよ。中立地帯だから即落ち出来ないのよ」

「あ、だから、かわりばんこに落ちて、残った人が空っぽのアバターを守るんですね」

リ「そういうこと」

カ「俺らは後からで構わないからよ」

キ「そうだな、ゆっくりでいいぞ」

リ「じゃ、お言葉に甘えて。よろしくね」

そう言つてリーファはログアウトした。

それと入れ替わるようにエストとレスティアが出てきたと同時に頭を差し出しきた。何事かと思つていと塔の時のことを思い出した。

カ「~~~~♪」

エスト「~~~~♡」

レスティア「~~~~♡」

皆。これどう思う？天国だろう過去にもあつたこの感じ!!懐かしい!!別の意味でも懐かしい!!これh

グニイ

カ「にゃん!!」ビクツ

つねられた痛みの源を見てみると頬膨らませたエストが膝にsん?膝?なんで膝なんだ?気づいたら膝!いるなんて・なんでこんな俺の膝に頭乗せてるんだろう?そんなにいいのか?ユイやユウキはわかるけど・

エスト「今は私だけを見てください」上目遣い

レスティア「そうよ今は見てほしいわ」上目遣い

こ、これは!!レスティアはユナと同じ属性を秘めている!!お姉さんの雰囲気は漂うように振る舞いまるでお嬢様を思わせるほどの気品の印象を持たせるほどの!!ユナの場合と同じ部分はあるが違うところをあげるとすれば・いじり!!ユナはいじりがいる!!俺がわざとボケることわざとツツコミに走らせて遊ぶ!!

エストの場合も同じようユウキと同じ純粋な心をもつ天使!!

エストの場合癒しと共に天使と言う属性があるがエストがこんな状態になると保護欲を掻き立てるほどの威力を持っている!!お、恐ろしい!!撫でながらその状態を見てい
る俺が恐ろしい!!

リ「ト・かん・よ!!」

カ「はっ!!」

キ「どうしたんだブーツとしてて」

カ「いや桃源郷は近くにあったんだなって」

キ「は？」

リ「？」

カ「じゃあ俺もログアウトするわ」

キ「リーファ頼んだぞ」

リ「おーkよ」

—————

知らない天井つてもういいわ!!

カ「はあ」

レスティア『もうため息ばかりはダメよ?』

カ「だから侵入すんじやね!! 新しくしたのに!!」

レスティア『やつぱり!! なんかまた入りにくいと思ったら!!
.....
やつぱりカイトね』

カ「レスティア?」

レスティアに聞く自分の考えていることを

レスティア『何かしら?』

カ「これどう思う?」

俺はそう言いパソコンの画面の前に行き操作する。

カタカタカタ ウイーン

レスティア『ッ?! カイト?! これはいつたいたい?!』

カ「あいつらにプレゼントをな」

レスティア『あの子に?』

カ「ああ」

レスティア『喜ぶんじゃない? にしてもリアル過ぎない?』

カ「形の調整はいいからその分楽さ」

レスティア『そうでも?』

カ「ちゃんとやるぜ」

レスティア『よかったわてか早くしなさい皆待ってるわよ?』

カ「わー!! ま、まっすぐ行く!!」

—————

カ「待たせたな!!」

キ「待ってないから大丈夫だぞ」

カ「カハッ?!」

リ「えーっ?!」

ログイン直後に起きたログイン（笑）であった。
どうでもいいか

—————

リ「よし、じゃあ、行こうか！」

リーファが翅を広げ、飛ぶ体勢に入る。

俺も飛ばうと翅を広げる。

が俺は不愉快な視線を感じとりキリトも気づいたようで腑に落ちないといった表情で後ろを振り向いた。

ユイ「どうしました？」

キ「いや、誰かに見られてる気が……ユイ、近くにプレイヤーの反応は？」

ユイ「いいえ、ありません」

カ「ユイの言葉は正しいと思う。生気が感じれない」

リ「ひよつとしたら、トレーサーが付いてるのかも」

キ「トレーサー？」

リ「追跡魔法よ。大概ちっちゃい使い魔で術者に対象の位置を教えるの」

キ「解除は出来ないのか？」

カ「見付けられたら可能だが、術者の魔法スキルによつては対象との間に摂れる距離

も増えるから、この森だと見つけるのは無理かもな。でも、気のせいってこともあるかもしれないから、気にしなくてもいいだろ」

キ「そうだな、取りあえず先を急ごう」

リ「うん」

頷き合い、空を飛び、洞窟の所まで向かった。

—————

洞窟、ルグルー回廊に着くと、中はとても暗くよく見えなかった。

リーファが言うには洞窟はスプリガンの得意分野だと言って、キリトに灯りの呪文を頼んだ。

キリトはユイちゃんが教えてくれるスペルをたどどしく言い、魔法を使う。

ほの白い光の波動が広がり、俺たちの体を筒む。

すると、視界が急に明るくなった。

リ「暗視能力付加魔法か。スプリガンの魔法も捨てたもんじゃないわね」

キ「うわ、その言い方、なんか傷付く」

リ「でも、使える魔法は暗記しといた方がいいわよ。スプリガンのしょぼい魔法でも、それが生死を分ける状況だってひよつとするとないとも限らないし」

キ「うわ、更に傷つく……………」

カ「ドンマイだ、キリト」

ユイ「ドンマイです、パパ」

キ「お前らの優しさが余計に俺を傷つける」

カ「俺も覚ええないとな、いやいや精霊魔術だけでいいか」

リ「すごいわよねその剣のスキル」

カ「うむ!! 回復たのんだぞ?」

リ「はいはい」

キ「うへえ……俺もクラインと同じピュアファイターでいいよ」

リ「泣き言わない! って、メッセージだ。ごめん、ちよつと待って」

一端立ち止まり、リーファさんはメッセージを開く。

リ「……なんだこりや?」

疑問の声を上げた。

リ「エズ……さ……し……う……う……う……う……」

カ「ん・ツ!!」ピキーン!!

突然俺が振り向いたことで二人は驚き俺に聞いてきた。

カ「・衆たか」

キ「何が?」

カ「走れ！すごい数だ!!」

リ「なんですつて!!」

キ「モンスターか？」

ユイ「パパ、違います。プレイヤーです。十二人います」

リ「じゆうに!?!?.....嫌な予感がするわ。隠れてやり過ごそう」

カ「でもどこに？」

リ「そこはお任せを」

そう言うとりーファは俺たちを連れて壁の窪みに入る。

そして、魔法を使い、俺たちの目の前に薄いベールみたいなのを張った。

リ「喋るときは最低のボリユームで。魔法が解けちゃうから」

りーファの指示にあたしたたちは頷く。叫びたくなるだろう?そんなことを言われたら

ユイ「もうすぐ視界に入ります」

ユイちゃんの言葉に固唾をのんで待つ。

キ「あれ、何かな？」

リ「え?まだ何も見えてないけど?」

キ「プレイヤーじゃない、赤くて小っちゃい蝙蝠みたいな……」

よく見ると、キリトの言う通り、小っちゃい蝙蝠みたいなのが飛んでいた。すると、リーファさんは行き成り通路に飛び出した。

キ「お、おい、どういした？」

リ「あれは高位魔法のトレーシング・サーチャーよ！潰さないと！」

魔法を使い、リーファは蝙蝠を倒す。

リ「走るよ！」

キ「また隠れるのは駄目なのか？」

カ「無駄だ!!潰されたのに気づいて急接近してくるぞ!!」

リ「トレーサーを潰したのはもう向うにもバレてる。それに、あれは火属性の使い魔

てことは」

ユイ「サラマンダーですわね！」

キ「こんな所まで追ってくるのかよ！」

わき目もふらず必死に走り、とうとう、湖に囲まれた中立の鉾山都市へ繋がる橋を渡る。

キ「どうやら逃げ切れそうだな」

リ「油断して落こっちゃないでよ」

その時、後ろから飛んでこいた光線が都市の城門の前に落ち、巨大な壁を生み出した。

それを見たキリト武器を抜き、斬り掛かる。

「ただ、攻撃は軽々と弾かれる。」

「ムダよ。これは土魔法の障壁だから物理攻撃じゃ破れないわ」

キ「もつと早く言ってくれよ……」

ユイ「壊せないんですか？」

カ「エストなら行けそうかもしれないけど全滅させた方がいいなこれは……」

すでに後ろからガチャガチャと金属音が鳴っている。

キ「湖に飛び込むのはありか？」

リ「無理よ。ここには超高レベルの水竜型モンスターがいるの。ウンディーネの援護

なしに飛び込めば自殺行為よ」

リーファに言われた瞬間俺を見たが苦手と言っていたのを思い出してやめた。

キ「なら、戦うしかないな」

リ「ええ、でも、これだけ高レベルの土魔法をサラマンダーが使えるってことは、よっ

ぽど手練れのメイジが混ざってるわ」

全員武器を構えると、とうとうサラマンダーの姿が見えた。

最初の三人が分厚い鎧やタワーシールドで固めた重戦士、残りは全員ローブを着たメ

イジだ。

――――
残るはこのメイジ一人だ。

リーファは剣を抜き、切っ先を向ける。

リ「さあ、誰の命令とかあれこれ吐いてもらおうよ!!」

「い、殺すなら殺しやがれ!」

「い」の……」

キ「いや、危なかったな」

ピリピリした空気をキリトが壊した。

キ「よう、ナイスファイト! 良い作戦だったな。彼らの援護がなかったらやられてた

ぜ」

「は?」

リ「ちよ、ちよつと、キリト君?」

キ「まあ、見てな。それで、ものは相談なんだけど、これ、今の戦闘で俺がゲットしたアイテムとユルドなんだけど、俺たちの質問に答えてくれたらコレ全部上げようかな
ゝなんて」

「え?」

キ「あ、彼らとも話済みなんだけど、彼らも質問に答えたら彼らがゲットしたアイテ

ムとユルドもくれるってさ。無論そのウンディーネも」

「……………まじっ？」

キ「まじまじ」

カ「はあ。やれやれだぜ。」

そこで、メイジのサラマンダーとキリトさんはにやつと笑った。あと俺が男と聞いた時の驚いてたから一発殴っておいた。

こうして俺はサラマンダーである意味有名になった。

ある一人のサラマンダーが言う。

「カイトと言うプレイヤーに常識を求めない方がいいぞ」や

「カイトと言うプレイヤーがなんかすごいことをしたときカイトだからねと納得したほうが楽だよ」

などなどの話流れた。

魔劍グラムもチートだけどこっちの聖劍と魔劍も相当
じゃね？

「戦闘終了後」

キ「いやー満足満足!!」

カ「満足しねえよ」

リ「男って」

カ「リーファ？一つだけいっておくこの筋肉バカと一緒にしないでくれ」

キ「ひどくないか?!それってカイトもじゃないか?!」

カ「バカ言うなエストとレスティアは《形態変化へモードチェンジ》出来るからレイ
ピアにも出来るぞ」

リ「本当に何なのよその武器は」

カイトたちがそんな雑談をしているとエストたちが剣から人に変化した。

レスティア「《形態変化へモードチェンジ》で武器変化？出来るわよ？ね？劍精靈さん？」

エスト「ええ出来ますこの私だけを出出来ないことはありません。ですので頭を撫でてくださいカイト」

リ「なんでもありね」

ユイ「にいにですから」

キ「お腹空いたな」

カ「なんだ急に」

キ「いや？あのサラマンダーたちを見てたら焼肉がたべたくなくなってしまったな」

リ「いや意味がわからないわ」

するとキ・リトは思い付いたような顔をしてリーファを見つめる

リ「な、なによ」

キ「では手を拝借」

ガブツ

リ「にやあああああああああ!!」

バチツーン・バチツーン!!

キ「痛てて」

カ「本当バカだろ」

エスト「失礼です」

レスティア「不潔ね」

ユイ「パパが悪いです!!」

キ「うろうう」

カ「そういえばリーファお前メールかなんか来てたよな? 連絡とつたら?」

リ「あ、そういえば」

レスティア「あら? 忘れてたのかしら?」

リ「う、うるさいわね! すぐ行くわ!! ユイちゃん!! エストちゃん!! レスティアさん!!

私の身体お願いね!!」

ユイ「はい?」

リ「キリト君が私の身体に変な事をしないように監視しておいてね」

キ「なんで俺だけなんだ?! カイトどうなんだ?!」

カ「だって俺・死にたくないもん」

キ「あつ」

リ「とにかくお願いね!!」

ユイ「はい!!」

リーファがログアウトをしてからすこし

エストが袖をつかんでグイグイしてきた

カ「ん？どうしたエスト？」

エスト「カイト、お腹空きました」

レスティア「まだそんなにたつてないわよ、でも小腹が空いたから賛成ね」

キ「あつ俺も俺も!!」

カ「たしかに食い物があるにはあるが」

「キリトside」

カイトの相棒の剣であり今回の旅仲間であるものからの提案でカイトから食べ物を
くれることに

食べれる時間はリーファが帰って来るまで

カ「ほれエスト、レスティアもついでにキリトも」

「なんか混じっていた気もするが今は関係ない!!」

カイトから受け取ったそれは
シンプルだが形にいいデザイン性がある。それは
サンドイツチ!!

キ「おおつ」

エスト「オトフは？」

レスト「ア、あるわけないでしょ」

エスト「むう」

エストが頬膨らませ不満そうな顔をした

あつこつち見た。しかたないな

カ「わかったわかった。この事が落ち着いたら皆でパーティーでもなんでもしよう

な」ナデナデ

エスト「はい」

とりあえず俺はカイトからもらったサンドイツチを食べてみた。具材もそんなに高くはないがそこを何とかするのがカイトなのゆえである。ハムっぽいなかとレタスに塩コショウ?をかけられていて俺好みである。

キ「ごちそうさま」

カ「早すぎんだろ」
うまかった

「キリト side out」

「カイト side」

エスト「ふわ」

とエストがかわいいあくびをしたあと発光して劍である《魔王殺しの聖劍》に戻った。

レスティアもエストが戻ったのを見て《真実を貫く劍》に戻った。すると丁度に

リーファが戻って急に立ち上がった。

リ「ごめん。あたし、急いで行かなきゃいけない用事が出来ちゃった。説明している

時間もなさそうなの。多分：：ここにも帰ってこれない：：」

キ「移動しながらでいいから教えてくれないか」

カ「どっちにしろ、ここを出ないといけないからな」

俺たちも行く準備をする。

リ「わかった：：」

俺たちは走る。

リーファの話によると、シグルドがサラマンダーと内通していて、それに気が付いた

レコンが捕まったらしい。そして40分後に始まる《シルフとケットシーの領主会談》をサラマンダーの大部隊が襲撃するということが判明した。

キ「まさか、シグルドがサラマンダーと内通していたとは…。それでサラマンダーたちがそんなこととして何か得することでもあるのか？」

キリトが尋ねる。

リ「下手したらシルフとケットシーで戦争になるかもしれない。それと、領主を打つと領主館に蓄積されている資金の3割を入手できる。そして、10日間街を占領して、自由に税金をかけられる」

キ「そんなことができるのか…」

カ「とんでもない種族だ、サラマンダーは…」

エスト『やっぱあの赤いのはキライです』

レスティア『なんであんなのが好きなのかしら？』

リ「これはシルフ族の問題だから、ウンディーネやスプリガンの君たちが付き合ってくれる理由はないよ。多分、会談上に行ったら生きて帰れないから…。また、スイルベーンから出直しだろうしね。ううん、もつと言えば…世界樹の上に行きたいというなら、君たちはサラマンダーに協力するのが最善かもしれない。サラマンダーがこの作戦に成功すれば、万全の体勢で世界樹攻略に挑むと思う。ウンディーネとスプリガンの

君たちなら傭兵として雇ってくれるかも…。だから…ここで私を斬っても文句は言わないわ…」

カ「いいや!! 関係ない訳がない!!」

キ「カイトの言うとおりにさここまで案内してもらったんだ恩返し位しないと気が済まないよ」

リ「カイト君・キリト君・ありがとう!!」

リーファは涙をこぼしながらも嬉しそうにお礼を言う。

キ「おっと、時間がなかったな。ユイ走るからナビゲーシヨンよろしく」

ユイ「了解です」

カ「さて・行くか」

キ「おう」ガシツ

リ「えっ?! 何?! 何をするの?!」

キ「何って」

カ「そりゃ」

「走り抜ける!!」

リ「ひゃあああああああああ!!」

キリトがリーファの腕をつかみ走り出した。

ユイ「はい!!この先に大量のプレイヤー反応があります!!」

カ「行こう!!」

俺たちは思考を切り替えて会談をする場所を視線を向けて飛行をする。するものすごいサラマンダーの数が飛んでおりそこにサラマンダーの先にケットシーとシルフがたたずんでいた。

キ「双方剣を引け!!」

カ「」

二人のプレイヤーが三種族の前に立った。さすがに驚き動けない。ただただ二人ごときにリーファ以外が動けなかった。カイトとキリトから凄まじいプレッシャーが放たれていた。一番にすごいのはカイトというプレイヤーからであった。

しばらくするとシルフの一人がリーファに話しかけた。

「リ、リーファ!!これは一体!!」

リ「一つ言えることは彼らに任せられないってこと」

「」

「貴様何のつもりだ?」

キ「スプリガンとウンディーネの同盟してさらにシルフとケットシーとの同盟に来た

!!!」

「なんだと?」

その男は驚きながらも眉一つ動かさなかった。

カ「俺たちはその大使としてきた」

「そうか。俺の邪魔をするか。貴様らウンディーネとスプリガンの小僧
俺の名は、ユージーンだ」

.....名前を聞こう。

カ「カイトだ」

キ「キリトだ」

ユージーン「貴様らが大使と言うなら三十秒で戦い証明してみせろ」

カ「キリト行くか?」

キ「いいのか?」

カ「あいつには負けないからなやってみたいんだろ?」

キ「」

カ「あつこらそつぽ向くな」

「ちよ、ちよつと待った!!」

カ「あんたは?」

「済まない私はサクヤという」

キ「で?どうしたんだ?」

サ「あの将軍がもつ魔劍は魔劍グラムというエクストラスキルで武器抜けして攻撃をしてくる」

キ「お前劍なら防げんじゃね」

カ「ああ余裕だな」

サ「な、ならば君はが」

カ「だが断る」

サ「な、なんで!!」

キ「俺が戦いたいからと言うか大使としてするべきことをしたいからさ」

カ「ま、そういうことだ」

サ「そうか済まない」

ユージーン「作戦会議はすんだか？誰が俺と戦う？」

キ「俺が行こう」

ユージーン「ふんならば青い貴様は部下と集団戦してもう」

カ「ん？おう余裕余裕」

赤部下「このツ!! ウンディーネごときがなめたことを!!」

カ「かかって来い!! そのなめた態度叩き直してやる!!」

赤部下「こんな女プレイヤーにまけr」

ズパットン!!

サ「なっ!!」

リ「えっ!!」

ユー・ジーン「ッ!!」

キ「おっさすが」

ユー・ジーン将軍が連れてきた部下が一瞬にして切り裂かれ一つの赤いフラグメントが残された。

カ「運が良かったなユー・ジーン。さっきの野郎と同じ事を言っていたら勝負をするこ
となく・な。こんななりだが俺は男だ。さあ、続けよう」

キリト以外から息を飲むのがわかった。サクヤたちはカイトが男というのに驚いた
がそれよりも驚いたのはそのスピード。まともにカイトの姿が認識出来ないままユー
・ジーン将軍の部下が斬られた。

ユー・ジーン「いいだろうスプリガンを倒したらこの俺と戦ってもらおうぞ」
カ「出来るものなら」

俺は両手に《魔王殺しの聖剣》と《真実を貫く剣》をユー・ジーン将軍の部下の前に構
え立った。

カ「行くぞ!!キリト!!」

キ「おう!!」

ユージン将軍 vs キリト
ユージン将軍の部下 (25くらい) vs カイト

大出血サービス（血はでない）でフラグメント収獲祭

はい!! カイちゃんです!! ふさしぶりですな!!

今俺はいつぱいのサラマンダーと戦闘中です!! 暴れるぜ? どんどん暴れるぜ?

カ「どうした? 動かないのか?」

サラマンダー「く、くそっ」

一人の男がそう吐き捨てた。誰も動けなかった。否、動けないのである素人でもわかるほどの隙の無さに

後ろにいたサラマンダーが攻撃を仕掛けようとした

サラマンダー「シネエエエエエ!!」

カ「フツ!!」

背中に攻撃を当てようとするがカイトは空中にバックスピンをして避けてカイトが

攻撃を仕掛ける

カ「――闇よすべてを切り裂け《闇魔千刃（ブレイド・ストーム）》!!」

サラマンダー「ぼ、防御しろお!!」

カ「無駄だ」

サラマンダーがカイトからの攻撃である精霊魔術《闇魔千刃（ブレイド・ストーム）》を盾で防御しようとするが

ガキツン!!

サラマンダー「よ、よs」

ズパン!!

盾が断ち切られ一人がフラグメント化した

カ「だから無駄だといったんだ無駄だと」

そのことでサラマンダーは混乱した。

サラマンダー「くそっ!!くそっ!!たかが一人にい!!困めえ!!困むんだあ!!」

カイトの周りをサラマンダーの数名が囲み始めた。なんか世紀末を感じさせる物量なのだ。

するとサラマンダーが声を上げた。

サラマンダー「か、掛かれ!!掛かれ!!」

うおおおおお!!

と叫びながら数名が斬りかかってきた

カ「絶剣技《三ノ型〈影月円舞（えんげつえんぶ）》!!!」

範囲技である《三ノ型〈影月円舞（えんげつえんぶ）》を發動して斬りかかってきたサラマンダー数名を葬り去った。

カ「ハハハハハハハハハハ!!サラマンダー狩りじゃあ!!死にたい奴も死にたくない奴も掛かってこい!!ハハハハハハハハ!!拒否権は無いからなあ!!」

サラマンダーは恐怖感を感じた。ユージーン將軍とは違う恐怖感。ここまでの強さを持った剣士に殺されるなら名譽だ。なんてそんなことを思うサラマンダーはいない。いるわけがない。だからサラマンダー全員で斬りかかって倒すことにしたこうすればたおせると思っていたが

カ「全員で斬りかかってくるのか。それもまた邪道な戦術だが有利な戦法であるな。だが!!この俺に倒してその戦法は無駄なんだよ!!全員が前方からではなく周りからであればまだ勝機はあったもな」

サラマンダー「な、なんだと!!」

カ「では。——散れ」

サラマンダー「う、うわああああああ!!」

カ「絶剣技破ノ型（烈華螺旋剣舞（れっからせんけんぶ））
!!!!」

「観客席：リーフア side」

あたしは驚きを隠せないでいた。この事にもサクヤたちも同様のようだ。

サクヤ「な、なんだあの強さは!?! キリトとか言う奴もユーゾーン將軍と戦えているこ
ともそうだがカイトはなんだ?!」

と混乱しながらリーフアに聞いてきた

リ「私にもわからないキリト君とは知り合いだとしか」

サクヤ「そ、そうか」

アリシャ「本当に人間かにや？」

サクヤ「だといいな」

「カイト side」

サラマンダー「うわあああああああ!!」

カ「くらえっ!!」

自棄がまわったのか全員で斬りかかってきた

カ「絶剣技 《二ノ型〈流星（りゅうせい）》》!!!

俺は全力で聖剣と魔剣を上に掲げて力を込め一気に振り下ろされ

ドコーーーン!!

威力が余って二本の剣が地面に叩きつけられクレーターを作り出した。

カ「あつ? 終わった」

レスティア『強すぎよ』

エスト『さすがカイトです!!』

カ「ああありがとう」

リ「カイト君!!」

カ「リーファか」

リ「大丈夫なの!!」

カ「あんな連中に負けるか?」

リ「そ、そう大丈夫ならいいの」

カ「だいぶ感化されてきたな」

リ「余計なお世話だよ!!」

カ「キリトは?」

リ「も、もう!! キリト君も勝ったよ」

サラマンダー主催のフラグメント収穫祭が終わってスッキリしたぜ。

キ「誰か蘇生を頼む」

サクヤ「私がしよう」

—————

サクヤによつてサラマンダーの將軍であるユージーン將軍が蘇生された

ユージーン「この世界にこのような剣士がいようとは」

ユージーンは感嘆いたかのような声と言葉をもらした

ユージーン「もう一度名を聞いていいか？」

キ「キリトだ」

カ「カイトだ」

ユージーン「此度の戦い楽しかったぞ」

俺たちの顔を何回も見たと立ち上がった

ユージーン「ではおれは帰るとしよう」

サクヤ「さて部下はどうする？」

ユージーン「置いて行く」

アリシャ「無慈悲だにや」

そんなことを言っていたらユージーン將軍は自分の領に多分戻っていった。

サクヤ「ところでキリトうちのところに来ないか？」

アリシヤ「あつ!! サクヤちゃんひどいにや私のところに来たら毎日三食宿つき提供するにや」

サクヤとアリシヤがキリトにくつついて勧誘し始めた。

まあ俺は

レストイア『断るわよね?』

当たり前だ誰のものにはつかん

エスト『じゃないとオートフが食べれなくなってしまう』

レストイア『あなたってそれしかないわよね』

だからいいんだ

エスト『なんか嬉しくありません』

エストとレストイアと話をしていると周りが少し暗くなったどうやらシグルドと話をするらしいなんかあいつがやったことらしくサクヤは領主らしくそいつを追い出したそうだ。キリトたちが目的である世界樹びくことを言っただけらしい。

したらサクヤたちもいくらしく準備をしているそうだ金が足りないようなのでキリトが

キ「これを資金の足しにしてくれ」

サクヤ「こ、これは!!」

アリシヤ「いいのかにや!!これで!!」

サクヤ「ああ!!すこしで目標まであとすこしだ」

カ「ならばこれでどうだ？」

リ「カイト君!!」

サクヤ「アリシヤ!!」

アリシヤ「うん!!急いでレプラコーンにやってもらおう!!」

カ「ああ待ってるぜ」

キ「カイト行こう」

サクヤ「準備が済み次第世界樹にむかい加勢しよう」

これで世界樹に戦力が増えたな
待っててくれユナ、ユウキ必ず救いにいく!! 絶対に!!

ぶつちやけクラゲも巨人もどうでもいいが同行者がねえ

■ ■ ■ ■

やあみんな!! 久し振りなきがするな!!
カイトだよ!! いま俺たちは

「ヨツン Heim」にいます!!
いやなんや!!

カ「どうする？」

キ「あんなに動いたから腹減ったなあ」

リ「君能天気すぎよ」

俺たちはユー・ジーン將軍とその部下と戦闘をしキリトは堂々とやり俺はユー・ジーン將軍の部下と戦いと言う名の蹂躪を行い勝利を納めることができた。そのあとはサクヤとアーシヤたちと交渉を行い世界樹攻略に貢献してもらおうこととした。

ユイ「パパ!!この先に大きいモンスターの反応があります!!」

リ「そんな!!ここには邪神級のモンスターが居るのに!!」

キ「そんなに強いのか？」

リ「ええあのユー・ジーン將軍でさえほぼ一瞬でやられたらしいわ!!」

キ「そんなに強いのか？」

キリトはその邪神級のモンスターに感心しつつ俺を見てきた。

カ「なんでそこで俺を見る？」

キ「いやお前なら行けそうだと思うって」

カ「まあ行けるだろう」

リ「行けるの!!」

カ「あの感じじゃHP多そうだから手数で攻めればいいと何より俺には頼もしい相棒がいるからな」

レスティア『あたりまえでしょ私はあなたの相棒ですから』

エスト『いいえカイトは私の相棒です!!』

レスティア『あらたかが劍精霊のあなたが何か?』

エスト『いいえ所詮闇精霊のあなたより私の方がいいのですから』

カ「こらケンカをしない」

なんか急にケンカを始めたので宥めた。何故に一番を取り合う必要があるのかわからない。そうレスティアとエストに聞こえないようにしながら頭を撫でるような感じで劍の柄を撫でた。みんな平等なんだけどな.....

ユイ「問題はそこではないんです!!」

リ「どうということ?」

ユイ「その二体のモンスターがモンスター同士で戦ってます!!」

キ「なんでそうなるんだ?」

ユイ「きつとにいとという理不尽が呼んでしまった出来事なのでしょう」

キ「納得」

カ「そつちのほうが理不尽だあ!!」

リ「け・け・よう」

カ「は？なんて？」

リ「助けよう!!可愛そうだよ!!」

カ「ならどうやって助ける？どっちを助けるつもりだ？作戦でも考えてあるのか？」

リ「そ、それは」

キ「おいおいあんまりリーファをいじめらんじやない」

キリトが苦笑しつつ俺に言ってきたのでおとなしく下がることとする。

キ「ユイこの先に湖かなんかないか？なんでもいい」

ユイ「ツ!!了解しました!!少々待っててください!!」

ます!!!

リ「ちよ、ちよっと!!何をするつもり!？」

キ「カイト・頼めるか？」

カ「はっ・誰にもを言っている？」

キリトが俺に行けるかどうか聞いてきたので余裕の微笑みと一緒に《魔王殺しの聖

剣》と《真実を貫く剣》を抜き放つ戦闘準備をしてキリトに聞く

カ「で？どうすればいい？」

キ「タゲと体力減少でできればメインにタゲ取りを頼む」

カ「了解つと」

リ「キリト君!!説明してよ!!」

キ「まあまあとにかく俺に着いてこい」

リ「カイト君はどうするのよ!!」

キ「とにかく着いてこればいいんだよ」

カ「キリト?」

俺はいいことを思い付いてキリトにいいです。

レスティアとエストはほぼ心が読めるというよりは頭の中で会話しなれているのでそこを使つて読みとつたようだ

レスティア『カイト・あなたずいぶん無茶を』

エスト『それがカイトです』

レスティア『それもそうなのだけれども』

カ『そういうことだ』

レスティア『全くあのデカブツごときに負けちやダメよ?』

カ『負けるか俺を誰だと思つてる?』

『理不尽の化身』

カ『えっ?!なにそれ?!化身はないだろ?!』

エスト『自分が理不尽に何かであることは認めるんですか？』

カ『ああ』

レスティア『』

カ『では行こう』

『私達はあなたの剣あなたの思うがままに』

キ『——なんだ？』

カ『——別に』

余裕そうな顔をキリトとリーファに見せて言う。

簡単さあんなデカイのを倒すくらいなら

カ『——倒してしまつて構わんだろう？』

キ「ああ構わんさてか何気にフラグだよな」

リ「ちよつと大丈夫なの!!」

カ「この俺にフラグなんて無駄無駄無駄無駄ツア!!」

キ「はよいけよ」

—————

カ「さていくか」

レスティア『どのくらいでいくの?』

カ「本気行くさ」

エスト『伊達に邪神級ではないと?』

カ「慢心ダメ絶対」

レスティア『アツハイ』

カ「行くぜオラ—————!!こつちを見る—————!!」

巨人「■■■■■■■■■■———!!!」

カ「エレメントハートアタック!!」

どこかしらの殺人鬼の必殺技を変えて《精霊魔術へ死を呼ぶ雷閃(ヴォーパル・ブラスト)》を巨人型邪神に放つと巨人の頭に直撃しHPが1割ほど減少した

が余波で吹っ飛んだ。

この事であつてかあつという間に巨人のHPが消しとんで倒してしまつて

カ「あつ」

レスティア『倒したわね』

エスト『倒しちゃいましたね』

カ「倒しちゃたな」

・キリトたちの方に戻ろう

レスティア『なんか言われそうね』

カ「慣れてる」

エスト『ええー』

.....

キ「カイトお前」

カ「わかつてる」

リ「」

.....

カ「やっちゃたぜ？」

リ「何がやっちゃたぜ？だあ!!」ガスッ

カ「南”無”三”!?”

リ「どーすんのお!!せつかくの作戦が無駄になっちゃたじゃない!!それにあの攻撃で邪神級のモンスターが四散するってどういうことよ!!しかもそのせいでさっきのクラゲちゃんか吹っ飛んだじゃない!!どうによ!!あなたn——」

キ「長い長いから」

カ「んあ?なんかクラゲがきたぞ」

リ「うにやー!!あなたのせいで攻撃してくるわあ!!」

ユイ「大丈夫ですこの子怒っていません」

カ「とりまこれで大丈夫か」

邪神ってあんなに弱いんだな

『『『あなた』』』が規格外すぎんだよ!!』』』

むう

.....